

筑波大学博士（国際日本研究）学位請求論文

日本人大学生による初対面以降の会話に  
おける話題選択と話題導入の研究

方 敏

2021 年度

# 目次

序章 本研究の研究背景と目的 .....	2
0.1 研究背景 .....	2
0.2 研究目的と研究課題 .....	4
0.3 本研究の構成と各章の概要 .....	5
第1章 先行研究と本研究の位置付け .....	9
1.1 話題に関する先行研究 .....	9
1.1.1 初対面会話における話題に関する研究 .....	9
1.1.1.1 話題選択に関する研究 .....	9
1.1.1.2 話題導入に関する研究 .....	12
1.1.2 初対面以降の会話における話題に関する研究 .....	16
1.1.2.1 縦断的会話分析 .....	16
1.1.2.2 横断的会話分析 .....	18
1.2 先行研究の問題点と本研究の位置付け .....	20
第2章 研究方法 .....	24
2.1 分析の手法 .....	24
2.1.1 談話分析と会話分析 .....	24
2.1.2 本研究の分析手法 .....	26
2.2 会話資料と文字化方法 .....	27
2.2.1 データの種類 .....	28
2.2.2 本研究で用いる会話資料の収集方法 .....	28
2.2.3 会話後の調査及び結果 .....	30
2.2.4 文字化方法 .....	33
2.3 データの整備の方法 .....	34
2.3.1 分析単位 .....	34
2.3.2 話題の定義 .....	35
2.3.3 話題の認定 .....	36

2.3.4	話題導入部と話題導入発話の認定 .....	40
2.3.4.1	発話文の定義と認定 .....	40
2.3.4.2	話題導入部と話題導入発話の定義と認定基準 .....	41
第3章	話題の種類からみる話題選択 .....	46
3.1	話題の種類に関する研究と本研究の位置付け .....	46
3.2	分析方法 .....	47
3.3	分析結果 .....	48
3.3.1	各会話における話題項目及び話題カテゴリーについて .....	48
3.3.2	初対面会話と2回目以降の会話における話題選択の異同 .....	55
3.3.3	初対面会話と2回目以降の会話における話題の踏み込み方の相違 .....	56
3.4	考察 .....	64
3.5	まとめ .....	66
第4章	直前の話題との関連の有無からみる話題選択 .....	68
4.1	直前の話題との関連の有無に着目した研究と本研究の位置付け .....	68
4.2	分析方法 .....	70
4.2.1	直前の話題との関連の有無による分類 .....	70
4.2.2	分析の観点 .....	76
4.3	分析結果 .....	77
4.3.1	会話回ごとの話題選択の型の使用傾向 .....	77
4.3.2	話題選択の型と話題の種類つながり .....	78
4.3.3	プライバシーにかかわる話題と直前の話題との関連性 .....	83
4.4	考察 .....	87
4.5	まとめ .....	89
第5章	質問文による話題導入 .....	92
5.1	質問文による話題導入に関する研究と本研究の位置付け .....	92
5.2	分析方法 .....	93
5.2.1	質問文の定義と認定基準 .....	93
5.2.2	分析の観点 .....	96

5.3	分析結果.....	96
5.3.1	会話回ごとの質問文による話題導入数とその割合 .....	96
5.3.2	質問文による導入話題の種類 .....	97
5.3.2.1	初対面会話における質問文による話題導入.....	98
5.3.2.2	2回目以降の会話における質問文による話題導入 .....	99
5.3.3	質問文による話題導入のストラテジー .....	105
5.3.3.1	初対面会話における話題選択の正当性を示すストラテジー .....	105
5.3.3.2	2回目以降の会話における相手の反応に同調を示すストラテジー ....	107
5.4	考察.....	110
5.5	まとめ .....	112
第6章	平叙文による話題導入.....	114
6.1	平叙文による話題導入に関する研究と本研究の位置付け .....	114
6.2	分析方法.....	115
6.2.1	平叙文の定義と認定基準 .....	116
6.2.2	分析の観点.....	116
6.3	分析結果.....	116
6.3.1	会話回ごとの平叙文による話題導入数とその割合 .....	116
6.3.2	平叙文による導入話題の種類 .....	117
6.3.2.1	初対面会話における平叙文による話題導入.....	118
6.3.2.2	2回目以降の会話における平叙文による話題導入 .....	120
6.3.3	話題間の一貫性を保つ平叙文による話題導入のストラテジー.....	128
6.4	考察.....	131
6.5	まとめ .....	132
第7章	独話的発話による話題導入.....	134
7.1	独話的発話による話題導入に関する研究と本研究の位置付け .....	134
7.2	分析方法.....	135
7.2.1	独話的発話の定義と認定基準 .....	136
7.2.2	分析の観点.....	137

7.3	分析結果.....	137
7.3.1	会話回ごとの独話的発話による話題導入の出現傾向と下位分類.....	137
7.3.2	独話的発話に対する聞き手の反応.....	139
7.3.2.1	独話的発話として扱われない場合.....	139
7.3.2.2	独話的発話として扱われる場合.....	143
7.4	考察.....	149
7.5	まとめ.....	151
終章	本研究のまとめと今後の展望.....	154
8.1	本研究のまとめ.....	154
8.2	本研究の意義.....	158
8.2.1	対人関係構築に関する研究への貢献.....	158
8.2.2	日本語教育への示唆.....	160
8.3	今後の展望.....	162
付録	.....	165
付録1	初対面会話用のアンケート調査.....	165
付録2	初対面会話用のインタビュー.....	168
付録3	2回目以降の会話用のアンケート調査.....	170
付録4	2回目以降の会話用のインタビュー.....	173
参考文献	.....	176
既に刊行された論文及び学会発表との関連	.....	187
謝辞	.....	189

# 序章

## 本研究の研究背景と目的

## 序章 本研究の研究背景と目的

本章では、本研究における研究背景、研究目的及び研究課題を述べたうえで、論文の構成と各章の概要を説明する。

### 0.1 研究背景

2008年、日本政府は「グローバル戦略」の一環として、30万人の留学生を2020年までに国内で受け入れるとした「留学生30万人計画」を策定した（文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省2008）。これ以降、大学をはじめとする教育機関において外国人留学生の受け入れが急増し、2019年には国内留学生数が31万人に達した（「留学生30万人計画」関係省庁会議2021）。来日する留学生の数が大幅に増加したことで、留学生と日本人学生との接触機会も増えていることが予想される。しかし、留学生と日本人学生の対人関係が円滑に進んでいない現状が先行研究によりしばしば指摘されている（小松2016、殷・青木2018など）。私たちの日常生活の中で何もより重要なのは円滑な対人関係である（後藤・大坊2008:44）ことを踏まえると、留学生と日本人学生の対人関係上の問題点を取り上げ、その問題に向けた研究の必要があると考えられる。

対人関係上の問題点について、後藤・大坊（2003、2008）では、特定の相手に対する、特定の場面でのコミュニケーションが苦手であるという点は多くの人に共通していると述べられている。つまり、話者の母文化や母語に関係なく、対人関係上の問題点には一定の共通性があると言える。具体的に言えば、後藤・大坊（2003、2008）では、相手のことが分からない初対面の関係において、日本・中国の大学生のコミュニケーションには困難が生じると述べられている。さらに、ある程度は知っているがそれほど馴染みがない人との会話は初対面会話よりも難しく、そこでは「初対面の人物とのコミュニケーション以上に高度な対人的スキル」（後藤・大坊2003:61）が求められる。また、馴染みのない既知の相手との会話の困難さについては、大場（2012）や渡部（2018）も指摘している。つまり、日本・中国のいずれの大学生も、初対面の相手との会話より何度もあったことがある知り合いとの会話に対して苦手意識を持っている可能性が示唆される。

大場（2012）は、初対面会話では「どのようなやりとりが行われるかは参加者にあ

る程度は予測されうる」が、「初対面ではないものの友人といえるほど親しくはない」知り合い程度の間関係の会話では「何者としてどのように話すのかという調整が実は難しい」と述べている（大場 2012:4）。また、渡部（2018）は、2回目以降の人とのコミュニケーションに対して恐怖心が生じやすい現象を「二度見知り」として取り上げ、日本人大学生の「二度見知り」が生じる最も大きな理由は、コミュニケーションにおける話題に困るといった問題であると指摘している（渡部 2018:221）。

以上より、大学生が初対面の人や数回顔を合わせた程度の知り合いとのコミュニケーションには苦手意識を持っていることに加え、知り合い同士の会話は初対面会話よりも難しく、円滑な会話のために高いコミュニケーション・スキルを必要とすることが分かる。ここから、対人関係の問題を取り扱う会話の研究においては、初対面関係だけでなく知り合い同士という関係における会話（以下、初対面以降の会話）も分析対象に含める必要がある。

筒井（2012）が述べるように、話題なくして会話は成立しない。初対面以降の会話における「何について」「どのように」話すのかが分からないというコミュニケーション上の問題は、「何について」の話題を選択して、「どのように」始まり、継続し、終わっていくかということに反映される。まず、「何について」話すのかは選択される話題に対応する。さらに、話題選択は「どのような話題を選択するのか」と「どのように話題を選択するのか」に大別される。「どのような話題を選択するのか」は、どのような話題を取り上げて良いか／回避すべきかという話題の内容にかかわるものである。一方、「どのように話題を選択するのか」は、新話題の選択に際して、直前の話題から派生した話題間の一貫性を保ったものであるか／直前の話題には関係のないものであるかという、直前の話題と新話題の関連にかかわるものである。

また、「どのように」話すのかは、話題がいかに導入、展開、終了するかに対応する。後藤・大坊（2008:46）が知り合いに対する話題の切り出し方が困難であることを指摘しているから、話題導入、話題展開、話題終了の中でも、話題導入の困難性が示唆される。話題導入が行われないと、話題展開、話題終了という言語行動を取ることはできないから、話題導入は、ある話題について会話をするための第一歩と言えるだろう。さらに、話題導入には会話の主導権が反映されることが指摘されている（宇佐美 1993a、三牧 2013）。会話参加者は、相手に対して強力に働きかける情報要求や状況提供によって話題を導入することで、会話の流れをコントロールすると言える。一方で、話題



導入は会話参加者の合意により協働で作りに上げられるものである。一方の会話参加者が提示した話題をもう片方が承認することで、会話における話題が確立される。このとき、全ての話題が承認されるわけではない。提示された話題が相手の私的領域（鈴木 1997）に立ち入っていたり、直前の話題には全く関連がなかったりすると、相手に拒否されて話題化できない可能性がある。そこで、提示した話題が相手に受け入れられるように、話題を導入する者（以下、話題導入者）は、相手に配慮を示しつつ会話を進めなければならない。

このような背景から、日本語母語話者の会話における話題選択と話題導入の特徴を明らかにして、日本語教育の現場に応用する必要がある。また、母語話者—学習者間の会話を対象としてコミュニケーションの問題点を探るのではなく、母語話者同士の会話を対象として日本語会話の特徴を描き出すことに重点を置くことで、学習者に対して会話の知識を提示するといった日本語教育上の実質的な貢献が可能となる。

## 0.2 研究目的と研究課題

以上のような問題意識を出発点とし、本研究では、初対面以降の会話において日本語母語話者が「何について」「どのように」話すか解明することを目的とする。具体的には、日本人女子学生による初対面から4回目までの会話を対象に、話題選択と話題導入という2つの観点に分けて分析を行う。

「何について」話すか、すなわち、話題選択の分析は「どのような話題を選択するのか」「どのように話題を選択するのか」に大別される。そこで、前者に関しては選択される話題の種類を提示することで話題の内容を明らかにする。後者に関しては話題間の連続性・非連続性に着目し、直前の話題と新話題の関連について明らかにする。

「どのように」話すのか、すなわち、話題導入の分析では、筒井（2012）を援用して、話題導入発話を分類する。筒井（2012）では話題導入発話が「質問」「報告」「独り言」の3つに分類されており<sup>1</sup>、本研究ではそれぞれ「質問文」「平叙文」「独話的発話」と呼ぶ。筒井（2012）はこの3分類について「相手とのやりとりを指向する対話と相手の応答を求めない独話という観点から対立的である」と述べ、質問文と平叙文

---

<sup>1</sup> 筒井（2012）は、話題導入発話を「質問」「報告」「独り言」「共有」の4種類に分類しているが、最大4回しか会っていない本研究の会話参加者には共通体験がほとんどなく、そうした話題もほとんど見られないため「共有」を分析対象外にする。

について「相手の情報を得ようとするか、相手に情報を与えようとするか点で区別される」と述べている（筒井 2012:56）。つまり、質問文と平叙文は相手に応答を求める応答要求文であり、独話的発話は相手には応答を求めない応答不要文と言える。

上記を踏まえて、本研究では以下の5つの研究課題を立てる。以下、課題1、2は話題選択、課題3、4、5は話題導入に関するものである。

課題1：どのような話題が選択されるか解明する。（第3章）

課題2：どのように話題が選択されるか解明する。（第4章）

課題3：質問文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。  
（第5章）

課題4：平叙文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。  
（第6章）

課題5：独話的発話による話題導入がどのような場合に行われるか解明する。  
（第7章）

### 0.3 本研究の構成と各章の概要

以下に、本研究の構成と各章の概要を述べる。

第1章では、話題に関連する先行研究を概観し、話題選択と話題導入に関する問題点を指摘した上で、本研究の位置付けを行う。

第2章では、本研究における研究方法を述べる。まず、談話分析、会話分析のアプローチを概観し、本研究で採用する手法を示す。そして、会話資料の収集からデータ整備までのプロセスを述べる。具体的には、会話実験の実施方法、調査対象者の属性、文字化の規則、アンケートとフォローアップインタビューの実施方法を示す。そして、話題認定、話題導入部と話題導入発話のコーディング方法及び結果を述べる。

第3章、第4章では話題選択に関する分析結果を示す。

第3章では、選択される話題の内容を明らかにするため、3つの分析観点を設けて考察する。まず、初対面から4回目までの会話における話題選択の様相を示すため、参加者5組の会話における話題を会話回ごとに抽出し、リスト化する。リスト化する際には、抽出した話題に対して話題項目ごとのラベル付けを行う。さらに、内容の関連性から話題項目を話題カテゴリーにまとめる。次に、初対面会話と2回目以降の会

話について、会話回ごとに各話題カテゴリーをリスト化することで、選択される話題の相違を分析する。最後に、初対面会話と2回目以降の会話における話題の踏み込み方について、質的分析から相違を明らかにする。なお、ここでいう「話題の踏み込み方」とは、話題の内面性への立ち入りを指す。

第4章では、会話における話題間の関連性を明らかにするため、直前の話題と新話題の関連に着目し、3つの観点から分析する。まず、直前の話題と新話題が関連しているかどうかによって話題選択の型を分類して傾向を述べる。次に、話題選択の型と話題内容の関連に着目し、初対面会話と2回目以降の会話における話題選択の型の相違を述べる。最後に、プライバシーにかかわる話題がいかに選択されるかを分析する。

第5章から第7章では、話題が導入される過程に関する分析結果を示す。

第5章では、質問文による話題導入に着目し、話題内容と導入ストラテジーを分析する。まず、質問文の定義と認定基準を示したうえで、質問文による話題導入数と話題導入における質問文の割合を示し、会話回ごとの変化を示す。次に、話題内容に焦点を当て、どのような話題が質問文の形で導入されるか分析する。最後に、初対面会話と2回目以降の会話について導入ストラテジーの相違を解明する。

第6章では、平叙文を用いた話題導入のあり方とその導入ストラテジーを解明する。まず、平叙文の定義と認定基準を示し、会話回ごとの使用傾向を調べる。次に、話題内容に焦点を当て、初対面会話と2回目以降の会話における平叙文の話題内容の相違を述べる。最後に、平叙文による話題導入のストラテジーを分析する。

第7章では、独話的発話による話題導入に着目し、独話的発話がどのような場合に行われるのか、また、独話的発話に対する聞き手の反応を記述する。まず、独話的発話の定義と認定基準を示したうえで、独話的発話によって導入される話題内容を分類して傾向を述べる。次に、独話的発話に対する聞き手の反応について、独話的発話として扱われる場合と扱われない場合に分け、独話的発話の後の話題展開を分析する。

終章では、本研究の意義と今後の展望を述べる。

第3章から第7章までで示す本研究の全体像は図0-1のように記されている。

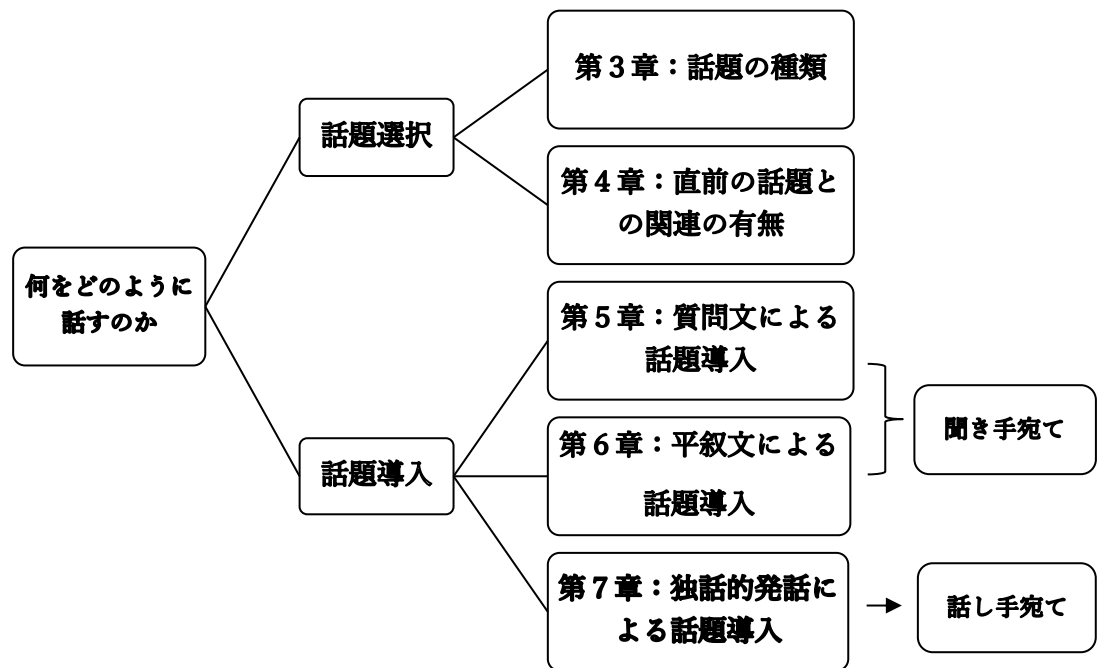


図 0-1 本研究の全体像

## 第 1 章

### 先行研究と本研究の位置付け

## 第1章 先行研究と本研究の位置付け

本章では、話題に関する先行研究を概観し、本研究の位置付けを行う。まず、1.1節では、話題に関する研究の概観に際し、研究対象により初対面会話と初対面以降の会話に分け、それぞれ話題選択と話題導入という2つの観点から紹介する。続いて1.2節では、話題選択と話題導入に関する研究の問題点を指摘し、本研究の位置付けを行う。

### 1.1 話題に関する先行研究

本節では、研究対象により初対面会話と初対面以降の会話に大別し、話題選択と話題導入に関する研究の概略を紹介する。なお、本研究と関わりの深い先行研究の詳細なレビューは第3章以降の章で行う。

#### 1.1.1 初対面会話における話題に関する研究

従来の話題に関する研究には、初対面会話を対象にしたものが圧倒的に多い。以下話題選択と話題導入と2つの観点に分け、先行研究を紹介する。

##### 1.1.1.1 話題選択に関する研究

序章で述べたように、話題選択は「どのようなものを選択するのか」と「どのように選択するのか」に大別される。まず、「どのようなものを選択するのか」という話題内容に関する研究を概観する。

話題内容に関する研究は、主にどのような話題が適切・不適切であるかをめぐって論じられており、大きく意識調査と実際の会話に基づいた研究に分類できる。

意識調査を行なった研究として、西田(1996)、全(2009)が挙げられる。

西田(1996)は、91個の話題からなる調査票を用いて、初対面会話を「0分から5分」「6分から15分」「16分から30分」という3つの時間帯に分け、日米の話題開示の順番と情報開示量を調べている。その結果、日米に共通するのは、時間の経過とともに話題選択が表面的なものから親密的なものへ変化するものである。一方、アメリカと異なり、日本人の場合は、「住所」「通学手段」など相手の背景に関する話題は重要であり、0～5分間の時間帯に選択される傾向がある。また、初対面会話では話さな

い話題はアメリカ人より日本人のほうが圧倒的に多い。ただし、西田（1996）では話題として話さない項目が列挙されておらず、どのような話題が回避されているのかは未だ明らかになっていない。

この点について、全（2009）は、初対面会話における話題回避に焦点を当て、話題回避とその理由への解明を目的とし、同一話題を取り上げ方により「聞かれて答えにくいと思う項目」「相手に聞くのが失礼だと思う項目」に分類し、その結果、話題に対する意識が取り上げ方に影響されると指摘している。また、話題の取り上げ方と関係なく、「収入」「恋人の有無」「宗教」などプライベートと思われる話題は回避される傾向があるという。全（2009）は話題回避と回避意識を解明した点では意義が大きいと言えるが、話題の取り上げ方は質問の形で導入されるものしか取り扱わず、自ら情報提供を行うものには言及していない。

以上、話題内容に関する意識調査の研究を概観した。調査法により、選択されやすい話題だけでなく、回避される話題及び回避意識を明らかにすることができ、示唆に富むが、話題項目の設定基準が曖昧で、話題項目が不十分であるという問題点が無視できない。さらに、実際の話題選択と選択意識がずれてしまう場合もある。よって、従来の話題に関する研究においては、実際の会話における話題内容に関心が寄せられてきた。実際の会話に基づいた研究には、単一の母語場面や異なる母語場面間の対照研究もあれば、接触場面における母語話者と日本語学習者の会話の話題内容に注目した研究もある。

単一の母語場面の話題内容に着目した研究のうち、その代表的なものとして三牧（1999）が挙げられる。

三牧（1999:50）は、「会話の中で導入、展開された内容的結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」と話題を定義づけ、初対面会話では23話題項目と8話題カテゴリーからなる話題選択スキーマの存在を実証した。さらに、三牧（1999）は政治、宗教などの話題を回避すると指摘している。三牧（1999）による話題の定義と初対面話題選択スキーマが、後続の話題に関する研究に大きな影響を与えている。例えば、異文化間での話題選択の対照研究を行った張（2006、2008）、趙（2014）、蔡（2011a）などはいずれも三牧（1999）による話題の定義を援用している。

張（2006）は、三牧（1999）の話題の定義に従い、話題を「セッティングトピック」

「百科事典的トピック」「自己に関するトピック」「相手に関するトピック」「第三者に関するトピック」に分類し、台湾と日本の女子大生同士による母語場面の初対面会話では、話題タイプの選択順位が同じく、「相手に関するトピック」は最も多いとしている。「相手に関するトピック」は質問により導入されるため、初対面会話では質問による話題導入が多いことを示唆している。

さらに、張（2008）は三牧（1999）の話題選択スキーマを踏まえ、初対面会話を5分ごとに区切って、時間の推移による話題内容の変化を比較する。台湾人グループは会話の最初において「出身」「居住」を取り上げる傾向があるのに対して、日本人グループは終始「大学生活」を話題にする。時間の推移とともに日中の話題の取り上げ順序が異なるが、話題選択スキーマがほぼ共通していると述べている。この点については、趙（2014）も同じ結論を出し、日中の話題選択スキーマが類似している要因について、日中は高コンテクスト文化のグループに属しているからであると解釈している。

そして、大学生同士の会話を対象にした張（2006、2008）と趙（2014）と異なり、蔡（2011a）は、三牧（1999）による話題の定義を援用し、日中の社会人の会話を対象に、日中の話題選択の相違を分析している。その結果、日本の社会人の会話では、相互にプライベートな情報には最小限に触れるか、あまり触れないとしている。これらの話題は、大学生同士の会話でも回避される（三牧1999）ため、プライベートな話題の回避は、大学生や社会人という社会的属性と関係なく、日本社会における一般的な知識として認識される。

また、接触場面を分析対象とする金（2009）、関崎（2016）などは、三牧（1999）の話題選択肢リストと対照しつつ、接触場面における話題選択の傾向を解明している。

金（2009）は、三牧（1999）を参考に、会話から話題項目と話題カテゴリーを立て、日韓の接触場面の初対面会話では、日本語母語場面で回避されるプライバシーにかかわる話題が、相手への距離の短縮をしようとするポジティブ・ポライトネスストラテジーとして選択されると述べている。

また、関崎（2016）は、初中級レベルの日本語学習者と日本人学生との会話を対象に、接触場面と母語場面の三牧（1999）の話題選択のリストを比較しつつ、「気候」「言語学習」「交友関係」など接触場面でしか取り上げられていない話題を観察し、接触場面においても話題選択スキーマが存在することを検証している。ただし、金（2009）とは異なり、関崎（2016）では、日本語母語場面で回避される「恋人の有無」のよう



なプライバシーにかかわる話題は接触場面でも話題化されていない傾向がある。その一因は、多くの話題が日本人学生によって導入されるからであると述べられている。

以上概観した金（2009）と関崎（2016）により、参加者の背景や相互行為が話題選択に影響を与えるため、接触場面における話題選択は母語場面とは相違がある。また、関崎（2016）により、接触場面でも日本人は母語の文化習慣に影響されることが分かる。

次に、「どのように話題を選択するか」に関する研究を紹介していく。「どのように話題を選択するか」に関するものは数少ないが、代表的な研究として三牧（1999）が挙げられる。

三牧（1999）は、大学生初対面会話において話題の選択源と話題内容をもとに、話題がどのように選択されるか考察する。話題の選択源を踏まえ、文脈との関連性の有無により「直前の発話の取り立て」「<基本情報交換期>で獲得した情報の中から選択」「選択肢リストから選択」に分ける。さらに、話題内容に注目し、「共通点を探索し、強調する」「相違点に関心を示す」「危険な話題を回避する」に分類する（三牧 1999:52-54）。

先述したものをまとめると、初対面会話における話題選択に関する研究は「どのようなものを選択するか」と「どのように選択するか」に大別されている。また、後者より前者について多くの研究がなされており、母語場面と接触場面の話題選択スキーマの存在が検証されている。

#### 1.1.1.2 話題導入に関する研究

本節では話題導入に関する研究を概観する。先行研究の概観に際して、話題開始部の範囲を定めなければならない。話題開始部の範囲は、研究者により異なる部分があるが、大まかに広義の意味と狭義の意味で捉えるものに分類できる。さらに、広義の意味で捉えるものは研究者により再分類できる。

まず、話題開始部を広義に捉える先行研究として、村上・熊取谷(1995)<sup>2</sup>、中井(2003a)、楊(2011)、大谷(2019)が挙げられる。前2者では、話題開始部は「先導一応答」(村

---

<sup>2</sup> 村上・熊取谷(1995)は友人や家族同士の会話を対象にしたが、話題導入の先駆的研究として、後の研究に影響を与えているため、話題導入における重要な概念を紹介する際、取り上げることにする。

上・熊取谷 1995) のような参加者の 1 往復のやり取りからなると捉えている。一方、楊 (2011) と大谷 (2019) は、話題導入がなされたら、必ずしも相手に受け止められるわけではないため、場合によっては話題導入者と相手の 1 往復のやり取りにとどまらず、交渉のプロセスが長くなっていると指摘し、改めて話題開始部の定義と範囲を定めている。

楊 (2011:187) は、話題開始部は「「先導一応答」のように 1 往復のやり取りと規定せず、話題導入発話から話題確立発話までの部分」と定義している。話題確立発話は話題導入がされた後「相手参加者がその事柄について、「具体的に語る」または「導入発話者に関連した質問」をする発話」(楊 2011:189) である。

さらに、大谷 (2019:2, 3) は、話題開始部を「前の話題とは明確な切れ目を示す」という話題境界と判断された箇所後に「新たに会話が始まる部分」と定義づけ、話題開始部は、話題が導入されてから話題化までのプロセスをさす。話題化とは「候補話題が正式に話題として認められて具体的に語られる」(大谷 2019:5) ものである。

このように、楊 (2011) と大谷 (2019) の話題開始部の範囲は、話題が導入されてから話題確立までの参加者のやり取りを指す。

次に、狭い意味で話題開始部を捉える河内 (2009)、若松 (2020)、蔡 (2011b) を紹介する。

河内 (2009:48) は、話題に相当する話段の「開始部分」を「同一話者の 1 文に相当する発話」と認定する。また、若松 (2020) では、話題開始部は話題開始の第 1 発話を指している。河内 (2009) と若松 (2020) の 1 発話文に対して、蔡 (2011b) は、話題開始部は話題転換部の構成要素のひとつとみなし、「相手に働きかける言葉」や「認識の変化を示す感動詞」など言語行動と「笑い」「大きな声」など非言語行動が含まれているという (蔡 2011b:7)。つまり、蔡 (2011b) による話題開始部は接続詞、言い淀みを表す間投詞と笑いなどからなるということである。

以上、話題開始部の範囲に関する研究を概観した。狭義に捉えた河内 (2009)、蔡 (2011b) と若松 (2020) を除き、上述挙げた先行研究に共通しているのは、話題導入は会話参加者の相互行為により成し遂げられるものである。ただし、村上・熊取谷 (1995)、中井 (2003a) による参加者の 1 往復のやり取りと違い、楊 (2011)、大谷 (2019) は、候補話題が導入されてから、すぐ確立されないことがあるため、話題開始部とは話題導入がされてから確立までのプロセスであるとしている。

また、話題開始部のほかに、話題導入における重要な概念として、話題導入発話が挙げられる。ただし、話題導入発話についても、研究者によって異なる見解を示している。

林 (2008)、大場 (2012)、大谷 (2019) などは、話題開始部に現れる第 1 の発話を話題導入発話と見なすのに対して、楊 (2011:187) は話題開始部における「最初の実質的な内容を持った発話」と捉えている。なお、季 (2015) で指摘されているように、話題開始部の冒頭に現れる「そういえばさ」「あ」「そうだ」のような相手の注目を要求する発話は「相手に吹き込むために働きかける合図」であり、話題導入発話ではない。それを踏まえて、話題導入発話を「導入者が何をトピックとして提案しているかが判別できる一まとまりの発話」と定義している(季 2015:87)。

次に、話題導入に関する先行研究を紹介する。研究対象によって、これらの研究は大まかに話題導入発話に着目したものと話題導入の相互行為に着目したものに大きく分類できる。そのうち、従来の研究では話題導入発話に焦点を当てて、話題導入頻度、導入形式、導入形式と話題内容のつながりなど、様々な面から論じられてきた。

まず、話題導入の頻度と導入形式を分析した研究として、宇佐美 (1993a、1993b、1994、1996 など) の一連の研究、奥山 (2005)、林 (2008) などが挙げられる。

宇佐美 (1994) では、ベース話者に、性別・上下関係が異なる相手を割り当て、相手に応じたベース話者の話題導入の頻度や形式などの相違を分析し、初対面会話におけるストラテジーの使用を考察した。宇佐美の一連の研究により、話題導入が年齢差と性差に影響されることを示唆している。また、宇佐美・嶺田 (1995) では、日本語母語話者同士による初対面会話の話題導入は質問が大半を占めるという。

奥山 (2005) と林 (2008) はポライトネスの観点から日韓の話題導入の相違を分析し、質問文によって話題導入をする際に、韓国人と比べ日本人はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを重視すると指摘している。

次に、話題導入形式と話題内容とのつながりを分析した研究は少なく、管見の限り、宇佐美・嶺田 (1995)、中井 (2003b) と奥山 (2000) のみである。そのうち、宇佐美・嶺田 (1995)、中井 (2003b) は質問文による話題導入の内容にのみ着目し、平叙文による話題導入には触れていなかった。また、奥山 (2000) は、初対面会話の開始から

の5分間を分析対象とし、質問文と平叙文<sup>3</sup>による話題内容を分析したが、話題内容は属性、属性派生、非属性に分け、「ボーイフレンドやアルバイト、就職に関するいわゆる私的話題」(奥山 2000:125)を「非属性話題」に一括りにする点からして、話題内容の分類が精緻的でないという問題点がある。

以上概観した話題導入に関する研究は話題導入発話に着目したものである。一方、話題導入が参加者の相互行為により作り出されたものを強調し、参加者のやりとりを分析する研究がある。話題導入発話に着目した研究と比べ、参加者のやり取りに焦点を当てたものは少ないが、代表的なものとして楊 (2011)、季 (2015)、大谷 (2019)が挙げられる。

楊 (2011) は、参加者の相互行為の特徴により話題開始を「即時的開始」と「漸次的開始」に分類し、さらに、「漸次的開始」を「質問一応答連続型」「相互型」「確認連鎖挿入型」に下位分類し、日中の話題導入の相違を述べている。日本語母語場面では、基本的な話題開始パターンはないが、中国語と比べ、「漸次的開始」の下位分類の「相互型」の割合が高い。話題が即時に確立されない場合、話題導入者が「会話を過度にリードせず」、「相手の出方を窺いながら徐々に情報を付加していき、強く働きかけることを避け相手と一緒に話題を徐々に確立していく傾向」(楊 2011:196)があると指摘している。

季 (2015) は、楊 (2011) の「分類の仕方は話題の導入から確立までのやり取りの回数だけに着目し、そのやりとりの意味合いを重視していない」と指摘し、話題開始部に相当する話題導入部は段取り I (話題の導入から導入の合意まで) と段取り II (導入の合意から話題の話題確立まで) に分け、参加者のやり取りの有無と往復数という2つの基準をもとに、話題開始を「即時的確立」「漸次的確立」「合意遅れ」「確立遅れ」に分類している(季 2015:95)。ただし、「導入の合意」という用語の定義は明示されず、「導入の合意」と「話題の確立」の使い分けが明確でないという問題点がある。

楊 (2011) と季 (2015) は話題開始の類型化とその使用傾向に焦点を当てており、参加者の相互行為については詳細に分析していなかった。一方、話題導入から話題確立までの参加者のやり取りを質的に分析し、話題導入者によるストラテジーを論じるのは大谷 (2019) が挙げられる。

---

<sup>3</sup> 奥山 (2000) は、話題導入形式を質問文と自己開示に分けた。自己開示で話題が始まる場合は平叙文による導入に相当する。

大谷（2019）では、導入された候補話題に対し、相手が肯定的に反応し、積極的に話題に関与する場合もあれば、否定的反応で話題を受け入れない場合もある。話題導入者は常に相手の反応を見ながら、段階的話題を導入し続ける。そして、相手が候補話題に消極的反応を示し場合、導入者はより具体化的に問い直し、話題を再導入したり、話題を差し替えたりすることで会話を促進させると述べられている。大谷（2019）は、話題開始部の参加者の相互行為に着目し、話題化になるまでの話題導入者によるストラテジーを詳細に記述した上で、話題導入際の対人的配慮を考察した点で意義が大きい。ただし、大谷（2019）の話題開始部は「前の話題とは明確な切れ目を示す「境界づけられたトピック推移」の開始部」（大谷 2019:2）に限定しているため、直前の話題と切れ目のない話題導入には言及していなかった。さらに、大谷（2019）の分析対象は3人間会話であり、参加者の役割を話し手と聞き手と傍参与者に分類しており、話し手と聞き手のみである2者間会話における話題導入のストラテジーについては再検討する余地があると考えられる。

以上、初対面会話における話題導入に関する重要な概念と主な研究を概観した。まず、話題開始部の範囲と話題導入発話の定義については、研究により異なる視点で論じられており、一致していないことが確認できた。次に、話題導入に関する研究は、分析内容により、大まかに話題導入発話に着目したものと話題導入際の参加者の相互行為を分析したものに大別できる。これまでの研究では、話題導入発話に焦点を当て、導入頻度、導入形式、導入形式と話題内容とのつながりなどがよく論じられてきた。一方、話題導入から確立までの参加者の相互行為に着目し、話題導入者のストラテジーを論じるものは数が少ない。

### 1.1.2 初対面以降の会話における話題に関する研究

本節では初対面以降の会話を対象とした話題に関する研究を概観する。研究対象により、縦断的会話分析と横断的会話分析に大別した上で、話題選択と話題導入という2つ観点に分けて、それぞれ紹介する。

#### 1.1.2.1 縦断的会話分析

初対面からの縦断的会話を対象にする研究は少なく、そのうち話題選択にかかわるのは、呉（2017）と谷（2011、2012、2016）であり、話題導入に関するものは、蔡（2016）

と呉（2017）である。まず、「話題選択」に着目する呉（2017）と谷（2011、2012、2016）を紹介する。

呉（2017）は、日韓の初対面から3回にわたる会話を対象に、話題の種類の変化を調べた。会話の回数が増加とともに日韓のいずれにおいても話題数が減少し、1つの話題が長く続くようになる。一方、韓国の2回目以降の会話では「日常」「休日の過ごし方」などプライバシーにかかわるものが多く選択されているが、日本語会話における話題には「授業」など大学生活に関するものが多いと述べている（呉 2017:72）。呉（2017）が時間の推移による話題の内容の変化を解明した点については有意義であるが、話題の命名と分類基準については明示されていないため、例えば、取り上げる「論文」「修士論文」にはどのような違いがあるか、「修士論文」は「論文」の下位種類として位置付けるか否かなどを検討する余地があると思われる。また、呉（2017）は母語場面の各1組のデータしか収集していないため、その結論は参加者の個性に影響されやすいという懸念がある。

さらに、谷（2011、2012、2016）は宇佐美（2001）によるディスコースレベルのポライトネスの観点から、日本語母語話者による3組の初対面から8回までの会話を対象に、組ごとの選択話題を切り口に、談話におけるデフォルトを検討している。ただし、谷の一連の研究では、会話参加者は収録以外にも接点を持つことがあるため、収録回数は実際の接触回数とはずれがあり、話題選択の変化は会話実験か収録以外の接触かどちらかに影響されるのかは言い難いと考えられる。

以上、話題内容に着目した話題選択に関する研究を概観した。次に、話題導入に関する蔡（2016）と呉（2017）を紹介する。

蔡（2016）は、台湾と日本人の1組の初対面から3回目までの会話の中で、会話の回数の増加につれて、話題導入がうまく行われな割合が減少する。また、話題導入がうまくできない要因は、先行話題が終了しうる箇所で、新規の話題が見つからないことであると指摘している。

また、先に取り上げた呉（2017）は、話題導入にも言及し、話題導入を質問と開示に分け、会話の回数を重ねるとともに日韓ともに質問による導入は減っていく傾向があると述べている。

以上、縦断的な会話における話題選択と話題導入に関するものを概観した。縦断的な会話を対象にした研究は数少ない上に、谷の一連の研究を除いたものは1組の会話資

料しか分析していない。また、話題選択に関する研究は、いずれも「どのようなものを選択するか」を解明したものであり、「どのように選択するか」には言及していなかった。そのため、初対面から縦断的な会話を対象とする話題に関する研究は、まだ十分とは言えない。

### 1.2.2.2 横断的会話分析

本節では横断的会話に着目し、話題選択と話題導入に関する研究を概観する。この横断的会話分析は、友人や家族同士の会話を対象にしたものだけでなく、初対面と友人同士会話との比較研究なども含まれる。

まず、話題選択に関する研究は「どのようなものを選択するか」と「どのように選択するか」に分け、それぞれ紹介する。

「どのようなものを選択するか」について、意識調査を行う Barnlund (1975) がある。Barnlund (1975) は、日米の言語行動の同異点を解明するために、誰に何についてどの程度に話すのかについて、大学生を対象とした質問紙調査を行った。その結果、日米いずれにおいてもどのような話題が適する・適さないかという指向が類似しており、金銭問題、身体的過不足などより、趣味・嗜好、仕事などの話題が好まれる。さらに、相手により話題選択が異なり、特定の相手に対して、特定の話題が取り上げられやすい。例えば、日本人の場合、金銭問題や身体的特性は友人より母親に話す傾向にある。なお、「話題にみる表出の深度」について、初対面会話では、自己に関する話題が少なく、形式的な話が多い。接触回数の増加とともに、だんだん意見や気持ちが話されるようになり、個人的なものに関する話題が多くなる。そして、「話題の焦点が変わるだけでなく、一つひとつの話題についてその深度も時間の経過とともに、増加する」(Barnlund 1975:100、101)。Barnlund (1975) により、会話参加者は相手に応じて選別的に話題を取り上げることが明らかとなった。また、会話の回数の増加につれて、話題の種類がもっと個人的なものになり、ひとつの話題への踏み込み度合いも大きくなることを示唆している。

次に、「どのように選択するか」に関する研究として、南(1981)と村上・熊取谷(1995)を取り上げる。南(1981)は、隣接する話題の関係性に着目し、先行話題の内容との関連の有無により話題を「連続」と「断絶」に分類し、さらに「断絶」を「新出」と「再出」に下位分類している。

南（1981）の分類を踏まえ、村上・熊取谷（1995）は、話題を「派生型」「新出型」「再生型」に分け、この3種類において直前の話題との結束性に強弱の違いがあると指摘している。なお、話題間の結束性の強弱により、後続話題導入際に用いられる言語・非言語表現や話題導入のやり取りのプロセスの長さが異なると述べている。このことから、直前の話題との関連の有無は話題導入に影響を与えることが分かる。

以上、話題選択に関する研究を概観した。次に、話題導入に関するものを紹介する。まず、知り合い同士の会話に着目した研究は数少なく、管見の限り、大場（2007、2012）のみである。

大場（2007、2012）は日本語教師の経験に基づき、日本語学習者は、初対面会話では無難に話題を持ち出すが、次の段階における会話は難しいと指摘し、母語場面と接触場面の知人関係の3者会話を収集した。話題導入発話と応答発話に着目し、発話の頻度、方向や種類などの観点から母語場面と接触場面の相違を比較し、3者会話における話題導入の特徴を明らかにした。ただし、話題導入発話と応答発話の1往復のやり取りにのみ分析し、話題導入プロセスの詳細な記述は行っていなかった。

また、独話的発話による話題導入に関する研究として筒井（2012）が挙げられる。従来の話題導入に関する研究は、対話性を重視し、相手への情報要求か情報提供するというやり取りについてよく論じてきた。これに対して筒井（2012）は、友人同士の会話を対象とし、独話的発話からはじまる連鎖組織を分析し、独話的発話による話題導入は「次になされるべき発話への制約が緩いため、話題提示としては、他の会話参加者の意向を尊重することのできる方法である」（筒井2012:252）と指摘している。このことから、相手に応答を求めない独話的発話による話題導入は相手への働きかけを軽減する機能を持つことが分かる。

このほか、話題導入際の言語・非言語表現を論じた研究には花村（2015）がある。花村（2015）は後続話題導入際に用いられる言語・非言語表現の必要・不要は、話題の現場性に影響されており、会話現場のものが話題として取り上げられると、話題開始表現が不要となると指摘している。このように、話題の種類も話題導入に影響を及ぼすことを示唆している。

以上、初対面以降の会話における話題に関する研究、特に話題導入に関係がある研究を概観した。初対面会話を対象とした研究と比べ、初対面以降の会話における話題に関する研究は数少ない。しかも、限られた研究には、多くは友人や家族同士の会話



を分析したものであり、知人関係の会話に触れるのは少ない。そして、本節で概観した研究により、話題の種類、直前の話題とのつながりなどは話題導入のプロセスや話題開始表現の使用に影響することが明らかとなった。また、独話的発話による話題導入は相手を尊重する機能を持つということが確認できた。ただし、これらの友人や家族同士の会話における話題導入の特徴が、知り合い同士の会話では当てはまるかどうかは検証する必要がある。

## 1.2 先行研究の問題点と本研究の位置付け

前節では話題選択と話題導入に関する研究は、初対面会話と初対面以降の会話に分け、それぞれ概観した。これまでの話題に関する研究は、初対面会話を中心に、一定の成果が蓄積されている。

まず、話題選択について、日本語学習者も母語話者も難しいと感じる（田所 2013）ため、従来の研究では「どのような話題を選択するか」「どのように話題を選択するか」という2つ観点から論じられている。

「どのような話題を選択するか」に関する研究は、話題内容に着目し、適切な話題のほかに、避けるべき話題も分析し、一般的知識として共有される話題選択スキーマの存在を指摘しており、「何について話すのか」は明らかにされる（例えば、三牧 1999、趙 2014、関崎 2016 など）。

また、「どのように話題を選択するか」に関する研究は少ないが、代表的なものとして三牧（1999）が挙げられる。三牧（1999）は直前の文脈との関連性と話題内容をもとに話題選択ストラテジーを論じている。

次に、話題導入に関する研究には、導入形式とその頻度を分析したものや導入形式と話題内容とのつながりを論じたものは数多く、初対面会話では相手の情報を引き出す質問文による導入が大半を占めており、「専門」「出身」など当たり障りのない話題が質問文により導入されやすいことが明らかになっている（例えば、宇佐美・嶺田 1995、中井 2003b など）。一方、大谷（2019）で指摘されているように話題導入の相互行為に着目し、話題導入ストラテジーを述べるものは僅かである。

従来の研究には、初対面以降の会話を踏まえ、特に知り合い同士の会話に着目したものは数少ない。そのうち、話題選択に関するものは呉（2017）、谷（2011、2012、2016）の一連の研究しかなくて、話題導入にかかわるものは蔡（2016）、呉（2017）、

大場（2007、2012）のみである。さらに、これらの研究の多くは1組のデータしか分析していなかった。よって、知り合い同士の会話における話題選択や話題導入は未解明だと言える。

序章で述べたように、初対面の人より、それほど馴染みのない知り合い同士の会話においてコミュニケーション上の問題が生じやすい（渡部 2018）。その一因は、知り合い同士の会話では何者として「何をどれだけのよう話すのか」は予測しにくい（大場 2012:5）ことである。このように、初対面会話だけでなく、初対面以降の知り合い同士の会話も取り入れるべきである。

相手との関係によって取り上げられる話題が異なる（Barnlund 1975）ため、初対面会話と2回目以降の会話における話題内容には相違があることを示唆している。さらに、「どのような話題について話すのかによって、話題の切り出し方やその後の展開」などが異なる（筒井 2012:28）ため、話題内容は話題導入に影響を与えるため、初対面以降の会話で「どのような話題を選択するか」という話題内容は最初に解明する必要がある。

また、話題選択をする際にして「どのように選択するか」ということに直面する。ここでの「どのように選択するか」は、直前の話題と導入される直後の話題との意味的なつながりがあるかどうかということである。直前の話題に関連がある話題を取り上げたら、聞き手にとっての情報処理負担が低い（山本 2003）ため、唐突な話題導入により相手に与えるマイナスな印象は軽減されることができよう。よって、直前の話題との関連性という観点から「どのように話題を選択する」を分析することが必要である。

以上概観したように、話題選択が話題導入に影響をするため、先に話題選択に着目し、「どのようなもの」と「どのように」という2つの観点から論じる必要性があることが確認できた。

次に、初対面以降の会話における話題導入形式について、初対面会話と2回目以降の会話には相違がある。初対面会話では背景知識が共有されていないため、相手から基本的な情報を引き出すため、参加者は質問文により話題が導入される傾向がある（宇佐美・嶺田 1995、張 2006）。一方、2回目以降の知り合い同士の会話では基本的な情報が共有されているため、主要な話題導入形式は平叙文になる（大場 2007）。ただし、河内（2003）では、友人同士の会話の中で4割以上の話題が質問文で開始されるとい

う。よって、2回目以降の会話でも質問文による話題導入がよく行われることを示唆している。したがって、2回目以降の会話においてどのような場合に質問文か平叙文により話題導入が行われるか解明する必要がある。

さらに、繰り返しになるが、話題導入は参加者の相互行為によりなされるものである。導入される話題に対して相手が興味を持つかどうかは不明である。よって、候補話題が相手に受け止めてもらうように、話題導入者は相手に配慮する必要がある。なお、万が一候補話題が相手に拒否されたら、別の話題に切り替えるか、それとも当該話題を再導入し、話題化を促進させるのかという問題に直面する。

先述したように、話題導入者は質問文か平叙文という導入形式を選択し、相手に情報を要求したり、自分に関する情報を提供したりする。それと同時に、相手による候補話題への承認をもらい、会話をスムーズに進行させるために、相手に配慮しなければならない。このように、話題導入とは「単に話題を導入して情報交換をするためのプロセスの問題だけではなく、情報交換を行いながら参加者間の心的距離を調節する2つの機能のせめぎあいのである」（大谷 2019:24）ため、日本語学習者にとって困難であると考えられる。

確かに日本語教育へ応用を目的とするならば、日本語学習者と日本語母語話者によるコミュニケーション上の問題点を解明しなければならない。しかし、接触場面でも日本語母語話者は話題選択や導入する際に、母語の文化習慣に影響されやすい（関崎 2016）ため、まず、話し相手である日本語母語話者の会話の特徴を学習者に提示する必要がある。これらを踏まえて本研究では、日本語母語話者の初対面から4回目までの会話を対象に、話題選択と話題導入のあり方を解明する。

## 第 2 章

### 研究方法

## 第2章 研究方法

本章では、研究方法を示す。まず、2.1節では会話を分析する手法を概観し、本研究で使用する手法について述べる。次に、2.2節ではデータの種類、会話資料の収集方法を述べる。最後に、2.3節では話題区分と話題導入の認定基準を述べ、研究方法を示す。

### 2.1 分析の手法

本節では、会話を分析する主な手法を概観した上で、本研究で使用する分析の手法を示す。

#### 2.1.1 談話分析と会話分析

Levinson(1983)によると、会話を分析するには、「談話分析(DA=discourse analysis)」と「会話分析(CA=conversation analysis)」の2つのアプローチがあるという。談話分析と会話分析のそれぞれの特徴と相違について、Levinson(1983)は次のように述べている。

談話分析(discourse analysis, DA)は、言語学に典型的に用いられている理論的基盤や基本的概念と方法論の両方を登用する。すなわち、本質的には、言語学における実りある技法を、文という単位を超えて応用しようとするものである。その手順は、本質的には次のようなものである。

- (a) 基礎的範疇の組あるいは談話単位を取り出す。
- (b) これらの範疇について、範疇の適格連鎖(一貫性のある談話)と、不適格連鎖(一貫性のない談話)を区別するような一連の規則を定式化する。
- (c) 典型的なものとしては、一貫性のある・なし、あるいは、適格、不適格談話において、直観に訴えるということがあげられる。
- (d) 一つないし二、三のテキスト(分析者によって作られたものであることが多い)を取り上げて、その限られた範囲内のあらゆる興味ある特徴を深く分析しようとする。

これに対して、会話分析(conversation analysis, CA)は、Sacks、Schegloff、Jefferson、Pomerantzなどによって開発されてきたが、早まった理論構築を避けようとする、徹頭徹尾経験的アプローチである。その方法は本質的に帰納的である。DA作業は、その

第一段階として、限られた資料を直接範疇化することと対照的に、CAでは、自然に交わされる数多い会話の記録を対象に、繰り返し起こる型を考察する。次に、統語記述で使われる理論上の構築物であるルールの代わりに、二者択一の発話の間での一方の選択が、どういった相互作用的、推論的成り行きをもたらすのかということを強調するのである。さらに、これもDAと対照的であるが、直観による判断に訴えることができるだけ排除する。また、CAでは一つのテキストに基づく分析を避けようとする。詳細な言語現象に関する可能な限りの事例が、いくつかのテキストにまたがって検討される。

(Levinson 1983、安井・奥田 1990 訳 358-359)

Levinson (1983) を踏まえ、橋内 (1999) は背景、目的・方法、方法論などいくつかの面から談話分析(DA)と会話分析(CA)の相違を以下のようにまとめている。

表 2-1 談話分析(DA)と会話分析(CA)の相違

	談話分析	会話分析
学問上の背景	(厳密的意味での) 言語学	社会学(ethnomethodology)
目的と方法	文法論の方法を用いて、談話の文法を記述・説明しようとする	実際のデータを観察しながら、会話のしくみを微に入り細に穿って解き明かす
科学方法論	演繹法を用いる傾向にある	帰納法を用いる傾向にある
研究の手順	限られたデータから仮説を立て、研究者の内省により言語学的な説明を下す	自然談話の膨大な資料から頻度の高い現象に注目してそれを一般化していく
主な概念	結束性 (同一物指示、語彙の結束性など)、情報構造 (旧・新)、発話行為等	話者交代、話題転換、隣接ペア、修復、会話の全体構造 (開始と終結) など

(橋内 1999:56、一部修正)

先述したものをまとめると、談話分析は、談話レベルの文法を研究するものであり、ある仮説を立てて、研究者の内省により検証するという演繹的手法をとる。一方、会

話分析では、日常会話における頻繁に行われる現象に着目し、そのルールを見出す帰納的手法をとる。

### 2.1.2 本研究の分析手法

前節で概観したように、会話を分析するアプローチには、談話分析と会話分析がある。しかし、実際に会話を分析する過程においては、談話分析と会話分析のいずれかの手法に偏って研究を進めるのは難しい。その原因について、高木（2018）は以下のように述べている。

それはまさに会話分析と談話分析を厳密に区分することが困難であることと関係しているのであるが、例えば、もし分析方法や範囲が会話分析の領域にのみ限定された場合には、主に談話参与者間の社会的関係や談話の展開方法に関心がいくことになり、話されたことばである談話を扱いながらも、言語形式そのものの分析を行うことは難しくなるだろう。また、反対に談話分析の領域にのみ限定された場合には、主に談話の中に存在する任意の発話を取り上げて、それに対する文法的な分析を行うことになり、談話そのものの存在様式や周辺発話や文脈、談話展開といった観点からより実証的に分析することは困難になる。つまりいずれかの領域に偏った分析方法が採用された場合、言語に対するより多角的な分析、記述を行うことが困難になってしまうのである。

（高木 2018:13-14）

すなわち、談話分析と会話分析の区別は明確ではない。さらに、言語使用の実態を把握するためには、どちらかの手法のみを採用すると、限界が生じてしまう。よって、本研究では、談話分析と会話分析の手法を併用し、分析を進める。まず、分析の手法ごとに分析項目と対応する課題を紹介する。

[主に談話分析の手法で分析する項目と対応する課題]

- ①「どのような話題が選択されるか」という話題内容を解明するもの（課題1に対応する）

②「どのように話題が選択されるか」という話題選択ストラテジーを解明するもの<sup>4</sup>  
(課題2に対応する)

③話題導入発話のタイプの分類(課題3～5の一部に対応する)

[主に会話分析の手法で分析する項目と対応する課題]

話題導入時の参加者の相互行為(課題3～5の一部に対応する)

次に、談話分析と会話分析の手法を併用する理由を説明する。まず、話題とは「内容的に結束性を有する」発話のまとまりである<sup>5</sup>(三牧 1999:50)。よって、話題選択を分析するには談話分析の手法が適当である。次に、前述のように話題導入が会話参加者の相互行為により作り上げられるものであり、話題導入者による導入発話だけで成り立たない。相手の承認をもらうことで初めて話題が認められ、確立できる。会話分析では「参加者の行為のやり取りとしての側面」に重点をおくため(筒井 2012:27)、話題導入の実態を解明するには、会話分析の手法が有効である。ただし、われわれは「様々な言語形式を用いて談話を構築・理解」する(林 2008:20)ため、話題導入発話を分類、認定するには、言語学の成果を取り入れる談話分析の手法を取る。

以上のように、本研究では談話分析と会話分析という2つの分析手法を用いて、初対面以降の会話における話題選択と話題導入を分析する。なお、話題に関する言語行動の実態をより詳細に解明するために、量的分析によって使用傾向を把握した上で、具体的な会話例を取り上げ、質的分析を行うというアプローチをとる。

## 2.2 会話資料と文字化方法

本節では、会話の収集方法と文字化方法を示す。まず、分析対象となるデータの種類を紹介する。次に、本研究の会話実験の実施方法を述べ、参加者の基本情報を示した上で、続く会話実験後の調査の実施状況とその結果を紹介する。最後に、会話資料の文字化規則を述べる。

---

<sup>4</sup> 本研究では直前の話題との関連性という観点から「どのように話題が選択されるか」を分析する。直前の話題との関連性は、文脈の結束性と話題の初出・既出には関係がある。談話分析の関心点の一つは文脈の結束性と情報の新・旧構造である(橋内 1999)ため、本研究では談話分析の手法で「どのように話題が選択されるか」を述べる。

<sup>5</sup> 本研究における話題の定義の詳細は、2.3.2を参照のこと。



### 2.2.1 データの種類

日常会話を分析するにあたり、データを収集することが前提となる。メイナード（1993）は、日常会話を分析対象とする研究で用いられるデータを以下の7種類に整理している。

1. 研究者が自分で考えて作り出したもの。
2. 小説、ドラマ、又他の研究論文等の中から随時抜き出した会話。
3. ラジオ又はテレビの番組の一部を録音、録画したもの。
4. 日常生活で使われる会話をそのまま録音、録画したもの。
5. ある一定の対象者を選んで研究のために集めた会話で、研究者又は研究に関係のある者が参加したもの。
6. 研究者又は関係者は参加せず、ある一定の決められた状況で集めた会話。
7. アンケート等の質問に答える形で集められた会話。

メイナード（1993：62-63）

本研究で扱う会話は特定の目的を持たない日常会話であるため、「4.日常生活で使われる会話をそのまま録音、録画したもの」を収集するのが最適である。しかし、これでは、調査の論理性と効率性という問題が残る。そこで、実際に日常で交わされる会話に近い「6.研究者又は関係者は参加せず、ある一定の決められた状況で集めた会話」を収集する。

### 2.2.2 本研究で用いる会話資料の収集方法

日常生活で交わされる会話における話題は、会話参加者の性別、人数や上下関係などの要素に影響されるため、話題選択と話題導入を解明しようとする場合、会話参加者を一定の条件に統制する必要がある。そこで、本研究では、性別と学年という上下関係が統制された実験的会話を収集ことにした。年齢ではなく、学年という上下関係を統制するのは、学生同士の会話で年齢より学年が意識されやすいからである。この点について、三牧（2013:194）も「上下意識にとっては、年齢より学年が重要な要因」と指摘している。また、本研究の会話では、どの組も初対面会話の冒頭では学

年という情報交換が行われているが、年齢には言及していない。それは、年齢はプライベートにかかわるものであり、それほど親しくない相手には聞きづらいからだと考えられる。そこで、本研究では会話参加者を同学年という条件に統制した上で、20代前半の同学年の女子大学(院)生の二者間会話を5組収集した<sup>6</sup>。会話参加者の情報は、表2-2に示す。なお、OAはS1とS3の2組の会話実験に参加している。

表2-2 会話参加者の概要

組番号	名前 (仮名)	学年	専門分野
S1	KI	修士2年	人文
	OA	修士2年	人文
S2	OK	学部3年	人文
	HS	学部3年	理工
S3	AB	修士2年	人文
	OA	修士2年	人文
S4	SR	学部4年	心理
	KR	学部4年	芸術
S5	OS	学部3年	人文
	HR	学部3年	人文

会話実験の調査期間は、2018年11月から2019年8月であり、基本的に、週に1回の頻度で初対面から4回目までの会話を録音・録画した。収集した会話は、延べ20件、合計459分である。会話実験の頻度を週に1回と設定するのは、大学(院)生がゼミや授業などで1週間に1回ほど接触すると予想されるため、できるだけ実際の生活・学習環境に近づけようとするからである。

1回目の会話実験を行う際にして、研究内容、研究協力の方法などを説明し、同意書に署名をしてもらった。また、同意後いつでも任意で撤回することができると伝え、「同意撤回書」も渡した。なお、話題導入行動への影響を最小限にするために、研究目的について詳しくは説明せずに、「日常会話の振る舞いの特徴を解明したい」とだけ伝えた。調査は大学の図書館のセミナー室で行い、協力者の緊張や不安を和

<sup>6</sup> 実際には日中母語場面の同学年と異学年の各5組、合計20組の会話を収集したが、本研究では、言語と学年の相違による話題導入は分析の焦点ではなく、同学年の日本語母語話者同士の会話のみ利用した。

らげるために、飲み物と軽食を用意した。話題は指定せずに目の前の方と 20 分間ほど自由に話すよう指示し、筆者はセミナー室を出た。

### 2.2.3 会話後の調査及び結果

毎回の会話実験の終了後、個別のアンケート調査とフォローアップ・インタビュー（以下、FUI）を行った（詳細は、付録 1～4 を参照）。

アンケート調査を行う際に、5 つ質問項目からなる質問紙を会話参加者にそれぞれ配り、会話の自然さと録音・録画・録画場所による影響を確認した。その結果、録音・録画は意識した会話参加者はいるが、会話の自然さに影響を与えていないことが明らかとなった。

会話の自然さを確認する質問（付録 1 と付録 3 の質問 1～2）

1. ただいまの会話における話題の自然さについて、どう思いますか。
2. ただいまの会話における話し方の自然さについて、どう思いますか。

録音・録画・録画場所による影響を確認する質問（付録 1 と付録 3 の質問 3～5）

3. 録音されていることを意識しましたか。
4. 録画されていることを意識しましたか。
5. 今回実験の場所は会話に影響を与えたと思いますか。

また、FUI は半構造インタビューの形式で予め質問項目を用意しておき、参加者に回答してもらった上で文字化した。質問項目は以下のように主に 3 つのセクションからなり、さらに質問項目 II～III にはいくつかの小さな質問項目がある（詳細は、付録 4 を参照<sup>7)</sup>）。

- I 会話の感想に関する質問項目
- II 相手との関係性に関する質問項目
- III 自分・相手の会話行動に関する質問項目

FUI の結果により、まず「II 相手との関係性」について、多くの参加者は相手を

---

<sup>7)</sup>初対面と 2 回目以降の会話の FUI は、若干の差異がある。初対面会話ではいい印象・悪い印象を与えるという質問が付け加えられる（詳細は、付録 2 を参照）

知り合い、一部の参加者は友人と認識していることが分かる。ただし、ほとんどの参加者は、相手と LINE などの連絡先を交換せず、会話実験以外の接触は全くない状態であり、毎回会話実験で 20 分程度雑談を交わすだけであることが分かる<sup>8</sup>。田中・宮前 (2016:140) は「その場限りの付き合いや雑談を交わす程度の付き合い」を「浅い関係」と捉えているため、本研究では所属や出身などの基本的な情報が共有されている参加者の関係は知り合い関係と定める<sup>9</sup>。

次に、「Ⅲ 自分・相手の会話行動」では、「会話の中で相手に好印象を与えようとしたか」「前回の会話と比べ、違う会話行動を取ったか」(詳細は、付録 2、4 を参照) などについて、会話参加者に回答してもらう。そして、参加者の回答の一部を初対面と 2 回目以降に大別し、以下のように簡単にまとめている。( ) は参加者の仮名と組番号をさす。

#### [初対面会話における言語行動に対する意識]

- ①初対面なので、意識はしていました。(OK S2 組)
- ②ちゃんとした会話をしなきゃみたいな意識があると思う。(SR S4 組)
- ③初対面で、会話が続くかどうかちょっと不安だった。なるべく会話しやすいように気をつける。(KI S1 組)
- ④初対面なので、好意を持ってもらうというか、印象をよくとってもらったらいいなあと思うことは、ちょっと思ったりしたのですが。(OA S1 組)
- ⑤初対面で緊張した。いい印象を持ってもらいたい。この人どう見られるのか、分からないから、あまり変なことしないように。(KR S4 組)
- ⑥初対面の人なので、失礼にならないように。(HR S5 組)

#### [2 回目以降の会話における言語行動に対する意識]

##### i 2 回目の会話

- ①初対面と比べ、そこまで意識しなかった。特に意識することはなくて。(OA S1 組)

---

<sup>8</sup> S1 組の KI と OA は相互に連絡先を交換しあっていたが、実験以外の時間 SNS による接触はなかった。

<sup>9</sup> 最近人間関係の希薄化と共に知り合い程度の人を友人に含めるようになる (原 2005)。本研究でも会話実験の相手を友人と思う参加者は少数だが存在する。ただし、その場合でも参加者同士の接触は会話実験に限られていたため、その関係性は知り合い同士と捉える。

- ②初対面よりお互いに自然に話せるようになった。(OA S3組)
- ③こういう話をしなきゃというふうに思わずしゃべった。(KR S4組)
- ④相手を知るために、こういう質問するとかそういうのではなくて、ある意味すごくどうでもいい話、たわいもない話が出て、割と自然に話せた。(HS S2組)
- ⑤(会話の)流れがあまりには自然だったので、すごく話しやすかった。(OS S5組)

## ii 3回目の会話

- ①初対面ではなかったという点で、あまり意識していなかった。(OK S2組)
- ②特に気を遣って話すという感じではなかった。(HS S2組)
- ③いつものこと。前回とは(2回目の会話を指す)そんなに変わらない。(HR S5組)
- ④いい印象的行動を取るつもりは特になかった。今まで何回も喋っているし。(KR S4組)

## iii 4回目の会話

- ①(良い印象を与えようとするつもり)全然なかったです。多分ありのまま、何も考えずしゃべって大丈夫だなと思っているのだから。(KI S1組)
- ②あまり意識していたわけではない。普段通り。(OS S5組)
- ③3回目と比べ、質的には変わらなかった。(SR S4組)
- ④初対面と比べ、本当に気軽に話ができるようになった。(KR S4組)

以上挙げた会話参加者の回答から分かるように、初対面会話では参加者は相手にいい印象を与えようとする意識は持っている。一方、2回目以降の会話では会話参加者は特に気を遣わず、普段通りに会話をしている。その理由として、3回目の会話における「①初対面ではなかったという点で、あまり意識していなかった。(OK S2組)」、4回目の会話における「初対面と比べ、本当に気軽に話ができるようになった。(KR S4組)」という回答が挙げられる。さらに、前回の会話との相違について、3回目の会話における「③いつものこと。前回とは(2回目の会話を指す)そんなに変わらない。(HR S5組)」、4回目の会話における「③3回目と比べ、質的には変わらなかった(SR S4組)」という声が聞こえている。

このように、会話参加者は初対面会話では良い印象を与える意識を持つが、2回

目以降の会話では、特に意識せずに、自然に話せるようになる。さらに、2回目以降の3回の会話では、特に会話の質的な変化はないということがわかった。よって、本研究では大きく初対面と2回目以降に分け、それぞれ話題選択と話題導入を論じる。もちろん FUI の結果を確かめるために回ごとの話題選択と話題導入の変化も検討する。

#### 2.2.4 文字化方法

前節で収集した初対面から4回目までの計20件の会話を全部文字化し、文字化資料を作成する。文字化方法について、西坂・串田・熊谷（2008）による会話分析の文字化規則を参考にし、漢字・仮名交じりの形で行なった。文字化に用いた記号は表2-2の通りである。

表2-2 本研究で用いる文字化記号の一覧

[	音声为重なり始めている時点を表す。
(.)	0.2秒以下の短いポーズを表す。
( )	聞き取り不可能な箇所を表す。( )の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
(言葉)	聞き取りが確定できない箇所を示す。
言葉:	直前の音が延ばされていることを表す。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
h	呼気音を表す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
.h	吸気音を表す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
言葉(h)	笑いながら発話が産出されることを表す。
言葉	音の強さを表す。
?	語尾の音が上がっていることを表す。
ゝ	語尾の音が多少上がっているが、?疑問符をつけるほどではないことを表す。
↑	音調の極端な上がりを表す。
(数字)	沈黙の長さを表す。(秒単位)
< >	発話のスピードが目立って遅くなる箇所を示す。
> <	発話のスピードが目立って早くなる箇所を示す。
=	2つの発話が途切れなく密着していることを示す。
,	音が少し下がって続きがあることを示す。
° °	音が小さい箇所を示す。
—	音が大きい箇所を示す。
(( ))	発言の要約や、他の注記を表す。

(西坂・串田・熊谷 2008:14-15)

この規則に従うのは、ポーズや沈黙、音調など、話題を認定する際の重要な手がかりになるパラ言語要素を精確に書き取ることができるからである。そして、文字化結果の精度を高めるために、筆者が文字化した後、会話分析の文字化規則に慣れた日本人大学院生のチェックを受けた。

## 2.3 データの整備の方法

本節では、データの整備の方法を述べる。まず、分析単位を設定する必要性を示し、本研究で扱う単位を述べる。次に、話題の定義、話題の認定基準を述べる。話題を区分するにあたって、話題内容と話題転換時の言語・非言語的特徴を手がかりにする。続いて、話題導入部と話題導入発話の定義と認定基準を明確にする。最後に、結果の信頼性確認の方法を述べる。

### 2.3.1 分析単位

会話を分析する際に、単位を設定する必要がある。単位を決めない場合、「分析の対象を資料から切り取ってこないことができない」（南 1987:21）からである。分析単位の名称や単位の段階などについて、研究者により異なる。南（1972、1981、1987）は、「談話」という仮定的単位を立て、日常会話を「談話」に当たるいくつかの部分に分け、分析を行っている。また、ザトラウスキー（1993）、鈴木（1995）、河内（2003、2009）などの研究は、佐久間（1987）を踏まえ、「話段」という分析単位を用いている。そして、三牧（1999）をはじめ、筒井（2012）、大場（2012）、関崎（2016）など多くの研究は「話題」という分析単位で会話を区分している。一方、「談話」「話段」「話題」と比べ、もっと細かく単位区分を行なった研究もある。例えば、宇佐美（1993a、1993b、1994、1996 など）、高木（2018）の「発話文」や李（1995、2000）の「発話順番」などである。また、話し言葉における非流暢性という特徴に着目し、文節を単位とする研究（丸山 2015）がある。

本研究では話題を取り扱うため、単位を設定する際に、話題という概念を用いることにする。また、話題導入部における導入発話に着目し、導入頻度と形式などを分析

するため、発話文もひとつの分析単位とする。

### 2.3.2 話題の定義

話題の定義<sup>10</sup>について、研究者により多岐に渡る。村上・熊取谷（1995:101）は、話題を「話し手と聞き手のやりとりからなる発話のひとまとまりの中で、言及の対象となっている、ある特定の事柄」と捉えている。また、三牧（1999:50）は、「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」を話題としている。そして、大谷（2018、2019）は、話題の連続性と相互行為性に着目し、話題を「関連性と連続性を保ちながら、社会的規範にのって移り変わるものであり、会話参加者の相互行為により生み出されるもの」と定義している（大谷 2018:97）。

前述のように、今までの研究では、話題の定義が統一されていない。ただし、話題が会話参加者の相互行為により作り出され、内容的に結束性を持つまとまりという認識を共有していることが分かる。そこで、本研究では、三牧（1999）を参考にしつつ、話題を「会話参加者の相互行為により導入、展開された内容的結束性を有する最も大きな情報のまとまり」と定義する。

また、話題には階層的な構造を持ち、複数の関連する話題がより大きな話題を形成する（村上・熊取谷 1995）。そして、三牧（1999、2013）も、話題の内容上の階層性により話題を大話題と小話題に分類している。ただし、大場・中井（2020）に指摘されているように、小話題をどこまで細かく区分するのかについては、人により違いが生じる。また、本研究の目的のひとつは、限られている会話参加者から話題選択と話題導入の共通性を見出すというものである。細かく区分するほど、話題の内容について会話参加者の個性や組み合わせによる差異が大きくなるから。よって、本研究では大話題と対応するため、上記のように話題を定義する。

---

<sup>10</sup> 「話題」のほかに、「主題」「トピック」「テーマ」などの用語が用いられている。本研究では「話題」という用語を用いる。ただし、先行研究に言及する場合は、それぞれの研究における用語に従うことにする。



### 2.3.3 話題の認定

話題区分について、従来の研究では、話題は刻々と移り変わるという流れの特性を持つため、話題を明確的な単位で区切ることができないこと（串田 1997）が指摘されている。一方、大場（2012）、関崎（2016）、大谷（2018）、大場・中井（2020）などの研究は、話題区分の難しさを認めながら、話題の内容面の特徴に加えて、話題開始部・終了部における言語・非言語的な要素を踏まえ、話題を区分することが可能であると示唆している。大谷(2018)は、話題開始部や終結部の特徴、話題転換のストラテジーなどを参考にし、話題区分の基準を立てている。具体的に言えば、「沈黙や長いポーズの後に文脈が変化した箇所」「声の音調が変わった箇所」「文脈の転換を明示する表現が使用された箇所」「限られた反応の後」「まとめや評価表現の後」である。「限られた反応<sup>11</sup>」とは「先の話者の発話を繰り返したり、互いにあいづちを打ち合ったり、笑いだけが起こったりする」ことである。「まとめや評価表現」とは「「というわけだ」などのまとめ表現、「良かったね」などの評価表現」である(大谷 2018:99)。

ただし、串田（1997:179）により、話題開始部・終了部における言語・非言語的な要素が用いられず、「発話連鎖ごとに一步ずつトピックが推移していくように見える」という切れ目のない話題転換があるという。よって、本研究では、原則として内容面に注目し、話題区分を行った。それに加えて、大谷(2018)の示した話題転換際の言語・非言語的な特徴も、補助的な手がかりにした。以下、会話資料から2つの例を提示しながら、実際の話題区分の基準を示す。新規話題が導入された場所を二重スラッシュ「//」で（以下、同様）で示し<sup>12</sup>、協力者の氏名はアルファベットで示す。

会話例 2-1 は、内容面の特徴と話題転換際に出現する言語・非言語的特徴を手がかりにし、話題区分を行ったものである。例 1 の直前では OA と AB は進路について語り合っていた。2 秒の沈黙の後 OA が「なんか留学経験とか(.)ある？」（1 行目）と質問を投げかけて、「留学」の話題を導入している。OA の質問に応じて、12 行目と 16 行目で AB は高校と大学の時アメリカへ留学したことがあると情報提供をしている。

<sup>11</sup> 「限られた反応」はメイナード（1993）が McLau (1982)の minimal response を訳したものである。

<sup>12</sup> 話題導入箇所はよりわかりやすく見えるように、「→」でも示す。

17行目で言い重なりが起こって、OAは「格好いい」とABの留学経験を評価している。OAの評価に応じて、ABは何も言わず笑っただけである(18行目)。19行目で会話が一旦途切れ、2秒沈黙が生じる。続いて20行目でOAはABによる留学に関する情報に対して、「そっか」とあいづちを打っている。続いて、「国際地域ってどんなことやるの?」とABに所属する「国際地域」という専攻の詳細を聞いている。ABが「なんかコースが7個あって」(24行目)と返答して、OAは「うんうんうん」(25行目)と理解のあいづちをして、会話の継続を促している。そして26行目でABが「私は北アメリカコース」と自分に所属するコースを話してから、27行目でOAは音を伸ばして、「アメリカでも分かれてるんだ」と驚きを表している。続いて、ABはコースの下位分類を説明している。

この例2-1において、話題の定義に従って、話題の前後の内容の結束性を見ると、20行目の冒頭部の「そっか」までは「留学」について話されているが、20行目の「そっか」以降は「専攻」について話されている。そして、OAによる評価表現(17行目)、限られた反応(18行目のABの笑い)、沈黙(19行目)、OAの理解のあいづち(20行目の冒頭部)など、話題転換部の言語的特徴(大谷2018)が観察される。よって、1行目の「なんか留学経験とか(.)ある?」という発話から20行目の「そっか」までは「留学」、20行目の「そっか」以降は「専攻」と話題を区分した。

例 2-1 内容的に結束性を持つ発話と話題転換部の言語的特徴がともに観察される会話例

- ➡ 1 OA:全く(2.0) //なんか留学経験とか(.)ある?勝手にありそうっついや思(h)つ  
 2 て(h)る(h)だ(h)け(h)  
 3 AB:いやなんかよくなんか私日本語が変だからいろんな人に言われた  
 4 OA:hhhh  
 5 (1.0)  
 6 AB:なんか日本人には日本語喋るとなんかどこからの国の人[ですか  
 7 OA: [hhhhhhhhhh  
 8 OA:なんか専攻聞いてもんごいなんかこうグロ-グローバルいろんな(.)なんか

9 国の人とか国に行ったり交流してるかなとかって勝手に思って[しまった

10 AB: [うんうんうん

11 (1.0)

12 AB:高校の時に1年アメリカ[( )] 大学で1年アメリカ

13 OA: [う:ん

14 OA:う:ん

15 (1.0)

16 AB:だけ[です

17 OA: [格好いい

18 AB:uhh

19 (2.0)

➡20 OA:そっか, // 国際地域ってどんなことやるの? 割と地域は様々[ん? 国際地域

21 であってるのかな

22 AB: [うん

23 (.)

24 AB:なんかコースが7個あって

25 OA:うんうんうん

26 AB:私は北アメリカコース

27 OA:う:[:ん::↑アメリカでも分かれてるんだ=

28 AB: [ところで

29 AB:=h うん↑アメリカ;

30 OA:[北アメリカ

31 AB:[北アメ-アメリカ

32 AB:あそうん, ラテンアメリカと

33 OA:あなるほど

(以下、略)

次に、話題の内容面の特徴のみに着目し、話題区分を行った会話例 2-2 を挙げる。

例 2-2 の冒頭では、SR は「サークルとかは何？」(1 行目) と質問の形で「サークル」という話題を導入している。そして、KR は「サークル何も入ってないですよ」(2 行目) と発話してから、「ずっとバイトして hh[hhh」(7 行目) と追加して情報を提供している。KR がサークルに入っていないため、KR の所属するサークルの話はもうそれ以上展開されることができず、新話題を導入する必要がある。そこで、9 行目では SR は、KR の直前のバイトの話を取り上げ、「バイトは何をやった？」と質問している。

例 2-2 内容的に結束性を持つ発話のみ観察される会話例

- ➡1 SR://サークルとかは何？
  - 2 KR:サークル何も入ってない[ですよ
  - 3 SR: [入ってないんですか
  - 4 SR:じゃもうひたすら↑
  - 5 KR:ひたすらいやずっと遊んで
  - 6 SR:いやいや
  - 7 KR:ずっとバイトして hh[hhh
  - 8 SR: [hhh
  - ➡9 SR://バイトは何をやった？
  - 10 KR:バイトはええと iias[行くまでの
  - 11 SR: [あああはい
  - 12 KR:大通りの中にあのう (せんしゅ) ていう
  - 13 SR:うん(.)知ってる
  - 14 KR:あそこのキッチンでちょっと
  - 15 SR:お:
  - 16 KR:働いてて(.)あと(.)それ以外に学童保育みたいな[ところでちょっと
  - 17 SR: [うんうんうんうん
- (以下、略)

会話例 2-2 において、大谷 (2018) に提示されている話題転換際の言語・非言語的

な要素は現れていないが、直前の話題と後続話題の内容の結束性からみれば、1行目から8行目までは「サークル」について話されているが、9行目以降で「バイト」について話されている。そこで、9行目ではSR「バイトは何をやってた?」という質問により、話題は「サークル」から「バイト」へ転換したとみなす。

以上、会話例を挙げながら、話題区分の認定基準を説明した。さらに、話題区分の信頼性を高めるために、筆者と1人の話題区分協力者は独自で5組による4回にわたる計20件の会話の話題を区切り、話題の一致率を求めた。具体的には、まず、話題区分の経験を持った日本語母語話者に話題区分の認定基準を説明した。次に、試しに20件の会話から1つを抽出し、筆者と協力者はそれぞれ区分した上で、不一致の箇所に話し合いながら、話題区分基準を再確認した。そして、残りの19件の会話を2人で独自で話題の切れ目を決定し、話題区分を行った。作業の信頼性を判断するために、コーディングした20の会話の7分の1に当たる3つの会話を取り出し、筆者と協力者の評定者間信頼性係数(カッパ係数)を測った。カッパ係数が0.7以下の場合、その信頼性への懸念が出てくる(Bakeman & Gottman 1986)。本研究の話題区分の一致率は0.87であるため、話題区分の信頼性が確保されたと言える。なお、一致していなかった箇所について、会話の分析に詳しい第三者の意見を参考にし、筆者が決定した。このように、5組の4回の延べ20の会話では170個の話題に分けた。

#### 2.3.4 話題導入部と話題導入発話の認定

本節ではまず、発話文を定義し、認定基準を示す。続いて会話例を挙げながら、話題導入部と話題導入発話の定義を示す。

##### 2.3.4.1 発話文の定義と認定

本研究におけるもう1つの分析単位である発話文は、さまざまな研究で定義されている。杉戸(1987)は、発話を「ひとりの参加者のひとまとまりの音声言語連続(ただし、笑い声や短いあいづちも含む)で、他の参加者の音声言語連続(同上)とかポーズ(空白時間)によって区切られるごとに1単位として数えようとする単位である」と(杉戸1987:83)定義している。また、発話の種類について、「実質的発話」と「あ

いづち的発話」に分けられている。

そして、宇佐美（2020:18）は、基本的な文字化の原則（以下、BTSJ）の基本的な単位となる発話文とは「会話という相互作用の中における「文」とする」。基本的に「一人の話者による「文」を成している」と捉えられるものを「1発話文」とする」（宇佐美 2020:18）。発話文の認定は、「話者交替」と「間」という2つの要素があるという。この点から見れば、杉戸（1987）の認定基準と一致している。また、宇佐美（2020）では、一語文、文末まで言い切らない文は、「話者交替」と「間」があった場合、「1発話文」と認定される。

本研究では、上述の先行研究を踏まえ、発話文を「1人の話者が発話を開始してから終了するまで音声言語の連続」と定義し、発話文を認定するにあたって、宇佐美(2020)を援用し、「話者交替」と「間」という2つの基準を立てる。話者交替が起こらなくても、「間」を置き、話者が話し続ける場合、新たな発話文が開始されたと見なす<sup>13</sup>。

#### 2.3.4.2 話題導入部と話題導入発話の定義と認定基準

本節では話題導入における重要な概念となる話題導入部と話題導入発話に関する研究を概観した上で、本研究の定義と認定基準を示す。1章では概観した通り話題導入部は、話題開始部（村上・熊取谷 1995、中井 2003b、楊 2011 など）も呼ばれている。また、話題導入部の範囲については研究により見解が異なる。狭義で話題導入部を話題導入発話と捉えるもの（河内 2009、若松 2020 など）もあれば、広義で話題導入部は1人の話者の導入発話で完結するものではなく、話題導入者と相手のやりとりからなるとみなすもの（村上・熊取谷 1995、中井 2003b）もある。さらに、楊（2011）、季（2015）、大谷（2019）は、導入者と相手のやり取りは、必ずしも1往復の「先導一応答」（村上・熊取谷 1995）で済むのではなく、場合によっては話題確立発話までのプロセスでのやり取りが長いと指摘している。

また、話題導入発話について、先行研究は概ね2つの意見に分かれている。一つは、話題を開始する最初の発話を話題導入発話と見なすものである（林 2008、大場 2012

---

<sup>13</sup> 宇佐美（2020）は、BTSJにおける発話文は文字化資料の改行の重要な概念であるが、本研究は、話題導入を分析する際のみ、発話文という概念を利用する。

など)。もう一つは、話題を開始する最初の実質的な内容を持つ発話と定義するものである(楊 2011)。さらに、季(2015:87)は、実質的内容を「何をトピックとして提案しているかが判別できる一まとまりの発話」と明示している。季(2015)は以下の例を挙げながら、話題導入の最初の発話は導入発話ではないことを述べている。

1A: そうですね(あ、そうだ/ねえ等)

「話題開始表現」 / 「話題転換を合図する表現」

2B: なに?

3A: 今度の三連休、どっか行く? 「話題導入発話」

季(2015:87)

季(2015)により、話題導入発話は、相手に情報要求か、自ら情報提供かのいずれかであると定義される。話題冒頭部で現れる1Aの発話は、話者Aが新たな話題を開始しようとするため、話者Bの注目を要求する「話題開始表現」・「話題転換表現」である。3Aは、相手に「三連休の予定」という情報を求める話題導入する発話であるという。

以上話題導入部と話題導入発話に関する研究を概観した。本研究では、話題導入は参加者の相互行為により成し遂げられるものと認め、広義での話題導入部を捉える。さらに、楊(2011)、季(2015)と大谷(2019)の説に賛成し、新たな話題を導入しようとする発話から話題確立発話までの部分を話題導入部にする。新たな話題を導入しようとする発話は、話題導入を予告したりするメタ言語でもあり、話題導入発話でもある。話題導入発話は、楊(2011)と季(2015)を参考に、「新たな話題が開始された際、何を話題として取り上げるかが判別できる最初の発話」と定義する。そして、楊(2011:189)と大谷(2019:5)を踏まえ、話題確立発話を「導入される話題について会話参加者が具体的に語るまたは、話し相手が話題導入者に当該話題に関連する質問をするもの」と定義する。

以下、例を挙げながら、話題導入部と話題導入発話の認定を述べる。会話例2-3では、話題が導入された箇所に二重スラッシュ「//」をつけ、話題導入発話を太字で、話

話題確立発話は下線で示している。会話例 2-3 は、OS と HR による 3 回目の会話の断片である。

会話例 2-3 の直前では、2 人はバイトについて話していたが、7 秒の沈黙の後、OS は「そういえば、一週間ぐらい前から次会ったら、これをお話しよう、次あったらこれを話しようって、ちょっと考えてたことがあるんですけど」(1~4 行目)と話し、相手に注目を喚起するため、新話題の導入を予告する。5 行目で HR が「お:」と反応し、OS の話の続きを促す。そして、6 行目で OS は、まずこれから持ち出す新話題は「いやそんなに大したことないんですけど」と発話し、「あのう音楽とかは好きですか」と、趣味の話題を取り上げる。1 行目から 6 行目の冒頭の OS の発話は、相手の趣味を聞くための新話題導入を予告する前置き表現である。6 行目の後半の発話から OS が趣味という話題を取り上げたことが分かる。よって、6 行目後半部の「あのう音楽とかは好きですか」を話題導入発話と認定する。趣味という話題が導入され、7 行目で HR は「音楽,あんまり,あれなんですよね hhhhh」と発話を言い切らずに曖昧に応答する。そこで、OS は、8 行目で「聞かないですか」と問い直し、もう一度趣味という話題を投げかける。そして、11 行目で HR は「う:ん:そんなに聞かないですね」と躊躇いながら答える。続く 13 行目で「え音楽好きなんですか」と OS の趣味について、問い返す。上記の話題確立発話の定義を踏まえ、13 行目の「え音楽好きなんですか」は話題確立発話と認定する。よって、「趣味」の話題は 1 行目から導入予告が行われ、ようやく 13 行目まで話題化される。話題導入部の範囲は 1 行目から 13 行目までである。

#### 例 2-3 話題導入部と話題導入発話を示す会話例

- ➡1 OS://そういえば,一週間ぐらい前から次会ったら,これをお話しよう,次あった  
2 らこれを話しようって  
3 HR:hh  
4 OS:ちょっと考えてたことがあるんですけど  
5 HR:お:  
6 OS:いやそんなに大したことないんですけど,あのう音楽とかは好きですか  
7 HR:音楽,あんまり,あれなんですよね hh[hhh]



- 8 OS: [聞かないですか]
- 9 HR: き, う: ん, 聞く =
- 10 OS: = はいはい
- 11 HR: う: ん: そんなに [聞かないですね]
- 12 OS: [うんうんうん]
- 13 HR: え音楽好きなんですか
- 14 (.)
- 15 OS: ( ) hhhhh 結構高校時代バス通学だったので  
(以下、略)

上記の方法で、話題区分作業による得た 170 個の話題の話題導入発話と話題導入部をコーディングした。話題転換箇所はすでにコーディングされているから、話題導入発話の認定は、筆者独自でコーディングした。そして、話題導入部の認定にあたっては、筆者と新たな 1 人の協力者とはそれぞれコーディングし、カッパ係数を測った。その結果、一致率は 0.82 である。なお、一致していない箇所については第 3 者と協議した上で、筆者が決定した。

## 第 3 章

### 話題の種類からみる話題選択

## 第3章 話題の種類からみる話題選択

本章では、研究課題(1)に対して、初対面から4回目までの会話における話題内容に着目してどのような話題が選択されるか分析する。

以下、3.1節で話題の種類に関する研究を概観し、本研究の位置付けを行う。続く3.2節で分析方法を、3.3節で分析結果を示す。最後に、3.4節で話題内容について考察を行う。

### 3.1 話題の種類に関する研究と本研究の位置付け

初対面や親しくない人と何を話せばいいか分からず、会話がうまく続かないという悩みを抱える人が多い。この問題を解消するため、選択されやすい話題について研究が行われ、一定の成果がもたらされている。

これらの研究は、ほとんど初対面場面を対象にしたもので、その代表的なものとして三牧(1999)、全(2009)が挙げられる。三牧(1999)は、38組の日本語母語話者大学生の初対面の実際の会話に基づき、話題選択スキーマの存在を指摘している。そして、話題選択スキーマは、23の話題項目と内容の関連性から集約される8つの話題カテゴリーからなる話題選択肢リストである。すなわち、日本人大学生同士の初対面会話で、会話参加者の組み合わせや個性に関係なく、共通して取り上げられる話題があることを明らかにしている。また、回避される話題についても部分的ではあるが、言及している。しかしながら、具体的にはどのような話題が回避され、その原因は何かについては追究の余地がある。

この点について、全(2009)は、質問紙調査を通して、日韓の大学生同士の初対面会話で回避される話題及び原因を明らかにした。その結果、自分から聞くか、相手から聞かれるかという話題の取り上げ方に関係なく、日本において回避される傾向がある話題は、「バイト代」「お小遣い」などの金銭問題、「性格」「宗教」に関する話題であった。そして、自分から聞くのが失礼だと思ふ項目として取り上げられたのは、「恋人有無」「家族職業」「浪人有無」などであった。その原因は、プライバシーにかかわるからだとして指摘されている。

一方、初対面以降の場面に注目し、縦断的に会話を分析したものは、管見の限り、谷（2011、2012、2016）と呉（2017）のみである。谷（2011、2012、2016）は3組の日本語の母語話者同士による初対面から8回にわたる会話をもとに、組ごとに話題の種類と話題内の相互行為を考察した。また、呉（2017）は、初対面の相手との3回の会話を踏まえて、回数を重ねるにつれてみられる日韓の母語場面と接触場面における選択された話題の種類の変化などを考察した。

ただし、谷（2011、2012、2016）は、組ごとの選択された話題のみに焦点を当てるにとどまり、全組の話題選択の共通性などは考察していない。そして、呉（2017）は、初対面を含む3回の会話を対象にしたものの、1組のみの日本語母語話者の会話を分析するにとどまっている。よって、初対面以降の会話では、どのような話題が選択されるのかについて、解明されているとは現段階では言えない。

先行研究を踏まえ、本章では話題内容に焦点を当て、日本人大学生による初対面から4回にわたる実際の会話を分析対象とし、会話の回数の増加に伴う話題の種類の変化を実証的に解明し、複数の組の会話参加者による話題選択の共通性を見出す。さらに、初対面と2回目以降の会話における話題内容の相違を明らかにする。

### 3.2 分析方法

本研究では、会話の回数の重なりに伴う話題選択上の変化を明らかにする。そのために、会話から話題を抽出して以下の3つの観点から分析する。

第1に、5組による初対面から4回にわたる会話全体の話題選択の様相を明らかにするために、会話回ごとに話題を抽出し、リスト化する。リスト化には、三牧（1999）の手法を援用し、話題に付けるラベルを話題項目と呼ぶこととする。複数の組に共通して選択される話題項目があるため、話題項目の延べ数と異なり数をカウントする。さらに、内容の関連性から話題項目を話題カテゴリーにまとめる。話題項目と話題カテゴリーのそれぞれの名付けは三牧（1999）を参考にする。なお、2回目以降の会話の話題に、先行研究で言及されていないものが含まれた場合、その命名は、筆者が独自に行う。さらに、張（2008）を踏まえ「状況発話」<sup>14</sup>という話題カテゴリーを設けて、

---

<sup>14</sup> 張（2008:457）では、「状況発話」とは「今・ここ」でないと出てこない話題であると

会話実験や天気など会話現場に関する話題項目はこのカテゴリーに収める。

また、2回目以降の会話において、初対面会話では回避される危険な話題(三牧 1999)が出現する。本研究では、それをプライバシーにかかわる話題と呼ぶ。そして、プライバシーにかかわる話題を認定するにあたっては、三牧(1999)と全(2009)を参考にしている。具体的には三牧(1999)による話題選択スキーマに当てはまらないものを抽出した上で、全(2009)の意識調査で挙げられるプライバシーにかかわる話題項目リストに含まれているかどうかを確認する。

第2に、初対面会話と、2回目以降の会話とで、選択される話題の異同を明らかにするために、各話題カテゴリーを初対面から4回目までの会話の回ごとにリスト化する。その際、一般的な大学生間の初対面会話と比較して平均的と言えるかどうかを確認するために、三牧(1999)の初対面会話の話題カテゴリーと比較する。

第3に、初対面会話でも2回目以降の会話でも取り上げられる話題について、話題の踏み込みの方に着目し、会話例を挙げながら話題内容の相違を質的に分析する。

### 3.3 分析結果

本節では初対面以降の会話でどのような話題が選択されるかを述べる。まず、3.3.1節で会話回ごとの話題選択肢リストを作成し、会話の回数の増加とともに話題選択の変化について言及する。続く3.3.2節で初対面会話と2回目以降の話題選択の相違を明らかにする。最後に、3.3.3節で質的分析の手法で初対面と2回目以降の会話における話題内容の相違を述べる。

#### 3.3.1 各会話における話題項目及び話題カテゴリーについて

本節では、初対面から4回目までの会話の回ごとの、各組の話題項目と話題カテゴリーのリストを、表3-1から表3-4にまとめる。会話から抽出した話題を「話題項目」欄にリストアップし、各組で取り上げられた話題項目は○で示し、取り上げられな

---

述べられている。本研究では会話現場に関するものは「状況発話」と定義する。よって、三牧(1999)の「共通点」というカテゴリーに収められる「共通体験(本実験の協力者)」は「会話実験」と名づけ、「状況発話」というカテゴリーに入れる。

った場合は一で示す。さらに、内容の関連性から話題項目をカテゴリー化する。5組による会話全体の話題選択の様相を明らかにするために、話題カテゴリーごとに選択した会話参加者の組数を「(数字)」で示す。また、3組以上で選択された話題項目を太枠で囲み、話題カテゴリーを太字で示す。

なお、話題の中には、1回の会話で時間をおいて複数回取り上げられるものもある。これらは、同一話題と取り扱い、1つとして数える。その理由は、本章が話題選択の内容に着目しているからである。

まず、表3-1に示すように、初対面会話から51の話題(延べ)が抽出された。各組に共通して選択された話題が多く見られ、51の延べ話題は29の話題項目にまとめられる。ただし、すべての組が共通して取り上げた話題項目はない。3組以上が取り上げたのは、「授業」「バイト」など7つの話題項目である。さらに、各話題項目の内容的な関連性に注目すると、抽出された29の話題項目は9つの話題カテゴリーにまとめられる。3組以上が取り上げた話題カテゴリーは、「大学生活」「専門」「所属」「状況発話」「進路」「共通点」である。そのうち、すべての組が共通して取り上げたのは「大学生活」と「専門」である。

表 3-1 初対面会話における組別の話題項目と話題カテゴリー

話題カテゴリー	話題項目	組番号				
		S1	S2	S3	S4	S5
大学生生活(5)	授業	○	—	—	○	○
	バイト	—	○	○	○	—
	サークル活動	—	○	—	—	○
	留学	○	—	○	—	—
	日常生活	○	—	—	—	—
	所属学科の今後	—	—	—	—	○
専門(5)	研究テーマ・卒論／修論	○	—	○	○	—
	専攻	—	—	—	○	○
	研究	—	○	—	—	—
所属(4)	サークル	—	○	—	○	○
	学科	—	—	—	○	○
	専攻	—	○	○	—	—
	学年	—	—	—	○	—
	専攻と学科	—	—	○	—	—
	自己紹介	—	○	—	—	—
進路(4)	進学	○	—	○	○	—
	就職	○	—	○	—	—
	進路	—	—	—	—	○
状況発話(4)	会話実験	○	○	—	○	—
	お菓子	○	○	—	—	—
	お菓子と飲み物	—	○	○	—	—
	ハプニング	—	○	—	—	—
共通点 (3)	共通の知人	—	○	○	○	—
居住(2)	自宅／下宿	—	—	○	—	—
	現在居住地	—	—	—	○	—
好み(1)	趣味	—	○	—	—	—
出身(1)	出身校	—	—	○	—	—
そのほか(2)	名前	—	—	○	—	—
	大学周辺の地理	—	—	—	○	—

続いて表 3-2 に、2 回目の会話から抽出された話題のリストを示す。

表 3-2 2 回目会話における組別の話題項目と話題カテゴリー

話題カテゴリー	話題項目	組番号				
		S1	S2	S3	S4	S5
大学生活(4)	授業	—	—	○	—	○
	バイト	—	○	○	—	—
	サークル活動	—	○	○	—	—
	図書館	—	—	—	—	○
	キャンパス	—	—	—	○	—
	校風	—	—	—	○	—
状況発話(3)	会話実験	○	○	—	—	—
	お菓子	○	○	—	—	—
	天気	—	—	—	—	○
進路(1)	進学	—	—	—	○	—
	就職	—	—	—	○	—
受験(1)	受験・塾	○	—	—	—	—
居住(1)	自宅・下宿	—	—	—	—	○
好み(1)	趣味	—	○	—	—	—
出身(1)	出身地	—	—	—	○	—
宗教(1)	宗教	—	—	○	—	—
家族(1)	家族	○	—	—	—	—
外見(1)	服装	—	—	○	—	—
金銭(1)	出費	—	○	—	—	—
中学校・ 高校生活(1)	部活動	○	—	—	—	—
	中学校・高校	○	—	—	—	—
そのほか(3)	忘れること	○	—	—	—	—
	現実逃避	—	—	—	○	—
	風邪	—	○	—	—	—
	生理	○	—	—	—	—
	畑	—	—	—	○	—
	子供の携帯	—	—	—	○	—

2 回目の会話からは 32 の話題（延べ）が抽出された。異なり話題数としてカウントすると、32 の話題は 27 の話題項目にまとめられる。「授業」「バイト」などの 5 つの話題項目のみ 2 組で選択されているが、それ以外の 22 の話題項目は 1 組でしか取り上



げられていない。抽出された 27 の話題項目は 12 種類のカテゴリーにまとめられる。3 組以上で取り上げられた話題カテゴリーは「大学生活」「状況発話」のみである。ほかの 10 の話題カテゴリーは 1 組でしか取り上げられていない。2 回目の会話では、選択率は低いものの、初対面では選択されなかった「宗教」「家族」「中学校・高校生活」などの話題カテゴリーが取り上げられている。三牧(1999:56)は、これらのうち、「宗教」「家族」は危険な話題として、初対面の時に回避されるとしている。

続いて表 3-3 に、3 回目の会話から抽出した話題のリストを示す。

表 3-3 3 回目会話における組別の話題項目と話題カテゴリー

話題カテゴリー	話題項目	組番号				
		S1	S2	S3	S4	S5
状況発話(4)	会話実験	○	○	○	—	—
	お菓子	—	○	—	—	—
	飲み物	○	○	—	—	—
	天気	—	—	○	—	○
大学生活(3)	バイト	—	—	—	—	○
	修了	○	—	—	—	—
	引越し	—	—	○	—	—
好み(2)	趣味	—	—	—	—	○
	特技	—	—	—	○	—
	音楽	—	—	—	○	—
	苦手・嫌いなこと	—	—	—	○	—
専門(2)	研究テーマ・卒論/修論	○	○	—	—	—
受験(1)	受験・塾	—	—	○	—	—
進路(1)	就職	○	—	—	—	—
家族(1)	家族	○	—	—	—	—
外見(1)	服装	—	—	—	○	—
金銭(1)	出費	—	—	—	○	—
恋愛(1)	恋人	○	—	—	—	—
そのほか(2)	癒しになる動物	○	—	—	—	—
	現実逃避	○	—	—	—	—
	花火	—	○	—	—	—
	言語使用と行動	—	○	—	—	—
	健康	—	○	—	—	—
	飲み会	○	—	—	—	—

表 3-3 から抽出された 29 の延べ話題は 24 の話題項目にまとめられる。そのうち、「会話実験」という話題項目のみが 3 組で取り上げられている。2 回目の会話と同じく、ほとんどの話題項目は 1 組でしか取り上げられていない。抽出された 24 の話題項目は 10 の話題カテゴリーにまとめられる。そのうち、「状況発話」と「大学生活」は 3 組以上で取り上げられている。この 10 の話題カテゴリーは、「恋愛」「専門」を除き 2 回目に取り上げられた話題カテゴリーである。また、プライバシーに関わる「家族」「外見」「金銭」は 3 回目でも再び取り上げられている。「家族」は 2 回目と同じく S1 組が取り上げているが、「外見」「金銭」は 2 回目と異なる組で選択されていることが分かる。

注目に値するのは、「好み」の話題について、会話の回が進むにつれてさらにプライバシーに踏み込む傾向があるということである。初対面と 2 回目では、下位話題項目は「趣味」1 つしかないが、3 回目にはネガティブな一面を見せる「苦手／嫌いなこと」という話題が現れた。

最後に表 3-4 に、4 回目の会話から抽出された話題のリストを示す。

4 回目の会話から抽出された 31 の延べ話題は、23 の話題項目にまとめることができる。5 組すべてが取り上げた話題項目はないが、「会話実験」を 4 組が取り上げている。話題の関連性に注目すると、23 の話題項目は 9 種類にカテゴリー化される。そのうちの「状況発話」と「大学生活」は 3 組以上が取り上げている。また、この 9 の話題カテゴリーはいずれも前の 3 回の会話の話題カテゴリーに含まれているもので、初めて取り上げられたものはない。さらに、プライバシーに関わる話題について、2、3 回目と比べると、選択した組数が増加してきた。「外見」は初めて 2 組で取り上げられている。

表 3-4 4 回目会話における組別の話題項目と話題カテゴリー

話題カテゴリー	話題項目	組番号				
		S1	S2	S3	S4	S5
状況発話(5)	会話実験	○	○	○	○	—
	お菓子	—	○	—	—	—
	飲み物	—	○	—	—	—
	天気	—	—	—	—	○
大学生生活(3)	授業	—	○	—	—	○
	バイト	○	—	—	—	—
	試験・単位	—	○	—	—	○
	日常生活	○	○	—	—	—
	語学学習	—	○	—	—	—
専門(2)	研究テーマ・卒論/修論	○	—	○	—	—
外見(2)	服装	—	—	—	○	—
	髪型	○	—	—	—	—
	肌	○	—	—	—	—
好み(2)	趣味	—	○	—	—	—
	好き嫌い	—	—	—	○	—
	苦手・嫌いなこと	—	—	—	○	—
受験(1)	免許・資格試験	—	○	—	—	—
家族(1)	家族	—	—	○	—	—
恋愛(1)	恋人	○	—	—	—	—
中学校・ 高校生活(1)	部活動	—	—	—	—	○
	中学校・高校	—	—	—	—	○
そのほか(2)	虫問題	○	○	—	—	—
	飲み会	○	—	—	—	—

以上、5組による初対面から4回目までの会話から抽出された143話題(延べ)を会話の回ごとにリスト化し、話題カテゴリー及び下位の話題項目の様相を検証した。次節では、初対面会話と2回目以降の会話における話題選択の異同を明らかにするために、各回の会話の話題カテゴリーをリストアップして検討する。

### 3.3.2 初対面会話と2回目以降の会話における話題選択の異同

本節では、初対面会話と2回目以降の会話における話題選択の異同についてみていく。表3-5は、各会話の話題カテゴリーを、会話の回ごとにリストアップしたものである。表3-5では、当該の回の会話で、1組にでも取り上げられた話題カテゴリーは○で示し、取り上げられなかったものは一で示している。そして、2回目以降の会話では選択された話題カテゴリーを太枠で囲んだ上で、さらに初対面会話と共通するものを網掛けしている。

また、本研究の初対面会話で選択された話題が、三牧(1999)の初対面会話の話題選択スキーマに当てはまるかどうかを検証するために、三牧(1999)で挙げられた初対面の話題カテゴリーも示した。三牧(1999)の話題カテゴリーは「大学生活」「所属」「居住」「共通点」「出身」「専門」「進路」「受験」である。

この表に示すように、本研究の初対面の会話において取り上げられていた話題カテゴリーは三牧(1999)と概ね一致している。異なるのは「好み」「受験」「状況発話」である。次に、2回目以降の話題選択を見ると、初対面会話で取り上げられた9つの話題カテゴリーのうち、「所属」「共通点」以外の7つの話題カテゴリー(網掛け)が観察された。そのうち、「大学生活」「状況発話」「好み」は4回の会話で毎回選択されている。

回ごとに見ると、まず、2回目の会話で取り上げられた話題カテゴリー数は、初対面を上回って12種類になった。「家族」「金銭」「宗教」などプライバシーに関わる話題が観察された。また、学校生活に関する話題は、今の大学生活にとどまらず、過去の中学校・高校時代に遡って取り上げられた。次に、3回目と4回目の会話で選択された話題カテゴリーは「恋愛」「専門」を除いて、いずれも2回目の話題カテゴリーに含まれている。つまり、2回目から4回目までの会話における話題選択には大きな変化がないといえる。このように、2回目以降の会話においても話題選択スキーマが存在する可能性があるという示唆を得た。具体的に言えば、その話題選択スキーマは表3-5に示したように、14種類の話題カテゴリーからなる。この14の話題カテゴリーには初対面会話の話題選択肢リストに含まれる「大学生活」「状況発話」「好み」などあれば、「外見」「家族」「金銭」など初対面会話では回避されたものもある。

表 3-5 三牧（1999）と本研究の話題カテゴリーリストの比較

話題カテゴリー	三牧(1999)		本研究		
	初対面	初対面	2回目	3回目	4回目
大学生活	○	○	○	○	○
所属	○	○	—	—	—
居住	○	○	○	—	—
共通点	○	○	—	—	—
出身	○	○	○	—	—
専門	○	○	—	○	○
進路	○	○	○	○	—
受験	○	—	○	○	○
状況発話	—	○	○	○	○
好み	—	○	○	○	○
外見	—	—	○	○	○
中学校・高校生活	—	—	○	—	○
家族	—	—	○	○	○
金銭	—	—	○	○	—
宗教	—	—	○	—	—
恋愛	—	—	—	○	○

### 3.3.3 初対面会話と2回目以降の会話における話題の踏み込み方の相違

前節の表 3-5 から分かるように、初対面会話においても2回目以降においても「大学生活」「居住」「出身」などの7種類の話題カテゴリー（網掛け）が取り上げられている。本節では会話例を踏まえ、初対面と2回目以降の会話では、同一話題<sup>15</sup>への踏み

<sup>15</sup> この話題は上位概念の話題カテゴリーを指す。

込み方の相違を分析する。

会話例 3-1 と会話例 3-2 は「進路」という話題がそれぞれ初対面会話と 2 回目の会話では取り上げられるものである。

会話例 3-1 の 1 行目で KR は質問文の形式で「就活はもう終わったんですか」と「進路」の話題を導入している<sup>16</sup>。SR は「あの就活やらなくてあのう:<進学する:予定>なので」(2 行目) と答えている途中、KR は「あ同じく」(3 行目) と割り込んで、「もうちょっと遊びたいなと思って」(8 行目) と進学する理由を話している。その後、話題が「居住」→「バイト」などに展開してから、再び「進路」という話題に戻る。

130 行目で KR は「結構みんな進学されます？」と SR の同期の進学状況について問いかける。それで 131 行目から 144 行目まで SR はサークルと学類の同期の進学情報を提供している。SR の答えに対して、KR は「あ:::それ多いといいなあ」(145 行目) と評価してから、147 行目から同期の進学状況を提供しはじめる。

### 例 3-1 情報交換にとどまる同一話題の会話例 (初対面会話)

- ➡1 KR://就活はもう終わったんですか  
2 SR:あの就活やらなくてあのう:<進学する:[予定]>なので  
3 KR: [あ同じく  
4 SR:そうですか,じゃ後2年よろしく  
5 KR:お願い[します hhhhhhh  
6 SR: [hhhhhhhhhh  
7 SR:そっか:じゃもうひたすら書を極めて  
8 KR:まあまあまあもうちょっと遊びたいな[と思って hhhhh  
(121 行略)
- ➡130 KR://結構みんな進学されます?  
131 SR:うん:サークルの同期は(.) まあ(.) 3分の1ぐらい[:::は:  
132 KR: [<結:構多い:だ>  
133 SR:まあなんだろう(.) 学類:学類じゃないや(.) あのうサークル人数まず多:

<sup>16</sup> 質問文による話題導入の詳述は第 5 章を参照のこと。

- 134 くて
- 135 KR:あ[:
- 136 SR: [それが::20:25 人ぐらいかな同期が=
- 137 KR:=°なる[ほど°
- 138 SR: [結構多いので:
- 139 (.)
- 140 SR:だから(2.0)まあ(1.0)8-8人7,8人ぐらいは(.)多分行きます
- 141 KR:え::じゃひとりぼっちじゃない=
- 142 SR:=ではない=
- 143 KR:=いいな=
- 144 SR:=hhhhhh 後学類の(.)あのう:友達とかも院進する子は多くて
- 145 KR:あ::それ多いといいなあ
- 146 SR:なんですよ
- 147 KR:そもそも学:類(.)[というかも専攻の中に
- 148 SR: [うん
- 149 SR:うんうん
- 150 (.)
- 151 KR:同期が8人しかいなくて私を含めて
- (12行略)
- 154 KR:でその人たちに聞くと私は院進いや[みたいな子が多いから

上記の会話例 3-1 において、初対面である相手を知るために、KR と SR は相互に自分と同期の進路に関する情報を交換しあうことで会話を展開させる。また、当該話題が 2 回目会話では再び導入される。しかし、初対面会話では主に客観的な情報交換がとどまるが、下記の会話例 3-2 のように、2 回目会話では話題になる事柄に対する会話参加者の感情、意見などが提示され、共感しながら会話を展開させる。

会話例 3-2 の直前では 2 人は「現実逃避」という話題から転生の話をしていて、1 行目で KR は「もうなんかこの時期結構心が苦しくなってくる時期です」と平叙文によ

り導入し<sup>17</sup>、引き続き「4年のこの時期」は「だめ」(3、5行目)だとネガティブな感情を吐き出している。SRが「うん」と理解を表す相づちを打ち、「院試とかがね」「あるし、卒論もあるしね」(6、8行目)と心が苦しいという理由を付け加え、同感を示している。その後、2人は大学院入試の出願や選抜状況について話して、受験失敗になるのではないかと不安を抱いている。しかし、周りの人に「だって院試でしょう、ほとんどみんな受ければ受かるでしょう」(65、66行目)と言われても、「何とも言えない、うん、うんってなっちゃうから」(69、70行目)、「ちょっときつい、いやな、もう苦しいって思って」(80、81行目)と周りに理解されない苦しみを訴えている。SRは「そう」「うんうんうんうん」と同意を示すあいづちを打ち、「ね、うん、ねどうしようもないんですけどね hhhhhhh」(83行目)とKRの気持ちに寄り添う反応を示している。

### 例 3-2 考えや意見交換が行われる同一話題の会話例 (2回目会話)

➡1 KR:// もうなんかこの時期結構心が苦しくなってくる時期です

2 SR: まあ

3 KR: 4年のこの[時期

4 SR: [なりますね=

5 KR: =だめ

6 SR: うん (1.0) °そうなんですよ°院試とかがね

7 KR: そう

8 SR: あるし、卒論もあるしね

(56行略)

65 KR: 就活とか教職とかとってたって子に比べたら、え、だって院試でしょう、ほ

66 とんどみんな受ければ受かるでしょうと言う ( ) だから

67 SR: °そう°

68 KR: そうじゃないよって言っても、でも私たちの確率に比べたらというふう

69 に、確率の話されて、私達のほうが悲惨だからという言い方されると、何と

70 も言えない、うん、うんってなっちゃうから

<sup>17</sup> 平叙文による話題導入に関する詳述は第6章を参照のこと。



- 71 SR:なんかそのうちマウントの取り合いになっちゃう
- 72 KR:[そう
- 73 SR:[hhhhhhhhhh
- 74 KR:なんか高校の,なんか大学の入試みたいになっちゃって
- 75 SR:うんうん
- 76 KR:センターまで頑張ることもう諦めて,推薦とか
- 77 SR:hhhhhh
- 78 KR:指定校とか取って,まあ遊ぶみたいな
- 79 SR:うんうんうんうん
- 80 KR:もうなんかそういう気分ちょっといい,ちょっときつい,いやな,もう苦しいっ
- 81 て思っ
- 82 (1.0)
- 83 SR:ね,うん,ねどうしようもないんですけどね hhhhhhh

また、2回目以降の会話では話者のネガティブな側面も開示されるようになる。例えば、「好み」という話題は初対面会話でも2回目以降の会話でも取り上げられている。初対面会話では質問文により相手の趣味が引き出されているが、2回目以降の会話では自ら苦手・嫌いなことを提供することが観察された。

会話例3-3は初対面会話の断片である。1行目でHSは「えなんか(.)趣味とかある？」と質問文を用いて「好み」の話題を導入している。HSの情報要求に対して、OKは2行目以降で「録画することが好き」と趣味を相手に教えている。OKの情報提供に対して、HSは「なるほどね」(12行目)「面白い」(15行目)と評価し、15行目の後半で「なんか(.)サークルとかじゃ何も入ってない？」と所属のサークルを聞いて、別の話題に切り替える。

### 例 3-3 趣味を開示する同一話題の会話例 (初対面会話)

- ➡ 1 HS://えなんか(.)趣味とかある？
- 2 OK:趣味(.)んなんだろう(.)あのう録画:をするのが好き,なんか好きな番組を

- 3 HS:ええ
- 4 OK:番組表をみつけて録(h)画(h)す(h)る(h)のが好き
- 5 HS:お::[hhhh 録画見るのがじゃなくて
- 6 OK: [hhh
- 7 OK:あ見るのが好きなんだけど
- 8 HS:あうんうん
- 9 OK:まあ探してて何この隙間番組みたいな
- 10 HS:あ::hhh
- 11 OK:が好き
- 12 HS:なるほどね
- 13 OK:( )
- 14 (.)
- ➡15 HS:面白い, // なんか(.)サークルとかじゃ何も入ってない?
- 16 OK:あサークルは11月で引退したんだ[けど

このように、初対面会話で質問文により導入される「好み」の話題に対して、応答者は趣味を相手に教えている。それで情報要求に対する応答をもらえると、話題導入者は話題を終結に向かわせるように評価表現で話題を締めくくり、新たな話題を導入する。

一方、2回目以降の会話における「好み」という話題の直前では、ビキニを購入した経験について話が進められ、KR はビキニを着ず人生を終えると寂しいと話していた。そして、参加者の間に若いうちにビキニを着た実績はほしいという共通認識が達成される(1~6行目)。7行目以降でKR は、海やプールが嫌いと言語始め、自分の苦手なことを開示することで、「好み」<sup>18</sup>という話題を導入している。続いて「プールも5メートルしかできない」(17行目)と水泳が苦手であることについて話している。それに対して、SRは何度も「大丈夫」と慰めすることで、相手に寄り添う。27行目から

---

<sup>18</sup> 「好み」という話題カテゴリーには、会話例3-4で取り上げられる「苦手・嫌いなこと」という話題項目が含まれている(3.3.1参照)

KR は水が嫌いな理由として、小さい時スイミング教室で溺れそうになった経験を語り始める。ここで注目したいのは、溺水経験の語りの最中に、KR と SR による笑い (84 ~89 行目) が起こっており、まるで笑うべきものとして捉えられている点である。

例 3-4 苦手・嫌いなことを開示する同一話題の会話例 (4 回目会話)

- 1 SR:[まあ (ビキニ) 着たという実績は確かにほしいかもしれない=
- 2 KR:[別に
- 3 KR:=ほしいんだよ
- 4 SR:°確かにね°
- 5 KR:そういう青春 1 ページがほしい
- 6 SR:おおお
- ➡7 KR://本当に(.)海やプールがにが-嫌い
- 8 SR:うん
- 9 KR:水が苦手なの
- 10 SR:うんうんうん
- 11 KR:でもう高校もプールがないところを選んだし
- 12 SR:わざわざ
- 13 KR:そう,だから最終的に,最後入ったのは中学校のプールでおしまい
- 14 SR:うんうん
- 15 KR:それ以来は一回も入ってない[海にもプールにも
- 16 SR: [うんうんうんうんうん
- 17 KR:プールも 5 メートルしかできない
- 18 SR:h h h h h h まあ大丈夫, 5 メートルできる (ならなんとか) ,あと浮いていれば,
- 19 助けてくれるから大丈夫 h h h h h h h h h h h h
- 20 KR:[ 蹴伸びしてこれで終わる
- 21 SR:[ ( )
- 22 SR:あと上むいてぶかーって力抜けば大丈夫
- 23 KR:耳に入るじゃ,だって

- 24 SR:え大丈夫,大丈夫
- 25 KR:入るよ
- 26 SR:それ,多分角度のせい,ちゃんと,ちゃんと真上見てれば大丈夫
- 27 KR:あ:::もう,ちいちゃい時に(.)それこそ夏休みの期間だけ
- 28 SR:うん
- 29 KR:プールに通うみたいなの
- 30 SR:うんうん
- 31 KR:スイミング教室ちょっと通うみたいなのをちょっとしてて  
(48 行略)
- 80 KR:[濡れながらも思っ
- 81 SR:[いや:::
- 82 SR:それトラウマになる[わね,それね
- 83 KR: [そうそう
- 84 KR:で母親がびっくりして[振り返った(h)ら h(濡(h)れ(h)て(h)る(h)の
- 85 SR: [hhhhh
- 86 KR:[(何(h)や(h)っ(h)て(h)ん(h)の(h)),めっちゃ怒(h)ら(h)れ(h)て hhhhh
- 87 SR:[hhhhhhhhhhh
- 88 SR:そ(h)れ(h)は(h)そ(h)う h[hhhhhhh
- 89 KR: [hhhhhh
- 90 KR:もう hh 二度と入りたくない=
- 91 SR:=あ(h)れ(h)以(h)来 h
- 92 KR:もうあれ以来本当に水が嫌い

このように、「好み」という同一話題について、初対面会話では質問文に応じて、趣味を相手に教えることで話題が終了に向かう（例 3-3）。一方、2 回目以降の会話では話し手が自ら自分の不得意・苦手な一面を相手に開示してから、苦手になった理由についても詳しく語る（例 3-4）。「自分の弱点や社会的に望ましくない側面的のような」ネガティブなものは、深層的な自己開示と言える（丹羽・丸野 2010:198）。つまり、初

対面会話と比べ、2回目以降の会話では「好み」という話題には内面性に深入りしていく傾向にある。

### 3.4 考察

まず、話題項目と話題カテゴリーについて考察する。初対面会話の9種の話題カテゴリーのうち、過半数に相当する3組以上で取り上げられたものは6種と、3分の2を占める。この点で、初対面会話における話題選択には共通性が高いと言える。その一因は、初対面会話において共有される話題選択のスキーマ（三牧1999）である。三牧(1999:50)は、日本人大学生の初対面会話において会話参加者の個性や組み合わせに関わらず、一般的知識として共有されている話題選択のスキーマの存在を指摘している。一方、2回目以降では、1組にしか取り上げられなかったものが多く見られる。親しくない人との2回目以降の会話では、初対面会話と比べ、相手との距離が少し縮まり、無難な話題から、もう一步踏み込んだ話題も持ち出すことが可能になる。そのため話題選択はある程度自由になり、容易にコミュニケーションが取れる。一方、2回目以降の会話において共通して選択される話題が限られていることは、どのような事柄を話題として取り上げたらいいのか、どこまで踏み込んだらいいのかなどの知識を共有しない場合、話題選択を難しくするという側面も指摘できる。

次に、初対面会話の話題と2回目以降の会話の話題選択の異同について考察する。本研究は組数が限られているものの、初対面会話における9つの話題カテゴリーは三牧（1999）の初対面話題選択肢リスト（表3-5参照）と概ね一致している。ただし、三牧（1999）と異なり、「状況発話」と「好み」が取り上げられた。「状況発話」という話題カテゴリーが観察されたのは、親しくない相手との会話では会話実験や目の前に置かれるお菓子など「周りの状況を取り込みながら会話を展開する傾向がある」（張2008:462）と考えられる。また、「好み」という話題は相手の嗜好を知ることができるため、取り上げやすいだろう。そして、「受験」は、初対面の会話で観察されず、2回目以降の会話でも各回で1組が取り上げるのみであった（3.3参照）。このように「受験」の話題が少なかった一因は、協力者の学年である。協力者の学年をばらつかせた三牧（1999）と異なり、本研究の協力者は高学年であるため（表2-2参照）、大学受験

から数年経っていることや、調査時点で進路が未定であることなどから、「受験」への関心がそれほど高くなかったのだと考えられる。

既に述べたとおり、初対面と比べると、2回目以降の会話で選択される話題は1組のみで取り上げられるものが多く、選択される話題は多様になった。しかし、3、4回目の会話における話題カテゴリーのほとんどは2回目の会話と一致している。つまり、2回目以降の会話において、選択される話題の種類には大きな変化はない。このことから2回目以降の会話にも話題選択スキーマが存在することが示唆される。これは同一文化内においてどのような話題が適切であるかという規範が共有されているからだろう。2回目以降の会話における話題選択スキーマは14種類の話題カテゴリーで構成される。この14種類の話題カテゴリーには初対面の際に取り上げられやすい「大学生活」「居住」「出身」など身の上の情報類も含まれるが、これらに加えて、「外見」「家族」「恋愛」などプライバシーに関わるものも観察された。熊谷・石井(2005)は、話題選択の意識調査の結果から、「自分や相手の服装・髪型(本稿の「外見」にあたる)」「家族」「恋愛」は女性の友人同士の会話でよく話題にされると指摘している。しかし、本研究の会話参加者が、友人とまで言えない、単なる知り合い程度の関係であったことから見れば、これらの話題は、実際には、それほど親しくない相手に対しても取り上げられうるということが明らかとなった。本研究で異なる結果が得られた一因は、熊谷・石井(2005)のアンケート調査と違い、本研究は実際の会話を踏まえて、話題選択を検証したことによると考えられる。ただし、本研究ではこれらのプライバシーにかかわる話題を取り上げる際にして、話題導入者は直前の話題に関連させたり、ためらい表現を用いたりすることで相手に配慮を示している<sup>19</sup>。

最後に、初対面会話と2回目以降の会話では取り上げられる同一話題における踏み込み方の相違を考察する。初対面会話では背景知識が共有されないため、相手がどのような人であるのかを知ることは、会話の動機となる。よって、相手の趣味や将来の進路に関する客観的な情報が活発に交換される。一方、2回目以降の会話では初対面と比べ、参加者の関係が親しくなり、より内面性に立ち入った情報交換が行われるようになる。さらに、2回目以降の会話では話者のネガティブな一面が話題として取り

---

<sup>19</sup> プライバシーにかかわる話題に対する話題導入者の配慮は第4章で詳述する。

上げられており、参加者による笑いが伴う。これは、初対面会話では回避される失敗談のようなネガティブな話題は、2回目以降の会話では話題導入者が「いわば「面白いもの／笑うべきもの」として提示し、それに応じて笑うことで」、参加者の協働的に話題を展開させる手段になっている（臼田 2020:354）。このように、2回目以降の会話では会話参加者は単に情報を交換するだけでなく、相手との共感を求めつつ面白く会話を進める意志がうかがえる。

### 3.5 まとめ

本章では、日本人女子学生による初対面から4回目までの会話をもとに、会話の回数の重なりにしたがった話題選択の内容の変化を解明した。初対面会話では、会話参加者の個性や組み合わせには関わらず、話題選択に高い共通性があり、概ね三牧(1999)の初対面話題選択のスキーマと一致している。2回目以降の会話では、初対面と比べ、会話参加者の関心に応じて多様性が見られたが、話題選択スキーマが存在する可能性がある」と指摘した。2回目以降の会話における話題選択スキーマには、初対面会話でよく取り上げられる「大学生活」「居住」など以外、「中学校・高校生活」や、プライバシーに関する「家族」「外見」など話題が含まれている。また、初対面会話と2回目以降の会話のいずれにおいても取り上げられる同一話題の踏み込みについては、初対面会話と比べると2回目以降の会話ではより話題の内面性に踏み込んでいく傾向が見られた。

次章では、直前の話題との関連の有無に着目し、話題がどのように選択されるかを分析する。

## 第4章

### 直前の話題との関連の有無からみる話題選択



## 第4章 直前の話題との関連の有無からみる話題選択

本章では、研究課題(2)に対して、直前の話題との関連の有無に着目して、話題がどのように選択されるか分析する。第3章では話題の種類を整理し、どのような話題が選択されるかについて明らかにした。しかし、ここで我々は新たな話題を導入するにあたっては、直前の話題に関連させつつ取り上げるか、または、直前の話題と全く無関係なものを取り上げるかという問題に直面する。日本語母語話者は日本語学習者による話題導入に対して唐突な印象を受ける(田中 2015、嶋原 2017)ため、日本語学習者が直前の話題に関連のある話題を選択すれば、話題間の一貫性が保たれ、話題導入の唐突さを軽減し、母語話者に受け入れられやすくなるだろう。また、今までの話の流れを変えようとして、全く新たな内容を話題として取り上げる場合、どのような話題を選択すればよいのだろうか。これらの問題を解決するために、直前の話題との関連の有無という観点から、話題と話題のつながりに関するパターンを見出し、どのような話題がどのように選択されるか解明する必要があると考えられる。

以下4.1節では、直前の話題との関連の有無に着目した先行研究を概観する。4.2節では分析方法を示す。続いて4.3節では分析結果を述べ、各話題選択の型の使用傾向及び話題内容との関連性を述べる。最後に、4.4節では分析結果を踏まえ考察を行う。

### 4.1 直前の話題との関連の有無に着目した研究と本研究の位置付け

直前の話題との関連の有無に着目した研究のほとんどは初対面会話か友人・家族同士の会話を対象にしており、その代表的な研究として村上・熊取谷(1995)、三牧(1999)が挙げられる。

村上・熊取谷(1995)は、3人間の友人・家族同士の会話を対象に、隣接する話題の内容から話題選択の型を「新出型」「派生型」「再生型」に分類している。「新出型」は「先行トピックの中で全く言及されていなかったことが後続トピックになる場合」であり、派生型は「先行トピックで言及された事象からトピックが選ばれ、導入される場合」である。そして「再生型」は「隣接トピックの間では一見新出型に見えるつながりが、実はそれ以前のトピックで語られた内容が再度後続トピックとして導入される

場合」である（村上・熊取谷 1995:103-104）。つまり、「再生型」は直前の話題と関連のない話題が繰り返し導入されるものと言える。ただし、以前言及した話題が直前の話題と関連しつつ再導入されることもありうるため、「再生型」の定義は検討する余地がある<sup>20</sup>。

上述の村上・熊取谷（1995）の3分類と異なり、三牧（1999）は初対面会話の中で直前の話題との関連の有無により、「文脈関連型」と「文脈無関連型」に大別している。「文脈無関連型」とは「直前の話題が取り立てられて新話題になる型」であり、「文脈無関連型」とは「直前の発話及び文脈に直接関連のない話題が導入される型」である（三牧 1999:52-54）。

話題間の一貫性と関連性を断ち切る「文脈無関連型」の話題を選択すると、「唐突な印象につながりやすい」（嶋原 2017:48）ため、話題選択の不成功のリスクが高いと推測できる。しかし、三牧（1999:54）は、この型の話題を取り上げる際に、話題選択肢リストから選択すると、不成功のリスクを回避できるという。三牧（1999）は38組の日本語母語話者大学生の初対面会話を対象に行った調査で、一般的知識として共有される話題をリスト化して、話題選択肢リストを作成した。話題選択肢リストは、「大学生活」「所属」「居住」などの23個の話題項目からなる。また、花村（2014:91）は、「現場性」に関する話題は、「何の前触れもなく」突然導入されたとしても、「聞き手も同じ状況を共有」しているため、「トラブルの要因とはなりにくい」という。

以上概観したように、研究者によって、研究対象や話題選択の分類が異なる。三牧（1999）は、直前の話題との関連の有無のみに着目し、分類を行うのに対して、村上・熊取谷（1995）は直前の話題との有無のほかに、話題の既出・初出にも注目し、既出の話題である「再生型」を提示することで意義が大きいと言える。のちの話題間のつながりに関する研究の多くは、村上・熊取谷（1995）の分類を踏襲する。ただし、三牧（1999）と村上・熊取谷（1995）は各話題選択の型の使用傾向について検証が行われていないという問題点が残る。

一方、各型の使用傾向を解明した研究には、蔡（2012）、季（2015）が挙げられる。

蔡（2012）、季（2015）は村上・熊取谷（1995）の分類を援用し、初対面会話におけ

---

<sup>20</sup> 「再生型」の定義と分類は4.2節で詳述する。

る各型の使用傾向を調べている。蔡（2012）は、「派生型」と「新出型」が並んで多く用いられており、「再生型」の使用数は少ないと指摘している。季（2015）は、「新出型」が「派生型」よりわずかに多いが、一番少ないのは「再生型」であるとしている。蔡（2012）と季（2015）により、初対面会話では「再生型」があまり用いられていないことが分かった。

以上、直前の話題との関連の有無に着目した研究を概観した。三牧（1999）と花村（2014）の説により、ある種の話題は直前の話題と関連がなくとも導入され、相手に唐突な印象を与えないということが分かる。このことから直前の話題との関連の有無にかかわる話題選択が、話題の種類に何らかのつながりがあることが確認できた。しかし、このつながりの実態は何であるのか、つまりどのような話題が、直前の話題に関連づけられ導入されるのか、または、直前の話題とは何の関係もなく自由に導入されるのかについては未解明である。そこで、本研究では初対面から4回目までの会話を対象に、直前の話題との関連の有無という観点から話題選択の実態を解明する。

## 4.2 分析方法

本節では本研究の分析方法を述べる。まず、4.2.1 節で直前の話題との関連の有無により話題選択の型を分類する。次に、4.2.2 節で分析の観点を示す。

### 4.2.1 直前の話題との関連の有無による分類

本研究は、三牧（1999）と村上・熊取谷（1995）を踏まえ、直前の話題との関連の有無と話題の既出・初出という属性により、話題選択の型を分類し、以下のようにまとめる。

図1では、三牧（1999）を援用し、直前の話題との関連の有無により「A 文脈無関連型」「B 文脈関連型」に分類する。さらに村上・熊取谷（1995）を踏まえ、話題の既出・初出に着目し、A と B はそれぞれ「A-1 新出型」「A-2 文脈無関連の再生型」と「B-1 文脈関連の再生型」、「B-2 派生型」に細かく分類する。「A-1 新出型」と「B-2 派生型」は初出の話題である。一方、「再生型」<sup>21</sup>は、以前の会話で言及した内容が、

---

<sup>21</sup> 村上・熊取谷（1995）と違い、本研究は縦断的な会話を対象にしているため、「再生

再び話題として導入されるものであるため、既出の話題である。なお、直前の話題との関連の有無により、さらに「A-2 文脈無関連の再生型」「B-1 文脈関連の再生型」に分類している。

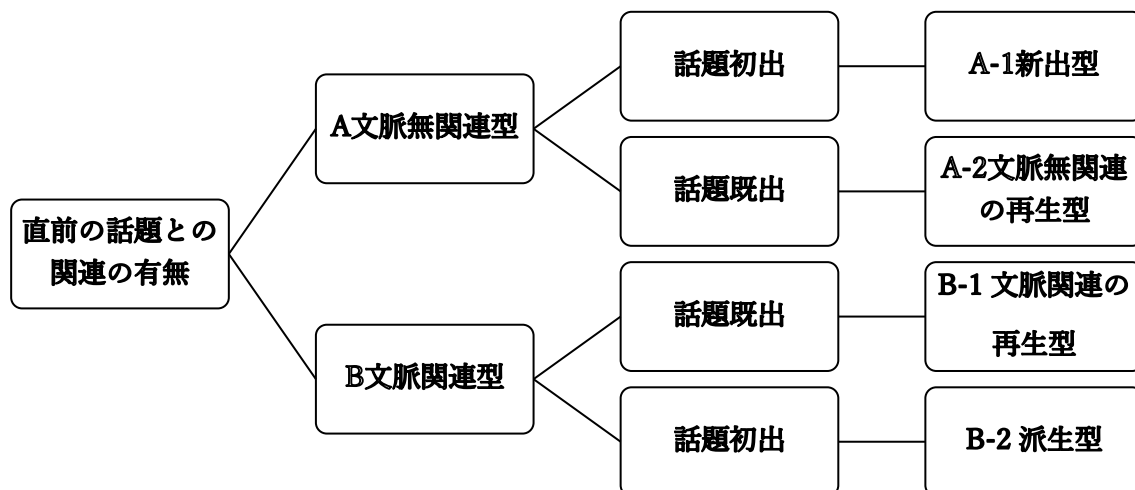


図 4-1 話題選択の型の分類

次に、各型の定義について会話例を挙げながら、説明する。話題導入がされた箇所  
に二重スラッシュ「//」をつけ、直前の話題と関連がある箇所を「\_」で示す。

まず、「A 文脈無関連型」の下位分類である「A-1 新出型」について、会話例を挙げ  
ながら説明する。「A-1 新出型」とは、直前の話題とは関連がなく、今まで言及されて  
いなかったものが話題として導入される場合である。例 4-1 における「飲食禁止」は  
「A-1 新出型」である。

例 4-1 の直前では、OA と KI は常に傘を忘れるので、傘を忘れないように、頭に装  
着する自動的に開く傘があったらいいと話していた。それで大話題「忘れること」の  
下位分類の小話題「忘れない傘」が導入・展開されている。「室内でも開くとかやばい

---

型」は同一会話だけでなく、以前の会話で同一ペアにより言及されたことがある話題は再  
導入される場合も含む。

ねって感じ」(1行目)という発話をきっかけにして、2人は傘が室内で開くという怖さを冗談で話している(2~19行目)。そして、「うん,確かに忘れはしないよね絶対」(20行目)というKIの発話の後、途切れなくOAは「=うん,忘れはしない」と相手の話を繰り返し、同意を示す(21行目)。22行目ではKIは「うんそう思う」と賛同のあいづちを打つ。続く22行目の後半で「ここで飲食禁止だった気がするんだけど」と中途終了発話文の形で「飲食禁止」という話題が導入される。「飲食禁止」の話題は直前の話題には一切関係を持たないし、それ以前にも話題になっていない。したがって、「飲食禁止」は「A-1 新出型」に属する。

例 4-1 「A-1 新出型」の会話例：話題「忘れない傘」→話題「飲食禁止」

1 KI:室内でも開くとかやばいねって感じ

2 OA:うん間違いない hhh

3 KI:しゃべってる時とかに[ちょっとつば飛んだらがボンってみた

4 hhhhhhh

(15行略)

20 KI:うん,確かに忘れはしないよね絶対=

21 OA:=うん,忘れはしない

➡22 KI:うんそう思う,//ここで飲食禁止だった気がするんだけど

次に、「A-2 文脈無関連の再生型」は、直前の話題の内容や発話に関係のない、以前に取り上げられた話題が再度導入される場合である。例 4-2 における「恋人」の話題は「A-2 文脈無関連の再生型」である。

例 4-2 は KI と OA による 4 回目の会話の断片である。例 4-2 の冒頭部では KI は毎日「20 キロぐらい本とか資料とか持って」、宿舎から大学に行くと「日常生活」を話題にして発話している(1行目、5行目、7行目)。短いポーズの後、11行目でKIは「そんな感じだわ」と締めくくる。12行目でOAは「やば:」と評価をしている。13行目でKI「やばい hhh や(h)ば(h)い hhhh」と笑いながらOAの発話を繰り返している。大谷(2018)は、相手の発話を繰り返したりする限られた反応とまとめ表現は話題転

換ストラテジーの一つであるとしている。そのため、11行目から13行目までの2人のやりとりから「日常生活」の話題はそれ以上展開しないことを示唆している。そこで、短いポーズ(14行目)の後、KIは15行目で「え彼氏,あそう」と何かを思い出し、話題を変える予告をする。続く17行目で「彼氏の話を知りたかったわ私」と「恋人」の話題を導入する。「恋人」の話題は直前の話題「日常生活」とは関連性がない。しかし、18行目から20行目までのOAの発話でわかるように、当該話題は前週の会話実験で取り上げられている。よって、話題「恋人」は「A-2 文脈無関連の再生型」に属する。

例 4-2 「A-2 文脈無関連の再生型」の会話例：話題「日常生活」→話題「恋人」

- 1 KI:ものすごい20キロぐらい本とか資料とか持って毎日
- 2 OA:筋トレだね
- 3 KI:筋トレだわ
- 4 OA:[なってる
- 5 KI:[本当(.)しかも今日とか一ノ矢((宿舎の名前))から歩いたから
- 6 OA:[え:
- 7 KI:[雨だから
- 8 OA:あそっか,[そうだよ
- 9 KI: [そう
- 10 (.)
- 11 KI:そんな感じだわ
- 12 OA:やば:
- 13 KI:やばい hhh や(h)ば(h)い hhhh
- 14 (.)
- 15 KI://え彼氏,あそう
- 16 OA:そう
- 17 KI: hhh 彼氏の話を知りたかったわ[私 [そう
- 18 OA: [本当,なんか,[私もなんか,えなんか

- 19 先週あの感じで終わっちゃった[からちょっとほら,なんか話聞きた  
20 いなとめっちゃ思ったんだけど

そして、「B-1 文脈関連の再生型」とは、以前話題になったものが直前の話題と関連づけられて、再度導入される場合である。下記の会話例 4-3 では「会話実験」という話題が「B-1 文脈関連の再生型」である。

例 4-3 の冒頭部では OK は「風邪引いてらっしゃるというんでこの 100%ジュースいいかもしれないですね」と（1、2 行目）「お菓子と飲み物」という話題を導入している。それで 2 人は目の前に置かれるジュースとお菓子について話している。25 行目で HS は「めっちゃ美味しい」とお菓子を評価している。続いて 2 人は共同発話文の形で「お菓子も食べてジュースも飲んでお金がもらえてしまうという最高の実験」と会話実験を評価している（26～28 行目）。そして、5 秒の沈黙が入る（30 行目）。会話の流れを締めくくるまとめや評価表現や長いポーズは話題転換のストラテジー（大谷 2018:99）であるため、「お菓子と飲み物」という話題はそれ以上展開しないことを意味している。そこで、31 行目では HS は「なにきっかけで参加(.)したの?」と「会話実験」という新しい話題を導入する。「会話実験」は、直前の話題における会話実験への評価が取り立てられ話題化されたものなので、直前の話題と関連がある。しかも「会話実験」は、同一会話ですでに選択され、繰り返し出現したものである。したがって、「会話実験」は「B-1 文脈関連の再生型」に属する。

例 4-3 「B-1 文脈関連の再生型」の会話例：話題「お菓子と飲み物」→話題「会話実験」

- 1 OK:風邪引いてらっしゃるというんでこの 100%ジュースいいかもし  
2 れないですね  
3 HS:あ効く[かもしれない  
(21 行略)  
25 HS:めっちゃ美味しい  
26 OK:ねお菓子も食べてジュースも飲んでお金がもらえてしまう[という

27 HS: [うん

28 うん,最高の[実験

29 OK: [hhh,h

30 (5.0)

→31 HS://なにきっかけで参加(.)したの？

32 OK:ええとツイッターみてたら(.)日日((専攻の名前))の先輩がこういう実験募

33 集してますって言ってて＝

最後に、「B-2 派生型」とは、直前の話題の内容を引用したり、直前の話題の内容により連想したりして、初めて話題化されるものである。会話例 4-4 における「共通の知人」は「B-2 派生型」である。

会話例 4-4 では、1 行目で AB は「障害科学は人は多い？少なめ？」と OA の所属する「障害科学」の人数の情報を求めていることで、大話題「専攻と学科」の下位分類をなす小話題「学類の人数」が導入されている。4 行目から OA が学類の人数に関する情報を提供している。2 人の笑い（16、17 行目）、沈黙（18 行目）、声が小さくなったこと（19 行目）という反応は、当該話題はそれ以上継続せず、終結可能になることを示唆している。そこで、AB は「私の(.)ルームメイトが障害科学の人」（20 行目と 22 行目）と「共通の知人」という新話題を導入する。話題の「共通の知人」は、直前の話題の 1 行目の「障害科学」を取り上げて話題化したものであり、しかもここで話題として初めて導入されたものである。よって、「共通の知人」は「B-2 派生型」である。

例 4-4 「B-2 派生型」の会話例：話題「学類の人数」→話題「共通の知人」

1 AB:障害科学は人は多い？少なめ？

2 OA:専攻？

3 AB:専攻,ううん学類

4 OA:学類は(.)何人だったかな(1.0)40 弱ぐらいうん[学類生は  
(11 行略)

16 OA:hh[hh



- 17 AB: [hhhh,h  
18 (2.0)  
19 OA:°45 人:なんか°  
➡ 20 AB://私の(.)ルームメイトが  
21 OA:うん  
22 AB:障害科学の人  
23 OA:えっ:えっグロービ((宿舎の名前))?

以上、会話例を挙げながら、4種類の話題選択の型を述べた。次節では、本研究の分析の観点を紹介する。

#### 4.2.2 分析の観点

本研究は以下の3つの観点からどのような場合、話題が直前の話題に関連・無関連づけられ導入されるか分析する。

まず、会話回ごとに各話題選択の型の使用傾向を把握し、初対面と2回目以降の会話の話題選択の相違を解明する。

次に、各型と話題の種類とのつながりを解明し、どのような話題がどのように選択されるか検証する。話題の種類について、第3章では上位概念の話題カテゴリーと下位概念の話題項目をまとめたが、話題間のつながりをより明確にするために、ここでは上位概念である話題カテゴリーを使用する<sup>22</sup>。具体的には、会話回ごとに各話題における話題選択の型の分布状況を調べる。続いて、各話題の過半数以上を占める選択の型を整理し、初対面会話と2回目以降の会話に分け、どのような話題がどの選択の型により導入されやすいか解明する。

最後に、プライバシーにかかわる話題<sup>23</sup>に着目し、会話例を挙げながら、これらの話題がいかに直前の話題に関連・無関連させつつ導入されるか分析する。プライバシーにかかわる話題に焦点を当てるのは、これらの話題は唐突に導入されると、相手の私

<sup>22</sup> 以下本章で言及する話題は話題カテゴリーを指す。

<sup>23</sup> プライバシーにかかわる話題の認定の詳述は第3章を参考のこと。

的領域（鈴木 1997）に踏み込む可能性が高いからである。

### 4.3 分析結果

本節では分析結果を示す。以下 4.3.1 節で会話回ごとに各型の使用傾向を述べた上で、初対面と 2 回目以降の会話の相違を示す。4.3.2 節で話題の種類と話題選択の型のつながりを示す。最後に、4.3.3 節で直前の話題との関連の有無に着目し、プライバシーにかかわる話題はいかに取り上げられるか分析する。

#### 4.3.1 会話回ごとの話題選択の型の使用傾向

会話回ごとの各型の使用傾向は以下のようにまとめる。図 4-2 における数字は各型の話数数を指す。

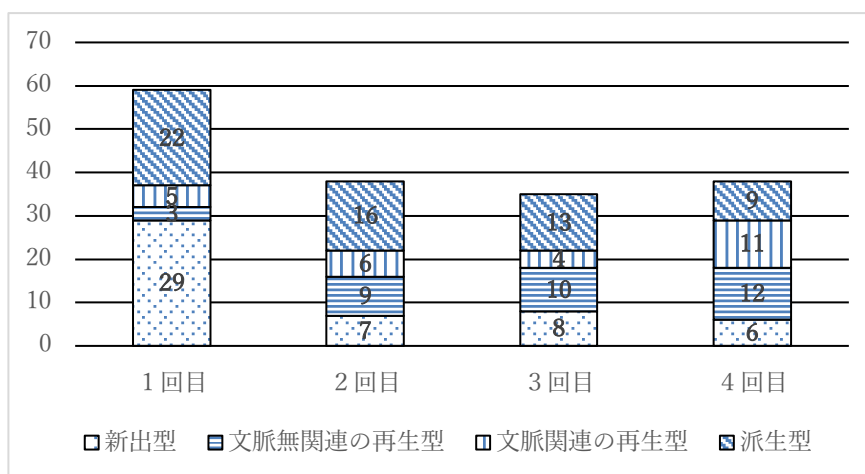


図 4-2 会話回ごとの話題選択の型の各型の使用傾向

この図では、初対面会話では、4 種類の話題選択の型のうち、「A-1 新出型」が最も多く使用されており、29 個である。続いて多く使用されるのは、「B-2 派生型」で、22 個である。一方、「A-2 文脈無関連の再生型」と「B-1 文脈関連の再生型」の使用数は少なく、それぞれ 3 個と 5 個である。

次に、2 回目の会話では、使用数が一番多いのは「B-2 派生型」で、16 個である。2 番目に多いのは「A-2 文脈無関連の再生型」で、9 個である。「A-1 新出型」が初対

面と比べ、大幅に減少しており、7個になる。最も少ないのは「B-1 文脈関連の再生型」で、6個である。

そして、3回目の会話における各型の使用順位は2回目と同じく、多い順に並べると、「B-2 派生型」「A-2 文脈無関連の再生型」「A-1 新出型」「B-1 文脈関連の再生型」である。ただし、「B-2 派生型」の使用数は2回目より少し減少しており、13個である。

最後に、4回目の会話では、最も多く使用されるのは「A-2 文脈無関連の再生型」で、12個である。その次に多いのは「B-1 文脈関連の再生型」で、11個である。このことから、「再生型」は4回目の会話では多く使用されていることが分かる。3番目に多いのは「B-2 派生型」であり、9個である。一番少ないのは「A-1 新出型」で、6個しかない。

以上、会話回ごとの各型の使用傾向をまとめた。次に、初対面会話と2回目以降の会話に分けて、各型の相違を述べる。

2回目以降の会話で最も顕著な変化は、初対面と比べ、「A-1 新出型」の使用数が大幅に減少しており、4種類のばらつきが小さくなることである。また、「再生型」、特に「A-2 文脈無関連の再生型」の使用が多くなる。一方、会話の回数に関係なく、「B-2 派生型」は初対面会話においても2回目以降の会話においても多く使用される。

次節では、話題選択の型と話題内容との関係性を述べる。

#### 4.3.2 話題選択の型と話題の種類をつながり

本節では、会話回ごとに各話題の話題選択の型を以下の表4-1~4-4にまとめる。

( )の数字は話題数を指す。そして、プライバシーにかかわる話題は太字に示している。さらに、各話題において過半数を占める選択の型を網掛けで示している。

表 4-1 初対面会話の話題選択の型と話題内容

話題カテゴリー	A 文脈無関連型		B 文脈関連型	
	A-1 新出型	A-2 文脈無関連 の再生型	B-1 文脈関連 の再生型	B-2 派生型
大学生生活(13)	4	0	1	8
所属(11)	7	0	1	3
状況発話(10)	8	1	1	0
専門(8)	3	1	1	3
進路(8)	3	1	1	3
共通点(3)	1	0	0	2
居住(2)	0	0	0	2
出身(1)	1	0	0	0
好み(1)	1	0	0	0
このほか(2)	1	0	0	1
総数：59	29	3	5	22

まず、表 4-1 に示したように、初対面会話では「所属」「状況発話」「出身」「好み」という 4 つの話題の多くは、「A-1 新出型」により導入される。つまりこれらの話題は初出のもので、直前の話題には関連がなく導入されやすい。一方、「大学生生活」「共通点」「居住」の話題の半数以上は直前の話題に関連する「B-2 派生型」により導入される。

続いて、2 回目会話における話題内容を話題選択の型別に見ていく。

表 4-2 2 回目会話の話題選択の型と話題内容

話題カテゴリー	A 文脈無関連型		B 文脈関連型	
	A-1 新出型	A-2 文脈無関連の再生型	B-1 文脈関連の再生型	B-2 派生型
大学生生活(10)	2	4	1	3
状況発話(7)	2	4	1	0
進路(2)	0	0	1	1
出身(2)	0	0	1	1
中学校・高校生活(2)	0	0	0	2
好み(1)	0	0	1	0
居住(1)	1	0	0	0
外見(1)	1	0	0	0
受験(1)	0	0	0	1
家族(1)	0	0	0	1
金銭(1)	0	0	0	1
宗教(1)	0	0	0	1
そのほか(8)	1	1	1	5
38	7	9	6	16

表 4-2 では「居住」「外見」は「A-1 新出型」の形で取り上げられており、そのうちの「外見」はプライバシーにかかわるものである。また、「状況発話」の半数以上は「A-2 文脈無関連の再生型」により導入される。そして、話題「進路」「出身」「好み」の半数以上は、「B-1 文脈関連の再生型」により導入される。最後に、「B-2 派生型」により導入される話題の種類が豊富であり、「進路」「出身」など当たり障りのない話題のほかに、「家族」「金銭」「宗教」というプライバシーにかかわる話題がある。

続いて、3 回目会話における話題選択の型の内容を紹介する。

表 4-3 3 回目会話の話題選択の型と話題内容

話題カテゴリー	A 文脈無関連型		B 文脈関連型	
	A-1 新出型	A-2 文脈無関連の再生型	B-1 文脈関連の再生型	B-2 派生型
状況発話(10)	3	6	1	0
専門(5)	1	3	1	0
好み(4)	1	0	0	3
大学生活(3)	1	0	0	2
家族(2)	0	1	1	0
進路(1)	0	0	1	0
外見(1)	1	0	0	0
受験(1)	0	0	0	1
金銭(1)	0	0	0	1
恋愛(1)	1	0	0	0
そのほか(6)	0	0	0	6
35	8	10	4	13

表 4-3 に示したように、プライバシーにかかわる「外見」「恋愛」は、「A-1 新出型」により導入される。話題「状況発話」「専門」の多くは、「A-2 文脈無関連の再生型」の形で導入される。また、「進路」は「B-1 文脈関連の再生型」により導入される。そして、「家族」はそれぞれ「A-2 文脈無関連の再生型」と「B-1 文脈関連の再生型」により取り上げられる。最後に、2 回目と同じく、「B-2 派生型」の話題の種類が多くて、「好み」「大学生活」「受験」「金銭」という 4 つがある。

最後に、4 回目会話における話題選択の型の内容を述べる。

表 4-4 4 回目会話の話題選択の型と話題内容

話題カテゴリー	A 文脈無関連型		B 文脈関連型	
	A-1 新出型	A-2 文脈無関連の再生型	B-1 文脈関連の再生型	B-2 派生型
大学生生活(9)	3	1	2	3
状況発話(8)	0	7	1	0
好み(6)	1	3	2	0
専門(3)	0	1	2	0
外見(3)	1	0	1	1
中学校・高校生活(2)	0	0	0	2
恋愛(2)	0	0	2	0
受験(1)	0	0	0	1
家族(1)	0	0	0	1
そのほか(3)	1	0	1	1
38	6	12	11	9

表 4-4 のように、「状況発話」「好み」は「A-2 文脈無関連の再生型」の形で導入される傾向が見られる。また、「専門」と「恋愛」の過半数は「B-1 文脈関連の再生型」により取り上げられる。最後に、「中学校・高校生活」「受験」「家族」は「派生型」により導入される。

以上、会話回ごとの話題選択の型と話題の内容のつながりを分析した。次に、初対面会話と 2 回目以降の会話における話題選択の相違を解明するために、上述の表 4-1~4-4 における網掛けで示される話題を抽出し<sup>24</sup>、直前の話題との関連の有無により、以下の表 4-5 にまとめる。さらに、プライバシーにかかわるものは太字で示している。網掛けの話題はその総数の過半数を占めるものであるから、どのような話題がどのような選択の型により導入されやすいかという傾向が反映されると考えられる。

表 4-5 初対面と 2 回目以降の会話における話題選択の型と話題内容

	初対面会話	2 回目以降会話
A 文脈 無関連型	所属、状況発話、出身、好み	状況発話、専門、好み、居住、 <b>恋愛、外見</b>
B 文脈 関連型	大学生生活、居住、共通点	大学生生活、進路、受験、専門、中学校・高校生活、好み、 <b>家族、金銭、宗教、恋愛</b>

<sup>24</sup> 「このほか」という話題カテゴリーは内容の関連性のない話題項目からなるため、「このほか」を除外する。

まず、初対面会話と2回目以降の会話における話題選択の相違点について分析する。

表4-5では初対面会話で「所属」「状況発話」「出身」「好み」は直前の話題に全く関係のないまま取り上げられやすい。一方、「大学生活」「居住」「共通点」は直接の話題に関連させつつ導入される傾向がある。

2回目以降の会話において、初対面会話と比べ「A 文脈無関連型」と「B 文脈関連型」のいずれにおいても話題の種類が多くなる。まず、「A 文脈無関連型」には、「状況発話」、「専門」、「好み」、「居住」、「恋愛」、「外見」という5種類のものがあり、そのうち「恋愛」「外見」はプライバシーにかかわるものである。次に、「B 文脈関連型」の話題種類は10種類に達しており、「大学生活」「進路」「受験」など当たり障りのない話題のほかに、「家族」「金銭」「宗教」「恋愛」というプライバシーにかかわるものも含まれている。

次に、初対面会話と2回目以降の会話の共通点として、「大学生活」は直前の話題と関連づけて導入される傾向がある。一方、「状況発話」は直前の話題には全く関係のなくとも導入されうる。

次節ではプライバシーにかかわる話題に着目し、直前の話題との関連の有無という観点から、これらの話題がいかに導入されるのかを分析する。

#### 4.3.3 プライバシーにかかわる話題と直前の話題との関連性

すでに述べたように、「外見」を除き、プライバシーにかかわるものの多くは直前の話題に誘発され、導入される傾向がある。また、「恋愛」の話題は、直前の話題への関連の有無に関わらず、導入されうる。聞き手領域に立ち入る恐れがあるプライバシーにかかわる話題が導入される場合、相手に対する配慮表現<sup>25</sup>が必要である。ただし、話題により聞き手領域へ踏み込みの度合いが異なる。そこで用いられる配慮表現にはど

---

<sup>25</sup> 配慮表現の定義は、山岡・牧原・小野（2018:159）を踏襲し、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に習慣化された言語表現」とする。



のような違いがあるのだろうか。この問題を解決するために、「恋愛」と「外見」という2種類的话题を取り上げて分析を行う。「恋愛」という話題が自己に関する情報には最もプライベートなものである（三牧 2016）ため、聞き手領域への踏み込みの度合いは「外見」より高いと捉えられる。

会話例 4-5 では1行目から KI は修論執筆中、専攻の研究室に行かず図書館の研究個室を利用していると話している。7行目で KI は急に話の流れを変え、OA に恋人の有無を尋ねている。話題導入者 KI は緩和表現（山岡 2018）や笑いを伴い、当該話題を導入する（7行目）。山岡（2018）によると、「とか」「たり」といった緩和表現は、聞き手領域への侵害を抑制する機能を持つ対人配慮であるという。また、早川（2000：34）で指摘されるように、聞き手領域に立ち入る際に、「緊張、厚かましさを認識を和らげる、緩和する」ために笑いが用いられる。さらに、「恋愛」という話題は直前の話題に関連がないため、KI は笑いながら「あの関係なく」（17、22行目）とメタ言語を使用している。なぜなら、メタ言語は新話題と直前の話題との「内容的な関連を明示しており、聞き手が話の流れをつかむのに有益な役割を果たしている」（田中 2018:55）からであろう。

話題導入者 KI によるいくつかの配慮表現が用いられているにもかかわらず、OA は「すごい」（10行目）、「彼氏ではなく、恋人ということばが久しぶりに聞いた」（13、14行目）と間接的に応答を拒否し、ようやく16行目から「います」と答えるだけである。さらに、22行目、25行目の KI による具体的説明要求に対して、OA は確認要求をしたり（24行目）、「全然」（26行目）とそれ以上の詳細な応答を拒否している。

例 4-5 プライバシーにかかわる「恋人」という話題が直前の話題に関連なく導入される会話例（3回目会話）

- 1 KI:ちょっとなんか最近研究室に行って[ない hhh
- 2 OA: [あ hhhhh
- 3 KI:研究個室にずっといて,そう辛い
- 4 OA:だね
- 5 KI:全然さ,しょうもない問題なんだけどさ

- 6 OA: うんうん
- ➔7 KI:// あ恋-恋人とかっていたり [す(h)る(h)ん(h)で(h)す(h)か hhhhh
- 8 OA: [hhhhhhhhh
- 9 KI: い(h)や(h)あ(h)の hhhh
- 10 OA: すごい
- 11 KI: いや [hhhh 突(h)然 hhhhh 今の
- 12 OA: [私も知(h)り(h)た(h)い(h)の hhhh
- 13 OA: 彼氏とかじゃなくて, 恋人 [ってこと久(h)し(h)ぶ(h)りだ(h)に聞(h)い(h)
- 14 た(h)な(h)と(h)思(h)っ(h)て(h)
- 15 KI: [い(h)や hhhhhh
- 16 OA: [い(h)ま hhhhhh
- 17 KI: [あの hhh 関係
- 18 (.)
- 19 OA: す
- 20 KI: あほんと
- 21 OA: [はい
- 22 KI: [あのさ関係なく, え同じ(.)境遇の人?
- 23 (.)
- 24 OA: ど(h)う(h)い(h)う(h)こ(h)と(h)聞かれるか [ちょっと境遇
- 25 KI: [いや(h)修士とかやってる?
- 26 OA: あ全然 =

以上の分析から、「恋愛」という話題を直前の話題に関連なく導入する際に、緩和表現（山岡 2018）やメタ言語や笑いなどの言語・非言語表現により、聞き手領域への侵害と話題導入の唐突さを軽減する配慮が用いられていた。一方、同じくプライバシーの話題である「外見」において聞き手領域への侵害を軽減する配慮表現のみが観察された。

会話例 4-6 の直前では、AB は聖書研究会に参加した経験を語り、1 行目で「行って

ない最近」と発話している。OA は「すごい」(2 行目)「超ちゃんと活動してる」(5 行目)と評価し、小さい声で「そっか」(9 行目)であいづちを打っている。OA の評価に対して、AB は笑いのみで反応する。その後 5 秒の沈黙が入る。長い沈黙、評価表現や笑いといった話題転換ストラテジー(大谷 2018)からして、先行話題はそれ以上展開させず、新たな話題の導入が必要される。よって、11 行目で OA は AB の着ている服を見ながら、「それって(大学名)のやつとかではない?」と「外見」という話題を導入している。

前述のように「とか」は対人配慮の緩和表現(山岡 2018)である。また、疑問を表す終助詞「か」を使わない「省略型質問文」は、「相手に対する強制力を弱めることができる」(重光 2020:93)。よって、話題導入発話から聞き手に対する導入者の配慮が読み取れる。

さらに、当該話題を取り上げるきっかけについて、FUI により、話題導入者 OA は相手とのテンポは「多分掴めきれないところあったので、なんか次の話題を言ったほうがいいかなというときは、何となく例えば(AB)さんの服であったりとか、その時まで話していた話題は、ちょっと広げたりとかという意識をしました」と答えている。つまり、沈黙を埋め、会話を続けるために、直前の話題に関連のない「外見」という話題が導入されている。当該話題が導入されたら、AB はすぐ応答する(12 行目)。そして OA は「だよね」(13 行目)と同意を示し、「かわいい」(15 行目)と AB の服について評価をしている。

例 4-6 プライバシーにかかわる「外見」という話題が直前の話題に関連なく導入される会話例(2 回目会話)

- 1 AB:hh うん行ってない最近
- 2 OA:[え:::すごい
- 3 AB:[hhhhh
- 4 (1.0)
- 5 OA: 超ちゃんと活動してる
- 6 AB:hh[hhhhh

7 OA: [hhhh

8 (1.0)

9 OA:°そっか°

10 (5.0)

→11 OA://それって(大学名)のやつとかではない？

((AB が着ている服には I LOVE (大学の英語略称) という字が書かれている))

12 AB:あ (大学名) の

13 OA:だよ

14 AB:hhh

15 OA:そうだよ、かわいい

以上、挙げた「恋愛」(会話例 4-5)「外見」(会話例 4-6) は直前の話題に関連のなく導入されるプライバシーにかかわるものである。しかも、話題導入際にいずれも聞き手領域への踏み込みを緩和する配慮表現が観察された。しかし、2つの話題の相違点として挙げられるのは、話題導入の唐突さを軽減する配慮表現の使用の有無と応答者の反応である。まず、「恋愛」という話題が導入された際に、「関係ない」といったメタ言語により当該話題が直前の話題に関連のないということは予告される。一方、「外見」という話題が、長い沈黙が続いたところ話題転換を示す言語表現を用いらず導入される。次に、回答者の反応について、「恋愛」という話題における「恋人の有無」という質問に対して、回答者による応答拒否が観察された。一方、「外見」という話題では回答者は躊躇することなく答えていた。

#### 4.4 考察

まず、会話の回数ごとの4種類の話題選択の型の使用傾向について考察する。初対面会話で「A-1 新出型」が最も多く使用されるのは、参加者の間で共通する情報が少なく、情報交換が優先されているからである。次に多く用いられるのは「B-2 派生型」である。「B-2 派生型」を多用する一因は、日本語会話では話題間のつながりが重視される(趙 2014) ことにあるだろう。そして、文脈の関連の有無に関わらず

「再生型」の使用数は低く、同一会話では同一話題が何度も導入されることが少ないことが分かる。それも初対面会話の特性に関係があり、初対面会話では相手の情報をできるだけ手に入れることを目的としているためである。

一方、2回目以降の会話では、「A-1 新出型」は減少していく。「A-1 新出型」の使用が減少した理由は情報量にかかわる。初対面会話を通して、参加者の間で基本情報がすでに共有されているため、情報収集を目的にする動機づけが低くなるはずである。それに対して、「再生型」、特に「A-2 文脈無関連の再生型」の使用が増加する。縦断的会話を対象にした谷（2016）では、初対面会話において参加者が共感的に会話を展開させようと考えた場合、当該話題がそのあとの会話で繰り返される傾向にあるという。そのため、会話の回数の増加とともに、参加者の共感を生む話題も多くなり、「再生型」もよく選択されるようになる。また、「B-2 派生型」は2回目以降の会話でも多く使用される。それは、「B-2 派生型」が会話の内容面の一貫性を保つため、新たな話題が導入されやすいからだろう。

次に、話題選択の型の内容について考察する。まず、初対面と比べ2回目以降の会話では、4種類の話題選択の型の内容は多様性を示し、特に「B-2 派生型」の話題の種類が豊富となり、大学生にとって身近な生活に関するものや、プライバシーにかかわるものが選択される（表 4-2~4-4 参照）。このことから、2回目以降の会話では話題選択が参加者の個性や文脈に影響されやすく、話題選択の随意性が高くなることが分かる。また、2回目以降の会話では、初対面会話において危険な話題と捉えられるプライバシーにかかわる話題が観察された。「外見」「恋愛」を除いたプライバシーにかかわる話題の多くが直前の話題と関連のある「B-2 派生型」で導入される。プライバシーにかかわる話題は、聞き手領域に踏み込む可能性が高いため、唐突に導入すると、相手に拒否される可能性が高い。そこで、直前の内容や発話を取り上げて導入すると、話題の不成功のリスクを軽減することができる。

また、初対面会話においても2回目以降の会話においても「状況発話」が直前の話題に関連なく取り上げられている（表 4-5 参照）。それは「状況発話」には「会話実験」「お菓子」「天気」などの会話現場に関するものがある。目の前にあるものや起こった事柄は「会話参加者に認識可能」であり、「潜在的なコンテキスト」として、い

つでも「話題として取り上げてよいという前提が共有されている」（筒井 2012:278）ため、直前の話題に関係のないで導入され得ると考えられる。一方、「大学生活」は会話の回数に関係なく、直前の話題をきっかけに導入される傾向がある（表 4-5 参照）。その一因は「大学生活」という話題の範囲が広くて、大学生の日常生活的出来事は全て当該話題カテゴリーに入れるからである。幅広い範囲から無難な話題を選択するのは容易ではないだろう。よって、直前の話題との関連で導入されやすいと考えられる。

最後に、プライバシーにかかわる話題と直前の話題との関連性について考察する。すでに述べたように、プライバシーにかかわる話題が導入される場合、聞き手領域を侵害する可能性が高い。したがって、円滑な対人関係を維持するため、緩和表現や笑いをを用いて聞き手に対する配慮が必要である。一方、「恋愛」という話題と異なり、「外見」という話題が、唐突な話題導入に対する配慮表現が用いられないのは、当該話題の性質に関係があるからである。「外見」という話題のカテゴリーには、「服装」「髪型」などの話題項目がある。これらの話題は「状況発話」と同じく、会話現場に関するもののため、「潜在的なコンテキスト」（筒井 2012:278）が存在し、直前の話題に関連なく、取り上げられ得る。特に聞き手の所有物に関する話題「服装」（会話例 4-6）は、聞き手領域の周辺部に位置づけられており（鈴木 1997）、聞き手領域への踏み込み度合いは「恋愛」より低いため、直前の話題に関連なく導入され場合、聞き手に受け入れやすいだろう。

#### 4.5 まとめ

本章では、まず、直前の話題との関連の有無に着目し、話題選択の型を「A-1 新出型」、「A-2 文脈無関連の再生型」、「B-1 文脈関連の再生型」、「B-2 派生型」に分類し、会話回ごとに各型の使用傾向を明らかにした。初対面会話では相手に関する情報が限られるため、情報交換を目的とする「A-1 新出型」がよく選択される。そして、2回目以降の会話では、「再生型」、特に「B-1 文脈無関連の再生型」が頻繁に使用される。また、会話のつながりを重視する「B-2 派生型」はどの回でも多く使用される。

次に、各型の話題の種類を分析し、話題選択の型と話題の内容とのつながりを解明

した。まず、初対面会話と比べ2回目以降の会話では、話題選択の内容の多様性が見られた。さらに、「外見」以外のプライバシーにかかわる話題は「B-2 派生型」により選択されやすい。次に、会話の回数に関係なく、「状況発話」は直前の話題には全く関連なくとも自由に導入され得る。一方、「大学生活」は直前の話題との関連で導入される傾向がある。

最後に、会話例を挙げながらプライバシーにかかわる話題がいかに関前の話題に関連なく導入されるか分析した。「恋愛」と「外見」においていずれも聞き手領域への踏み込みを軽減する配慮が用いられている。一方、「外見」と異なり、「恋愛」が話題転換の唐突さを軽減する配慮表現の使用は観察された。

第3章と本章は話題選択について論じたものである。次に述べる第5章、第6章、第7章で筒井(2012)を踏まえ、話題導入発話の性質によって、それを「質問文」「平叙文」「独話的発話」に分類した上で、話題がいかに関前導入されるか分析する。話題導入発話に着目し、分類を行った一因は、話題導入発話が実質的な内容を持つ話題開始の第1発話であり、「その発話がどのような発話であるかによって、次のターンで可能な発話を制約する」(筒井 2012:55)からである。

次章で質問文による話題導入を分析する。

## 第 5 章

### 質問文による話題導入



## 第5章 質問文による話題導入

本章以降では、話題導入において、「どのように」話すのかに関して記述する。本章では研究課題(3)に対して、質問文による話題導入がどのような場合、どのようにして行われるのか分析する。

まず 5.1 節では、質問文による話題導入に関する研究を概観し、本研究の位置付けを述べる。続く 5.2 節では分析方法を紹介し、5.3 節では分析結果を記す。最後に 5.4 節では考察を行う。

### 5.1 質問文による話題導入に関する研究と本研究の位置付け

質問文による話題導入に関する研究のうち、代表的なものとして、宇佐美・嶺田(1995)、中井(2003b)などが挙げられる。これらの研究は、いずれも初対面会話を対象に、質問文ではじまる話題の内容にも言及している。

宇佐美・嶺田(1995)は、日本語母語話者同士による初対面会話の話題導入は質問が大半を占めており、その内容は相手の職業や生活環境など当たり障りのない情報を求めるものであると指摘している。ただし、宇佐美・嶺田(1995)は初対面会話の最初の数分間を対象にしており、会話全体における話題導入の傾向は明らかになっていない。

また、中井(2003b)は15分間の初対面会話の中で、質問を用いた話題導入に焦点を当て、母語場面と接触場面における質問表現による話題導入の相違を分析している。その結果、日本語母語話者同士の会話では「居住」「出身」「大学生活」などの話題が質問表現によって開始される傾向があると指摘している。

以上の研究は、話題導入発話に着目して、質問文による話題導入の頻度や話題内容を論じているが、質問文をめぐる参加者の相互行為には言及がない。一方、増田(2006)は、質問文の二面性に着目して話題がいかに関与されるか分析している。増田(2006)では、質問には相手に強力に働きかける行為であると同時に相手の応答があって初めて成立するという二面性があると述べ、話題導入をうまく遂行するためには、質問による相手への働きかけを軽減する配慮が必要であるという。

以上、概観した話題導入に関する研究では、初対面会話では質問文による話題導入が多用されていること、その内容は「出身」「居住」「大学生活」など大学生の属性にかかわるものであることが分かっている。さらに、話題導入にあたっては相手への配慮が必要であることが示唆された。しかし、上述の研究の多くは、初対面会話を対象にしたものであり、2回目以降の会話における話題導入の実態は明らかになっていない。そこで、本研究は初対面から4回目までの会話をもとに、質問文による話題導入がどのような場合、どのようにして行われるか明らかにする。

## 5.2 分析方法

本節では、本研究の分析方法を紹介する。まず、5.2.1節では質問文の定義と認定基準を示す。次に、5.2.2節では分析の観点を述べる。

### 5.2.1 質問文の定義と認定基準

本研究では、日本語記述文法研究会（2003:21）を参考に、質問文は「不明なことについて相手に問いかける文」と定義する。また、質問文の認定にあたっては、質問文の範囲と形式という2つ面から論じる。

まず、質問文の範囲は南（1985）に則り、以下の3つの条件を満たすものとする。

- ①相手がいることを前提とした言語表現であること。（中略）質問文は相手の存在を必要とする。
- ②その相手に対して、何らかの問題を提示し、それについての情報の供給を要求する言語表現であること。
- ③その要求に応じた、相手からの情報の供給に関する何らかの表現が考えられるものであること。つまり、質問の表現と応答の表現のセットを考えることが可能なものであること。（後略）

南（1985:39、一部省略）

次に、質問文の形式について、中井（2003b:40）に倣い、以下の8つの形式に1つ

でも当てはまるものは質問文とする。なお、自然会話の質問文では終助詞「の」や「よね」との共起が頻繁に見られるため、「1.」に「～の?」「～のか?」、「2.」に「よね?」を追加した。

1. 「～か?」「～の?」「～のか?」(発話+終助詞「か」「の」「かな」+上昇イントネーション)

例) エミリーさんは3年生ですか?

2. 「～ね?」「よね?」「～な?」(発話+終助詞「ね」「よね」「な」+上昇イントネーション)

例) 日本で生まれましたね?

3. 「～かしら」「～かな(あ)」(発話+終助詞「かしら」「～かな(あ)」+下降イントネーション)

例) 行くかしら。

4. 「～でしょう/だろう?」(発話+「～でしょう」+上昇イントネーション)

例) 時々こう聞きたくなるでしょう?

5. 疑問詞+「～でしょう/だろう」+下降イントネーション

例) これ何だろう。

6. 文中に疑問詞を用いる

例) ここにはいつまでいるの?

7. 文末上昇イントネーション

例) 英語の先生っていうのは、じゃあ、あの一、中学校?

8. 言い差しの文で、文末が平坦なイントネーション

例) じゃ、今は一、有給で一、

(中井 2003b:40、一部修正)

次に、会話例を挙げながら、質問文認定基準を説明する。

会話例 5-1 は、KI と OA による初対面会話の断片である。1 行目で KI は「え今日はなんか授業とかあったの?」(質問文は太字で記す) と授業の有無について OA に情報

提供を要求している。KI の情報要求に対して、OA は「授業はもうとってはいいんだけど::」と答える。1 行目の発話は、南 (1985) の質問範囲の 3 つの条件に当てはまる。さらに、1 行目の発話には、終助詞「の」+上昇イントネーションが現れるため、中井 (2003b) の形式的要素も当てはまる。よって、1 行目の「え今日はなんか授業とかあったの?」は質問文と認定できる。

#### 例 5-1 質問の範囲と形式的要素を同時に満たす例

- 1 KI:え今日はなんか授業とかあったの?
- 2 OA:授業はもうとっては[ないんだけど::

次に、上述の範囲の条件と形式的要素の一方が満たさず、質問文として認定できない例を挙げる。

下記の例 5-2 は AB と OA による 3 回目の会話の断片である。会話の直前では、2 人は引っ越しについて話していた。1 行目で AB は「いや私引っ越すことになったら、どうしよう」と発話するが、これは博士後期課程の入学試験に不合格であった場合には引っ越さなければならないことへの心配を述べるものである。この発話は「どう」という疑問詞を用いていることから、中井 (2003b) の「6. 文中に疑問詞を用いる」という形式的要素に当てはまる。しかし、2 行目以降の会話参加者のやりとりから分かるように、1 行目の発話は OA に対して情報を要求する意味が希薄しており、単なる AB の疑念を表すものである。なぜならば、OA が笑いのみで反応しており、情報提供をしていないからである。すなわち、南 (1985) の範囲条件に該当しないため質問文ではないと認定される<sup>26</sup>。

#### 例 5-2 質問文の形式的条件に当てはまるが、範囲条件を満たさない例

- 1 AB:いや私引っ越すことになったら、どうしよう
- 2 OA:hh[hhhh

---

<sup>26</sup> 会話例 5-2 の 1 行目の発話は、独話的発話である。独話的発話については第 7 章で記す。

- 3 AB: [hhhh
- 4 AB:面倒臭いな
- 5 OA:[う:ん:
- 6 AB:[引っ越しは

このように、質問文の形式的要素が出現しても、相手に問いかける条件を満たさないと、質問文として捉えられない。そこで、本研究では質問文を認定する際に、原則として南（1985）の範囲条件を踏まえることとする。

### 5.2.2 分析の観点

本研究は、以下のような3つの観点から質問文による話題導入のあり方を解明する。まず、会話回ごとに質問文による話題導入数と話題導入における質問文の割合を調べ、会話回数を追うごとにどのように質問文の割合が変化するか示す。次に、質問文によって導入される話題の種類を整理し、どのような話題であれば質問が用いられるか分析する。また、質問文によって導入される話題内容が、初対面会話と2回目以降の会話においてどのように異なるか相違を示す。最後に、質問による話題導入がどのように行われるのかを分析し、初対面と2回目以降の会話における話題導入ストラテジーの相違を示す。

## 5.3 分析結果

本節では、5.3.1 節で質問文による話題導入数と計量し、5.3.2 節で話題内容に着目して質問文によって導入される話題内容を分析する。そして、5.3.3 節で、質問文による話題導入がどのように行われるかを分析し、導入ストラテジーを記す。

### 5.3.1 会話回ごとの質問文による話題導入数とその割合

会話回ごとの話題数、質問文による話題導入数、質問文による話題導入の割合を表5-1にまとめる。

表 5-1 会話回ごとの質問文による話題導入数とその割合

	全話題数	質問文による 話題導入	話題導入に占める 質問文の割合
初対面	59	43	73%
2回目	38	18	47%
3回目	35	8	23%
4回目	38	15	39%

この表から分かる通り、初対面と比べ、2回目では話題導入頻度が下がるが、2回目から4回目までの話題導入頻度は微増減している。また、質問文による話題導入数について、基本的に回数の増加とともに下がる。2回目から4回目までの質問文の割合は増減しているものの、初対面会話における質問文の割合が最も高いことが確認できた。

### 5.3.2 質問文による導入話題の種類

筒井（2012）は話題内容により話題導入の仕方が異なると述べる。また、第3章では初対面と2回目以降の会話における話題内容には大きな相違があることが明らかになった。そこで、本節では、両者の関係を解明するために、初対面会話と2回目以降の会話に分けて話題の種類を記す。なお、質問文によって導入される話題の種類は多岐にわたるが、本研究では話題内容と導入形式の関係に着目するから、話題の種類については上位概念である話題カテゴリーを提示することとし、会話例を挙げる際に、具体的な話題項目を取り上げる。下記の表 5-2 では、2回目以降の会話では初めて導入される話題は下線を付し、プライバシーにかかわるもの<sup>27</sup>は太字にする。

<sup>27</sup> プライバシーにかかわる話題は第3章を参照のこと。

表 5-2 初対面と 2 回目以降の会話における質問文の話題の種類

初対面会話	状況発話、大学生活、好み、専門、出身、居住、所属、進路、共通点
2 回目以降 の会話	状況発話、大学生活、好み、専門、出身、居住、 <u>中学校・高校生活、 外見、金銭、恋愛</u>

初対面会話で、質問文によって導入される話題は「状況発話」「大学生活」「好み」「専門」などの 9 種類であることが分かる。一方、2 回目以降の会話で導入される話題は 10 種類であった。その中には、初対面で取り上げられる「状況発話」「大学生活」など話題のほかに、プライベートにかかわる「外見」「金銭」「恋愛」の話題が観察された。

### 5.3.2.1 初対面会話における質問文による話題導入

初対面会話において参加者には背景知識が共有されておらず、相手がどういう人なのか分からない。そのため、質問文によって話題を導入し、相手の情報を引き出すと考えられる。

下記の会話例 5-3 の直前では、KR が所属する学科に関する情報を提供していた。1 行目で KR は「えっどこの(.)あれですか」と SR の所属を尋ねる。この KR の情報要求に応じて、SR は 2 行目で「私心理なんですけど」と答える。その後、相互に所属する学科に関する情報交換がなされてから、9 行目で SR は「サークルとかは何？」と質問文によって、「サークル」という新話題を導入している。10 行目から KR はサークルには入っていないことが分かり、その後 17 行目で SR は「バイトは何をやった？」と質問文の形で「バイト」という新たな話題を導入している。

例 5-3 「学科」→「サークル」→「バイト」という話題が次から次へ質問文により導入される会話例（初対面会話）

- 1 KR:[えっどこの(.)あれ[ですか
- 2 SR: [私心理なんですけど

- 3 KR:あ:[:
- 4 SR: [はい
- 5 KR:°なるほどなるほど°
- 6 SR:はい hhhhhh
- 7 KR:全然それ知り合い[とかいないもので
- 8 SR: [hhhhhhh
- ➡ 9 SR://サークルとかは何？
- 10 KR:サークル何も入ってない[ですよ
- 11 SR: [入ってないんですか
- 12 SR:じゃもうひたすら↑
- 13 KR:ひたすらいやずっと遊んで
- 14 SR:いやいや
- 15 KR:ずっとバイトして hh[hhh
- 16 SR: [hhh
- ➡ 17 SR://バイトは何をやった？
- 18 KR:バイトはええと iias[行くまでの

このように、初対面会話では相手の情報を得るために、大学生同士に共通する話題が質問文により次々に導入されている。次節では、2回目以降の会話ではどのような場合に質問文を用いて話題が導入されるか分析する。

### 5.3.2.2 2回目以降の会話における質問文による話題導入

前節では、背景知識が少ない初対面会話の参加者が頻繁に質問文を用いて話題を導入することが明らかとなった。自己紹介のやりとりを含んだ初対面会話を通して、相手に関する基本的な情報が共有された2回目以降の会話でも、質問文により話題導入が行われることがある。表 5-2 からは、初対面会話で選択された話題、例えば「大学生活」「好み」などの話題は2回目以降の会話でも扱われていることが分かる。以下では、具体的な会話例を挙げながら、これらの話題がどのような場合、質問文により導



入されるのかを分析する。また、初対面会話の例を挙げて、相違点を記す。

会話例 5-4 と 5-5 はいずれも「趣味」という話題が質問文によって導入される断片である。会話例 5-4 の直前では「専門」という話題が取り上げられていた。ここでは評価表現（1、4 行目）、沈黙（3 秒目）、あいづち（2、5 行目）などの話題転換ストラテジー（大谷 2018）により、当該話題がそれ以上展開されないことが示唆される。そのため、6 行目で HS は質問文により「えなんか(.)趣味とかある」(1 行目)と問いかけ、直前の話題には全く関係のない「趣味」の話題を導入している。HS の質問に応じて、7 行目から OK は趣味に関する情報提供をはじめめる。OK が情報提供をしている間、HS は「ええ」「うんうん」「あ:::」とあいづちを打ったり、「録画見るのがじゃなくて」(10 行目)と確認要求をしたりすることで相手の発話を継続させる。そして、20 行目で「面白い」と評価をしてから、「なんか(.)サークルとかじゃ何も入ってない?」と「サークル」という新話題を導入している。

例 5-4 会話が途切れそうな箇所に、急に質問文により話題転換が行われる会話例（初対面会話）

- 1 HS:難しいよね
- 2 OK:う::ん::
- 3 (1.0)
- 4 HS:あ暗い話な[hhhhh もっと[ ( )
- 5 OK: [hhhhhh [h は(h)い h
- ➡ 6 HS:// えなんか(.)趣味とかある？
- 7 OK:趣味(.)んなんだろう(.)あのう録画:をするのが好き,なんか好きな番組を
- 8 HS:ええ
- 9 OK:番組表をみつけて録 h 画 h す h る h のが好き
- 10 HS:お::[hhhh 録画見るのがじゃなくて
- 11 OK: [hhh
- 12 OK:あ見るのが好きなんだけど
- 13 HS:あうんうん

- 14 OK:まあ探してて何この隙間番組みたいな  
 15 HS:あ::hhh  
 16 OK:が好き  
 17 HS:なるほどね  
 18 OK:( )  
 19 (.)  
 → 20 HS:面白い, // なんか(.)サークルとかじゃ何も入ってない?  
 21 OK:あサークルは 11 月で引退したんだ[けど

「趣味」という話題は、2回目の会話でも再び取り扱われる。会話例 5-5 に2回目の会話の断片を記す。この直前では「ベイク」というお菓子についてやりとりがみられた。1行目から OK は、好きな芸能人が「ベイク」の CM に出演したことを覚えていると述べている。それと同時に笑った後(11、12行目)、HS は「趣味」という話題を取り上げ、「なんか趣味あるの、放送以外の」と OK に尋ねている(13行目)。

例 5-5 会話の流れに沿って、自然に質問により話題転換が行われる会話例(2回目会話)

- 1 OK:確かね,ベイク ((お菓子の銘柄)) の CM 大野くん ((芸能人)) がやってた時  
 2 があったね,嵐((アイドルグループ))の  
 3 HS:え::  
 4 OK:で大野くん好きだから  
 5 HS:あそうなんだ  
 6 OK:hhh 嵐の中でって感じで  
 7 HS:うん  
 8 OK:その追っかけはしてないんだけど  
 9 HS:うんうんうんうん  
 10 OK:だからベイク大野くんだってそこ覚えてた  
 11 HS:hhh[hhhhhh

- 12 OK: [hhhhhhh
- ➡13 HS://なんか趣味あるの,放送以外の
- 14 OK:う:ん::(.)なんだろう,でもテレビが好きかも
- 15 HS:うん:
- 16 OK:hhhh かな,録画するの,なんか面白い番組ないかなって見つけて
- 17 HS:あ
- 18 OK:録画して,後最近そこまで盛り上がってないんだけど
- 19 HS:うん
- 20 OK:玉木宏 ((芸能人)) が好きだったかな[一年前ぐらい hhh
- 21 HS: [あああ,分かる,なんか『のだめ』((ドラマの名前)) [とか結構見てた
- 23 OK: [うん
- 24 OK:うん[うん
- 25 HS: [暇つぶしに
- 26 OK:それで去年の秋に盛り上がっちゃって自分が

初対面会話で取り上げられた「趣味」は、2回目の会話で HS によって再び導入されるのは、直前の話題に影響されるからだろう。直前の話題において OK が好きな芸能人に言及していたため、会話の流れに沿って、HS は「趣味」という新話題を取り上げていた。さらに、初対面会話によって既に OK の趣味である「放送」に関する情報が部分的に共有されているため、HS は「なんか趣味があるの」に「放送以外の」を付け加える。これに対して OK は初対面会話で言及していた「録画が好き」を2回目の会話で再び取り上げ、20行目から好きな芸能人を語り始める。OK が発話している途中、HS は「あああ、分かる」(21行目前半)と割り込んでその芸能人の出演したドラマをよく見ていたと発話して、当該話題に積極的に参与している(21、22、25行目)。

上に挙げた会話例 5-4 と会話例 5-5 において、質問文によって導入された同一話題は、出現箇所、直前の話題との関連性、話題の持続時間について異なっている。初対面会話では、会話が途切れそうな箇所で、直前の話題には全く相関のない新規話題と

して取り上げられる。また、質問に応じた情報提供が終わったら、当該話題が終結に向かい、新たな話題が導入される（例 5-4）。一方、2回目以降の会話では話題境界（Schegloff & Sacks 1973）が明確に現れない箇所で、直前の話題に誘発され、同一話題が繰り返される。さらに、初対面と比べ、話し手がより多くの情報を提供することで、1つの話題のやりとりが長く続く。

次に2回目以降の会話において、どのような場合、質問文によって初出の話題が導入されるか分析する。表 5-2 から分かるように、「中学校・高校生活」「金銭」「外見」「恋愛」という4種類の話題は、2回目以降の会話で初めて取り上げられていた。この中でも、「中学校・高校生活」「金銭」は、直前の話題に関連づけながら、導入されるのに対して、「外見」「恋愛」は直前の話題には関連づけられずに取り上げられる<sup>28</sup>。

下記の会話例 5-6 は KI と OA による2回目の会話の断片である。1行目から7行目まで「受験」という話題について KI は笑いながら推薦試験を受けられない思い出を語っている。「懐かしい」という評価表現（9行目）、沈黙（10行目）により話題境界（Schegloff & Sacks 1973）が形成されていると言える。そこで11行目で OA が先行発話にある「部活」を取り上げ、KI に質問して「中学校・高校生活」に関する話題を導入している。KI は相手の質問に対して簡潔に応答し（12行目）、さらに同じ質問を聞き返す（15行目）ことで当該話題が確立される。

例 5-6 会話が途切れそうな箇所で直前の話題との関連を断ち切らず、導入される会話例（2回目会話）

- 1 KI: で推薦受けたいんですって言ったら
- 2 OA: うん＝
- 3 KI: =成績が悪過ぎて hh ちょっとだめだねって言(h)わ(h)れ(h)て＝
- 4 OA: =えそう
- 5 KI: わかりましたみ(h)た(h)い(h)な
- 6 OA: hhhhh
- 7 KI: 思(h)い(h)出(h)が(h)あ(h)る h

<sup>28</sup> 「外見」「恋愛」への分析は4章でなされているため、ここで省略させていただく。

- 8 OA:hhhhhh
- 9 KI:懐かしい,部活しかやってなかったから,成績がめっちゃ悪くて°うん°
- 10 (1.0)
- ➡11 OA://部活は何やってたんだっけ
- 12 KI:吹奏楽
- 13 OA:うん
- 14 (2.0)
- 15 KI:何やってた?((お菓子をたべながら))
- 16 OA:部活でも高校の時は部活って部活全然やってなくて
- 17 KI:あそうなの
- 18 OA:なんか食物研究部っていうなの,調理クラブみたいな=
- 19 KI:=あ楽しそう

以上、どのような場合に質問文による話題導入がみられるか分析した。まず、初対面会話では、相手の情報をより多く引き出すために、大学生同士に共通する話題が次から次へと質問文により導入されていた(例 5-3)。次に、初対面会話と2回目以降の会話のどちらにも取り上げられた話題について、初対面会話では会話が途切れそうな箇所で直前の話の流れを断ち切り、全く新しいものとして導入されていた(例 5-4)。一方、2回目以降の会話では、直前の文脈に誘発され、直前の話題と関連づけられながら導入されていた(例 5-5)。最後に、2回目以降の会話における初出の話題は、初対面会話と同じく話題境界において取り上げられていた。一方、初対面会話とは異なり、直前の発話を取り上げて導入されていた(例 5-6)。上記より、既に話題として取り上げられているか否かにかかわらず、2回目以降の会話では新話題が直前の文脈から影響を受けやすいと言える<sup>29</sup>。

次節では質問文による話題導入がどのように行われるのかという導入ストラテジーを検討する。

---

<sup>29</sup> ただし、会話現場に関する話題は直前の話題に関連なく取り上げられる傾向がある。詳しくは第4章を参照のこと。

### 5.3.3 質問文による話題導入のストラテジー

本節では質問文による話題導入のストラテジーについて論じる。繰り返しになるが、話題導入は会話参加者の合意により達成される。特に質問文による話題導入は、相手に強く働きかける行為である。そのため、相手が自分の領域に踏み込まれたくない場合、導入された候補話題を拒否する可能性がある。よって、話題導入を遂行するためには、相手に配慮する何らかのストラテジーを用いる必要がある。この点について、三牧（2013）と大谷（2019）も同様の指摘をしている。三牧（2013）は、導入された質問文への回答を相手が拒否<sup>30</sup>した場合、話題導入者が質問を繰り返すと、回答してくれることが多いとしている。また、大谷（2019）も、より質問を具体化したりすることで話題化を促進することができる」と述べている。しかし、質問文による話題導入は聞き手領域に踏み込み、強く働きかける行為であるため、相手が自分の領域に踏み込まれたくない場合、さらに質問文を出すと、相手との関係を壊す可能性がある。以下では三牧（2013）及び大谷（2019）が指摘したものとは異なる話題導入のストラテジーを分析する。

#### 5.3.3.1 初対面会話における話題選択の正当性を示すストラテジー

表 5-2 で示したように、初対面会話では、「大学生活」「所属」「出身」などの基本的な情報に関する話題がよく質問文の形で導入されている。会話例 5-7 における話題「留学」は「大学生活」という話題カテゴリーの下位項目である。「留学経験の有無」という質問に対して、相手はすぐ回答せず、否定的な反応を示している。その後、再び話題導入者が話題導入の理由を付け加えると、相手は回答を始め、話題が確立される。

会話例 5-7 の直前では、OA と AB は進路について情報交換を行っていた。1 行目では OA は「本当に働-働ける気は(.)ちょっとまだしてない hhhh 自分が」と話している。OA の話に対して、AB は笑いのみで反応する（2 行目）。短い間の後、OA は「全く」と付け加える。そして 2 秒の沈黙が起こる。AB の笑い（2 行目）と沈黙（5 行目）

---

<sup>30</sup> この質問に対する拒否は、三牧（2013:220）の指摘するように「言語上拒絶ではなく、間接的な形態」を取るものである。例えば最小の応答、曖昧な応答などである。

により、当該話題がそれ以上続かず、新たな話題の導入が必要となる。それで6行目でOAは「なんか留学経験とか(.)ある？」と尋ねて、新話題を導入し、続けて笑いながら「勝手にありそうっていや思(h)って(h)る(h)だ(h)けh」(6、7行目)と発話している。

例5-7 話題導入理由を付加することで話題選択の正当性を示す会話例(初対面会話)

- 1 OA:本当に働-働ける気は(.)ちょっとまだしてない[hhhh 自分が
- 2 AB: [hhhhhh
- 3 (.)
- 4 OA:全く
- 5 (2.0)
- ➡ 6 OA://なんか留学経験とか(.)ある？勝手にありそうっていや思(h)って(h)
- 7 る(h)だ(h)けh
- 8 AB:いやなんかよくなんか私日本語が変だからいろんな人に言われた
- 9 OA:hhhh
- 10 (1.0)
- 11 AB:なんか日本人には日本語喋るとなんかどこからの国の人[ですか
- 12 OA: [hhhhhh
- 13 hhhh
- 14 OA:なんか専攻聞いてもうすごいなんかこうグロ-グローバルいろんな(.)
- 15 なんか国の人とか国に行ったり交流してるかなとかって勝手に思っ
- 16 て[しまった
- 17 AB: [うんうんうん
- 18 (1.0)
- 19 AB:高校の時に1年アメリカ[ ( ) 大学で1年アメリカ
- 20 OA: [う:ん
- 21 OA:う:ん
- 22 (1.0)

23 AB:だけ[です

24 OA: [格好いい

25 AB:uhh

これに対して、AB は留学経験の有無という質問に対する回答はしておらず、自分の日本語が変だからよく外国人に間違われると発話している (8、11 行目)。そして、OA は「留学」という新話題の導入理由を説明している (14~16 行目)。AB は「うんうん」(17 行目) と理解を示し、1 秒沈黙の後、留学経験を語っている (19、23 行目)。

ここで注意してもらいたいのは、14 行目から 16 行目までの OA による理由説明である。これまでの先行研究では日本人は理由説明を好まないと言われている。例えば、趙 (2012) では、謝罪する際に理由を述べると言い訳に聞こえやすいと述べられている。しかし、なぜ OA が相手に対して留学経験の有無という質問を繰り返さず、話題導入の理由を付加するだろうか。ここでは増田 (2006) の説を援用し、説明する。増田 (2006) では、会話の中で既に言及したことを質問文の形で取り上げることが質問の正当性を補強するストラテジーと呼んでいる。そしてそれを用いると質問の適切性が疑われないのは、「既に話された事柄は、会話の参加者が当然アクセスできる事柄であるから」という (増田 2006:60)。会話例 5-7 では、OA の話題導入理由説明からわかるように、新話題「留学」は、既知した内容<sup>31</sup>により誘発されたものである。そのため、相手に話題選択の正当性を示すため、話題導入後に理由説明が付加されていた。

次節では、2 回目以降の会話における話題導入のストラテジーを述べる。

### 5.3.3.2 2 回目以降の会話における相手の反応に同調を示すストラテジー

導入された候補話題への相手の否定的反応に対して、2 回目以降の会話では異なるストラテジーが用いられている。次に会話例を挙げながら、分析する。

会話例 5-8 の KI と OA は、どちらも修士 2 年生で、会話収録をしていた期間に修士論文を執筆していた。初対面会話で 2 人が自己紹介をした後、「研究テーマ・卒論/修

---

<sup>31</sup> AB は「国際地域」という専攻に所属していると初対面会話の冒頭で OA に伝えていた。



論」という話題をめぐってお互いに研究テーマなどの情報を提供し合った。会話例 5-8 は 3 回目の会話であり、「研究テーマ・卒論／修論」の話題が繰り返し導入されていた。この断片の直前、KI と OA は飲み物について話していた。1 行目で OA が「体に良さそうだね( )」と目の前の飲み物について発話している。その後、2 行目から 5 行目にかけて、「体に良さそうな飲み物」という共通認識を述べ合い、6 行目で 3 秒の沈黙が起こる。この沈黙の後、7 行目で KI は「もう修論は大体あーでもできてる頃だよね,そろそろ,一通り」と OA の修士論文の進捗状況を確認することで「研究テーマ・卒論／修論」という話題を導入している。

例 5-8 相手の否定的反応に共感を示す会話例 (3 回目会話)

- 1 OA:体に良さそうだね[( )]
- 2 KI: [( )]
- 3 OA:[hhhhhhhh
- 4 KI:[ね
- 5 KI:え::
- 6 (3.0) ((KI がジュースを飲んでいるところ))
- ➡7 KI://もう修論は大体あーでもできてる頃だよね,そろそろ,一通り
- 8 (1.0)
- 9 OA:う:ん:hh[hhhhhhhh
- 10 KI: [hhhhhhhh
- 11 KI:う:ん:hhhh
- 12 OA:う:ん:
- 13 KI:う:ん:hhh
- 14 OA:まあ察してくれって感(h)じ[hhhhhhhhhh
- 15 KI: [hhhhhh オッケーhhhh 大丈夫,私いるから[hhh
- 16 hhhh 本(h)当(h)ね(h),こ(h)れ(h)っ(h)て hhhhhhhhhhh
- 17 OA: [hhh
- 18 hhhhhh

- 19 KI:h あでも本当に辛い hhhh[や(h)ば(h)い(h)ね hhhhhhhhh
- 20 OA: [( ) hhhhh
- 21 OA:えなんか延ばすってなったらさ
- 22 KI:うん
- 23 OA:それってなんか手続きはまあ要るだろうけど,でもそんな[あるのか

質問に対する OA の沈黙（8 行目）と躊躇いを表す「う:ん:」（9 行目）は、非優先的な応答（Pomerantz 1984）と捉えられることから、修士論文の進捗に関する話題は、OA が積極的に受け入れていないことが読み取れる。ここで注目したいのは、話題を導入しようとした KI が OA の否定的反応に対して、「う:ん:」と笑いながら相手の話を繰り返している点である（11、13 行目）。笑いや繰り返しなどの話題終了を示唆する転換ストラテジー（大谷 2018）が現れているため、話題境界（Schegloff & Sacks 1973）が形成されている。しかし、話題境界が出現しても必ず話題転換が起こるのではなく、平本（2011）が指摘するように、手続きによっては話題が継続されうる。ここでも、14 行目以降で当該の話題が続けられている。「う:ん:」と躊躇いを表していた OA は、話題導入者 KI による話題終了行動に対して、14 行目の前半で「まあ」と発話している。談話標識「まあ」は、相手による質問に応じて回答しにくい場合、「とりあえずの反応」として用いられやすい（加藤 1999:34）。また、「まあ」には、「何か情報を隠す、あるいははっきり言いたくない」という含意が含まれている（冨樫 2002:27）。18 行目で KI は、すぐ笑いながら「オッケー大丈夫,私いるから」と発話し、自分の修士論文の進捗も芳しくないことを示唆する。続いて、19 行目で「あでも本当に辛い、やばい」と修士論文の「辛さ」を強調している。そして、21、23 行目では修士論文の最終提出に遅れる時の対応について述べている。

このように、2 回目以降の会話において一方が導入した候補話題にもう一方が否定的反応を示した場合、話題導入者は、質問文を繰り返さず、相手に同調するストラテジーを用いている。

本節では、会話例を挙げながら質問文によって話題が導入される際に用いられるストラテジーを分析した。初対面会話では、相手に候補話題を受け入れてもらうために、

話題導入の理由を付加することで導入の正当性を示すストラテジーが観察された。一方、2回目以降の会話では、候補話題に否定的な反応が見られた場合、話題導入者は同調の反応を示すストラテジーを用いていた。

#### 5.4 考察

まず、初対面と比べて、2回目以降の会話では話題導入の頻度が下がり、話題数が減少するについて考察する。これには、2回目以降の会話で1つの話題が長く持続することがかかわっている。初対面会話で相互の基本情報を把握するために、話題転換が頻繁に行われ、1つの話題が長く続かない。一方、2回目以降の会話では互いに提示する情報量が増加する。また、2回目以降の会話では参加者の意見や考えを表す話題が多く選択されていた<sup>32</sup>。一方が意見を述べると、もう一方が意見を述べてから話題終結を迎えることが多い（筒井 2012）ため、意見述べが増える2回目以降の会話では1つの話題の持続時間が長くなると言える。

次に、初対面会話で多くなされる質問文による話題導入が、2回目以降の会話では減少することについて、FUIの結果を踏まえて説明する。初対面会話の参加者は互いの情報がなく不安な状態であることがFUIから分かる。そのため、相手がどのような人物であるか、質問文により情報を引き出す。一方、2回目以降の会話では互いの基本的な情報が共有されているため、質問文による話題導入頻度が減少する。

続いて、どのような話題がどのような場合、質問文によって導入されるのかについて考察する。質問は、相手に働きかける行為であるため、興味を持つならば相手に関する情報について、全て質問文により話題化するわけではない。そのため、どの会話回においても、大学生である相手との共通点として「大学生活」「出身」「専門」などの話題が取り上げられやすい。また、会話実験そのものや目の前に置かれたお菓子などに関する「状況発話」という話題は会話が行われている現場にあり、参加者が同時に認識できるため、話題として選択可能である。しかし、これらの話題の出現箇所、直前の話題との関連性、1つの話題の持続時間について、初対面と2回目以降の会話に

---

<sup>32</sup> 意見や考えを表す話題が主に平叙文により導入される。その詳細は第6章を参照のこと。

は相違がみられた（例 5-4、例 5-5 参照）。会話後の FUI で会話参加者は、初対面の相手との「会話が続くかどうかちょっと不安」であるため、「話題が途切れないように質問で話題を振ることが多い」と述べていた。一方、2回目以降の会話で「話しているうちに話題が出てくる」ため、「聞き出さなきゃと思わず、会話が進んでいた感じがする」。また、「すごく気が合う感じがしたので、1回に話す情報量が増えた」と述べていた。したがって、初対面会話で会話が途切れないように話題境界が現れれば新話題が即座に導入される。一方、2回目以降の会話で親しみが増していくとともに、話の流れに沿って新話題が導入されることで、当該の話題が自然に膨らみ、やり取りが長くなる。

また、初対面会話で取り上げられなかった「外見」「恋愛」「金銭」などの話題は、2回目以降の会話では導入されるようになる。これは、会話回を重ねるうちに、会話参加者が親しくなり、プライバシーに踏み込む可能性のある話題が選択されうるからである。

最後に、質問による話題導入がどのように行われるのかについて考察する。初対面会話では、話題導入理由を付加することで話題選択の正当性を示すストラテジーが用いられていた。その理由として、話題の内容と、当該話題と直前の話題との関連性という2点から説明する。まず、話題の内容からして「留学」という話題が、三牧(1999)による初対面会話の話題選択肢リストに収まらない。話題選択肢リストは、一般的知識として共有されているため（三牧 1999）、話題選択肢リストに該当しない話題を選択するならば、相手に拒否されやすいであろう。次に、「留学」という話題が直前の話題に関連づけられることなく導入されていた。このような話題導入は唐突な印象を与える可能性が高いため、話題導入の理由を説明することで、正当性を示していたと考えられる。また、2回目以降の会話では相手の否定的反応に同調するストラテジーがみられた。FUI から分かるように、2回目以降の会話では、参加者は相手を知るために質問するのではなく、「たわいもない」「どうでもいい」という話をしている。また、真剣に話すのではなく、「ちょっとくだけた感じ」でやりとりするようになる。ここから、2回目以降の会話では共感的な会話を作るには、質問文によって相手の情報を引き出すのではなく、同調することで相手の気持ちに寄り添う姿勢を示すことが大切で

あることがわかる。

## 5.5 まとめ

本章では、質問文により話題導入とそのストラテジーを分析した。まず、会話回ごとの質問文による話題導入数と質問文の割合について、初対面会話では質問文による話題導入数が特に多く、2回目以降の会話では減少する傾向が見られた。次に、話題の種類について、初対面会話と2回目以降の会話における話題導入の相違を明らかにした。初対面会話では「大学生活」「専門」「出身」など大学生の基本的情報に関する話題が選択されていた。2回目以降の会話では、会話参加者の過去のことや「恋愛」「金銭」などプライバシーにかかわる話題が質問文により導入されることが観察された。最後に、質問文による話題導入のストラテジーについて、初対面会話では話題選択の正当性を示すストラテジーが用いられていた。一方、2回目以降の会話では相手に同調を示し、共感的な会話の構築を促進するストラテジーが観察された。

次章では平叙文による話題導入を分析する。

## 第6章

### 平叙文による話題導入

## 第6章 平叙文による話題導入

本章では、研究課題(4)に対し、平叙文による話題導入に着目し、どのような場合に、どのように平叙文を用いて話題が導入されるかを分析する。まず、6.1節で平叙文による話題導入に関する研究を概観し、本研究の位置付けを行う。次に、6.2節で分析方法を、6.3節で分析結果を示す。最後に、6.4節で考察を行う。

### 6.1 平叙文による話題導入に関する研究と本研究の位置付け

従来の研究では、初対面会話の話題導入に関して、質問文によるものに関心が寄せられており、平叙文を用いた話題導入を論じたものは少ないが、代表的なものとして宇佐美(1993b)と奥山(2000)が挙げられる。

宇佐美(1993b)は、日本人の初対面会話の最初の3分間と最後の3分間を分析対象とし、冒頭部では相互の共通項目が不明であるため、質問文によって話題が導入されるが、20分ほどの情報交換をした後の終結部では平叙文の形で話題が導入される傾向があるとしている。

上記のように、時間の推移に伴う話題導入形式の変化に着目した宇佐美(1993b)と異なり、奥山(2000)は平叙文による話題導入の内容を分析している。奥山(2000)は日韓の女子大学生同士による初対面会話の開始から5分間を分析対象とし、その時間で行われる自己開示について、その話題内容を肯定的・否定的・中間的自己開示に大別している。肯定的自己開示とは相手に誇ることができる情報、否定的自己開示とは相手に「否定的な印象を与えてしまう恐れのある」情報、中間的自己開示とは「肯定的でもなく否定的でもない、中間的な意味合いだけを持つ、自己に関する情報」である(奥山2000:127)。また、日韓のいずれにおいても中間的自己開示が多用されることを指摘している。奥山(2000)では、話題導入の形式は自己開示と自己開示を求める質問に大別されるため、自己開示は本研究の平叙文による話題導入に相当すると言える。しかし、1発話文の内容によって話題を分類するという手法には検討の余地があると考えられる。

以上の研究は、いずれも初対面会話を対象にしたものである。一方、知り合い同士

の会話を対象にした研究として、大場（2007）が挙げられる。

大場（2007:45）は、知り合い同士の会話では初対面会話と異なり、「情報提供を行いながら会話を展開させている」と述べている。大場（2007）の情報提供は平叙文による話題導入に該当する。また、大場（2007）は、話題導入の形式（平叙文／質問文）が、会話参加者の関係に影響を受けることを示唆している。ただし、どの種類の話題が平叙文によって導入されやすいかには触れていない。

さらに、平叙文による話題導入のストラテジーについては、「部分的報告」という方法が指摘されている（Button & Casey 1985、串田 2006）。

Button & Casey（1985）は、平叙文に相当する「ニュースの報告（news announcements）」によって話題導入をする際に、話題導入者は、出来事の詳細ではなく、「ヘッドラインニュース（headline news）」の形で概要を提示する「部分的報告（partial reports）」というストラテジーを用いると述べている。

また、串田（2006:222）は、「部分的報告」について、「聞き手の興味をモニターする機会を作り出す」方法であると指摘している。すなわち、自らの経験を語ることに伴う問題は、聞き手がこれから語る内容に興味を持っているか否かということである。そのため、話し手は、まず部分的報告をすることで、語る内容を持っていることを示しながら、語る機会を与えられるかどうかを聞き手の選択に委ねる。

以上の研究では、会話参加者に関する情報交換が互いに共有されると平叙文による話題導入が多くなること、話題導入にあたっては「部分的報告」というストラテジーが用いられることが確認された。ただし、先述のように、平叙文を用いた話題導入に着目した研究は少ないため、知り合い同士の会話における平叙文による話題導入の実態は明らかになっていない。そこで、本研究では初対面から4回にわたる日本人女子大学生同士の会話をもとに、どのような場合、どのように平叙文を用いて話題が導入されるのか明らかにする。

## 6.2 分析方法

本節では、平叙文の定義と認定基準を示し（6.2.1）、分析の観点を述べる（6.2.2）。



### 6.2.1 平叙文の定義と認定基準

まず、平叙文の定義と認定基準を示す。平叙文の定義については、仁田（1989）に従い、「話し手の視覚や聴覚などを通して捉えられた世界やある事柄についての話し手の判断・解説を述べるといった話し手の発話・伝達の態度」（仁田 1989：33）とする。平叙文の認定にあたっては、まず第5章で取り上げた質問文の範囲条件と形式により質問文をコーディングした上で、質問文に該当せず、かつ、話し相手に情報・意見を提供する発話文を平叙文とする。

### 6.2.2 分析の観点

本研究は、以下に示す3つの観点から平叙文による話題導入を分析する。まず、平叙文による話題導入の出現傾向を会話回ごとに調べる。次に、話題の内容に着目し、平叙文による導入話題の種類を大きく初対面会話と2回目以降の会話に分け、どのような場合に平叙文による話題導入が行われるか分析する。最後に、平叙文による話題導入がどのように行われるか分析し、平叙文を用いた話題導入ストラテジーについて明らかにする。

## 6.3 分析結果

### 6.3.1 会話回ごとの平叙文による話題導入数とその割合

会話回ごとの平叙文による話題導入の出現傾向を以下のようにまとめる。

表 6-1 会話回ごとの平叙文による話題導入数とその割合

	全話題数	平叙文による 話題導入	話題導入に占める 平叙文の割合
初対面	59	15	25%
2回目	38	16	42%
3回目	35	19	54%
4回目	38	23	61%

表 6-1 に示したように、平叙文による話題導入数とその割合は、初対面会話から回を追うごとに、増加していることが分かる。ここから、大場（2007）の指摘と同様、知り合い同士の会話では初対面会話よりも、平叙文の形式で話題が導入される傾向にあると言える。

次節では、話題内容に着目し、平叙文による話題導入がどのような場合に行われるのかを分析する。

### 6.3.2 平叙文による導入話題の種類

平叙文によって導入される話題について、初対面会話と2回目以降の会話を分けて以下の表 6-2 にまとめる。表では、話題導入形式と話題内容との関連を示すため、話題カテゴリによって話題内容を類型化している。ただし、平叙文によって導入される話題には「そのほか」というカテゴリに分類されるものが多い。そこで、「そのほか」というカテゴリに属する話題は、初対面会話欄の「そのほか（大学周辺の地理）」のように、カッコ内に具体的な話題項目を記している。なお、初対面会話と2回目以降の会話で共通していた話題には下線を付している。

表 6-2 平叙文により導入される話題の種類

初対面会話	<u>大学生生活、状況発話、専門、所属、共通点、そのほか（大学周辺の地理）</u>
2回目以降の会話	<u>大学生生活、状況発話、専門</u> 、好み、中学校・高校生活、金銭、外見、恋愛、受験、進路、宗教、家族、そのほか（生理、健康、畑、子供の携帯、虫問題、癒しになる動物、言語使用と行動）

表 6-2 より、「大学生生活」「状況発話」「専門」が、初対面会話と2回目以降の会話で共通して選択される話題ということが分かる。次に、相違点としては、初対面会話と比べ、2回目以降の会話で話題の種類が多くなっていることが分かる。特に「そのほか」という話題カテゴリには7項目あり、「生理」というプライバシーにかかわる話題を除いて、主に話者の考えや意見を表すものであった。

### 6.3.2.1 初対面会話における平叙文による話題導入

本節では初対面会話に着目し、平叙文による話題導入がどのような場合に行われるのかを分析する。以下では、平叙文の特徴を明確に示すため、5章で述べた質問文と比較分析を行う。

会話例 6-1 の直前では、AB と OA は各自の所属について話していた。1 行目で AB は OA が所属する「障害科学」の人数を質問文で尋ねている。AB の質問を確認した後、4 行目から OA が具体的に情報提供を始める。12 行目で OA は「女子が多かったりしたんだけど」と発話した後、2 秒の沈黙が生じている（13 行目）。14、15 行目で 2 人は「いただきます」<sup>33</sup>と発話し、その後笑いがみられる。しかし、どちらも新話題を導入しないため、再び 2 秒の沈黙が生じる（18 行目）。19 行目で OA は机に視線を落とし、小さい声で「(40 かな:)なんか」と学類の人数について呟くように発話している。沈黙（13、18 行目）や小さい声での発話（19 行目）などの話題転換ストラテジー（大谷 2018）から、当該の話題がそれ以上続かず、新話題の導入の導入が必要であることがわかる。20、21 行目で AB は直前の話題に現れた「障害科学」を取り上げ、平叙文の形で「共通知人」に関する新話題を導入している。

例 6-1 質問文による導入がなされたあと、平叙文で新話題が導入される会話例（初対面会話）

- 1 AB:障害科学（(専攻・学類の名前)）は人は多い？少なめ？
- 2 OA:専攻？
- 3 AB:専攻,うんん学類
- 4 OA:学類は(.)何人だったかな(1.0)40 弱ぐらいうん[学類生は
- 5 AB: [あ少ない
- 6 OA:うん男子がねその中でもなんかめっちゃ少ない比率が[いつも：
- 7 AB: [え::
- 8 OA:女子が圧倒的に多くて

<sup>33</sup> 会話参加者の緊張を和らげるために、筆者は会話実験時お菓子や飲み物を用意しておいた。

- 9 AB:うん
- 10 OA:私たちの学年は女子 28 男子 8(.)の計 36 人[みたいな感じで
- 11 AB: [うん
- 12 OA:圧倒的に男子が多かったうん↑違う女子が多かったりしたんだけど
- 13 (2.0)
- 14 OA:いただきます
- 15 AB:いただきます
- 16 OA:hh[hh
- 17 AB: [hhhh,h
- 18 (2.0)
- 19 OA:°(40 かな:)なんか°
- ➡20 AB://私の(.)ルームメイトが
- 21 OA:うん
- 22 AB:障害科学の人
- 23 OA:えっ:えっグロビ((学生宿舎の略称))
- 24 AB:うん[うんうん
- 25 OA: [とか
- 26 OA:お::えっ何年生?
- 27 AB:2 年;
- 28 OA:うそえっじゃ私知ってるな
- 29 (1.0)
- 30 AB:YO((共通の知人の名前))
- 31 (.)
- 32 OA:うん↑あ学類生の子?
- 33 AB:学=
- 34 OA:=えっうそうそうそ知ってるてか私なんか(.)よくやり取りしてるなんか
- 35 LINE とかで

ここで興味深いのは、話題導入後にみられた聞き手 OA の反応である。話題導入の直後に、23 行目で OA は「えっ」と驚きを表明してから、宿舍の略称を提示しつつ確認を求めている。これに対して 24 行目で AB が「うんうんうん」と述べると、OA は AB のルームメイトが自分と同じ学科に所属している誰か特定するため、次々と質問を投げかけている (23、26、32 行目)。そして、AB が質問に答えようとする (33 行目)、それを先取りして「うそうそうそ」と繰り返し、「(当該の人物を) 知っている」と述べる (34 行目)。このような OA の一連の言語行動からして、OA は AB と OA の「共通の知人」という話題に対して関心を表明しており、積極的に当該の話題に参加しようとしていると姿勢がみられる。

上述の会話例 6-1 では、先行話題がそれ以上展開されず、新たな話題の導入が必要とされる際、話し手は「共通の知人」という話題を取り上げていた。平叙文による話題導入の問題点は、聞き手が話題に興味を持つかがわからないということである。そのため、会話をする際、聞き手の興味を引きつけるためには、聞き手と共通点のある話題を導入するのが妥当と思われる。さらに、季 (2014:27) が指摘するように、共通点がある話題を選択することは、聞き手に対して「会話の進行権を持てるように配慮する」ことであり、話し手と聞き手のラポール構築を促進することができる。

しかし、表 6-2 からわかるように、「共通点」という話題カテゴリー<sup>34</sup>は 2 回目以降の会話では、選択されなくなる。それでは、平叙文によって話題を導入する際に、2 回目以降の会話ではどのような話題が選択されているだろうか。これに関しては次節で論じる。

#### 6.3.2.2 2 回目以降の会話における平叙文による話題導入

本節では 2 回目以降の会話に注目し、平叙文によってどのような話題が導入されるのか分析する。

まず、意見や考えに関する話題が、平叙文によって取り上げられる会話例を挙げる。下記の会話例 6-2 では、一方の参加者が平叙文によって自分の意見を相手に伝えてい

---

<sup>34</sup> 会話例 6-1 の話題「共通の知人」は「共通点」という話題カテゴリーの下位項目である (第 3 章参照)。

る。

会話例 6-2 の直前では、KR と SR は出身地について話していた。KR の出身地はベッドダウンのような地域であり、自然に囲まれている。KR は自分の出身地の良さをアピールし、都会の子供たちがかわいそうと話していた。

1 行目で話し手 SR は直前の話題に出ていた「子供」ということばを取り上げ、「子供の携帯」という新話題を導入している。SR は一気に話題を導入するのではなく、節ごとに、相手から「そうそうそうそう」という反応（2 行目）を得てから、スマホから目を逸らさないのは良くないという考えを表明している（3 行目）。一方で KR は、バイト先で子供がキッズ携帯を持っていることについて話しはじめる（4 行目）。また、この発話を起点にして、評価の対象がスマホからキッズ携帯に入れ替わった。キッズ携帯について、SR と KR は意見を表明しあい（11、12 行目）、13 行目で SR は「許せない」と相手の話を繰り返し、「そっか」とあいづちを打っている。相手の話を繰り返すことは、「相手の話をきちんと聞いているという合図」を送り、「共感や同調といった心的機能」（荻原 2015:51）を果たしているため、子供がスマホや携帯を持つのは良くないということについては、参加者の間で共感が共有されている。

例 6-2 平叙文により話者の意見や考えを表すものが導入される会話例（2 回目会話）

- ➡1 SR://もうスマホから、もう目をね
- 2 KR:そうそうそうそうそう
- 3 SR:逸らさないけどな、確かにねそれは良くないね
- 4 KR:もうだからこう、そうその私学童のバイトしてて
- 5 SR:うんうん
- 6 KR:結構子供がみんな携帯、小学生とかが多いけど
- 7 SR:うんうん
- 8 KR:もうみんなスマホとか
- 9 SR:うんうん
- 10 KR:キッズ携帯も首からぶら下げて、すごいなって思っ
- 11 SR:キッズ携帯は(まだ 100 歩譲ってまだいい)

- 12 KR:いや許せない,許せない
- 13 SR:許せない,そっか
- 14 KR:え携帯何歳から持ってました?
- 15 SR:えでも私高校から[なんですね
- 16 KR: [ですよ
- 17 SR:まあ時代,時代的にどうなんだろう
- 18 KR:まあそっか
- 19 SR:なんか機能がその限られてるんだったらいいかな[って思い-思いますけど
- 20 KR: [うん:
- 21 KR:そうか
- 22 SR:どうなんだろう
- 23 KR:あなんかいやなんですよ
- 24 SR:hahaha[自然がいい
- 25 KR: [高校生でいいじゃん
- 26 SR:うん
- 27 KR:そう,なにがそんなに必要なんだろうって思って
- 28 SR:まあ確かに

日本語会話では発話場面や対人関係によって、常にあるスタイルから別のスタイルへの切り替わりが起きる(任・井出 2004)。階層的な構造を持つ話題はさらに下位概念の小話題に分けられる(三牧 1999)ため、宇佐美(1995:36)は、常体から敬体へのシフトについて、「小話題の移行を示す談話標識」の機能があると述べている。本研究でも14行目以降一時的に常体から敬体へのスピーチスタイルがシフトしており、その機能があることが確認できた。「子供の携帯」という話題が導入されてからずっとスマホやキッズ携帯について話されている(1~13行目)が、14行目以降では小話題の「参加者の携帯電話を持ち始めた時期」について言及されている。その後、「高校生から携帯を持ち始めた」というSRの答え(15行目)に対して、KRは「高校生でいいじゃん」と評価を表している(25行目)。そして、SRは「うん」(26行目)、「まあ確かに」

(28行目)と同意を示すあいづちを打っている。このように、子供の携帯使用反対に会話参加者の間で合意ができています。

また、プライバシーにかかわる「生理」「家族」「宗教」などの話題は、質問文や独話的発話ではなく、平叙文で導入される傾向がある。第3章では、「外見」「恋愛」「家族」などプライバシーにかかわる話題が2回目以降の会話で取り上げられることを述べた。このうち、質問文では導入されず、平叙文のみで導入されるのは「宗教」「生理」「家族」であった<sup>35</sup>。先述のように、平叙文を用いて話者自身に関する情報を話題として取り上げるならば、当該話題には語る価値があり、かつ、聞き手がその話題に興味を持つ必要がある。

以下の会話例の6-3では、「宗教」の話題について話されている。分析を通して、当該話題がどのような場合に平叙文により導入されるのかを示す。

まず、会話の解釈を示すため、参加者の背景について簡単に記す。当時同じ大学の大学院に所属していたABとOAであるが、ABはキリスト教系の大学を卒業後、当時の大学院に外部から進学していた。会話例6-3の直前では、OAがABに対して、出身大学ではキリスト教授業があったかどうかを尋ねている。それに対して、1行目でABは具体的な授業の名前を出して情報を提供している。そして5行目から会話内容が、授業で使用していた聖書をめぐって展開している。34行目の冒頭で聖書の購入についてOAが「すごい」と評価し、クリスチャンである友達に聖書をももらった話を取り上げ、「宗教」という話題を導入している。

#### 例 6-3 平叙文により導入されるプライバシーにかかわる会話例 (2回目会話)

- 1 AB:キリスト教概論 ((授業の名前))
- 2 OA:概論 hhh
- 3 AB:それを取りさえすれば[大丈夫 hh
- 4 OA: [うん

---

<sup>35</sup> プライバシーにかかわる話題の中でも「恋愛」「外見」などの話題は、質問文、平叙文どちらもで導入することができる。ここでは平叙文による話題導入の特徴を説明するためには、平叙文のみによる導入されるものを分析する。



5 OA:いいな,え::すごいな,聖書とか配られたりするの

6 AB:いや[聖書多分,いや自分で買う

7 OA: [最初にみんな

8 OA:え:まじか

9 (4.0) ((AB がジュースを飲んでいるところ))

10 OA:すご::い::=

11 AB:=(なんか)高校のさ

12 OA:うん

13 AB:倫理 ((授業の名前)) でもさ

14 OA:うん

15 AB:買わされたんだけど=

16 OA:=え[うそ

17 AB: [まあ私は持ってたけどもともと

(16 行略)

→34 OA:すごい,//なんかその,結構クリスチャンのさ,友達とかもいたりするから,な  
35 なんか1人今の私の同期の子でいるんだけど,聖書研究会とかにも

36 AB:うん

37 OA:入ってる子(もいて),なんかその子に誕生日プレゼントで聖書もらったこと  
38 があって=

39 AB:=[え::

40 OA:[新約聖書の方だったかな,でなんかその

41 (.)

42 OA:なんか(.)その子が個人的にすごいこう,あの心に残ってるところみたいなや  
43 つにこう付箋が貼ってあって

44 AB:え::

45 OA:その時,その子はどう思ったかみたいなことが[書いてあって

46 AB: [へ::

47 AB:すっごい

- 48 OA:すごいな[と 思って、もうなんか私、聖書のあの文言とかがもうなんか  
 49 AB: [hhhhhh  
 50 OA:あれの読み取りができないのよまず  
 51 AB:いや難しい  
 52 OA:いや難[しいと 思って、なんか主がすごいななんとなく[わかったような気が  
 53 するんだけど

これまでの研究では、「宗教」という話題が、「相手のプライバシーにかかわる、あるいは意見対立のもとになり得るという意味」があるため、回避される傾向があると述べられていた（熊谷・石井 2005:102）。一方、上記の会話例では「宗教」の話題が取り上げられていた。その理由を以下で考察する。まず、ここで当該話題の導入形式が相手に情報を求める質問文ではないため、相手のプライバシーに踏み込む可能性が低い。次に、参加者の意見の対立を引き起こす可能性を持つ言語行動は観察されなかった。聞き手である AB は興味を示すあいづちとして「え::」「へ::」（ザトラウスキー 1993）と発話したり、「すごい」「難しい」と評価したりしているからである。

串田（2006:214）では、私事語り<sup>36</sup>を開始する一つの方法として、「先行するやり取りにおいて言及された出来事に対するもう一つの事例として自分の経験を報告すること」を挙げている。ここでは、先行話題である「聖書の購入」に対するもう一つの事例の「プレゼントの聖書をももらったこと」を提示することで「宗教」の話題が導入される。

次に、2回目以降の会話で平叙文を用いて導入される「天気」<sup>37</sup>のような無難な話題を分析していく。

会話例 6-4 では、「天気」という話題は知り合い同士の会話の最初に導入され、あい

<sup>36</sup> 私事語りとは「一人称代名詞を典型的に含み、そのような発話を行われれば相手に知られることのない自分の経験（身の上に生じた出来事や生活習慣や好き嫌いなど）を語ること」である（串田 2006:213）。本研究の平叙文による話題導入は串田（2006）の私事語りに概ね該当する。

<sup>37</sup> 「天気」という話題は「状況発話」という話題カテゴリーの下位項目であり、2回目以降の会話で初出の話題項目である（第3章参照）。

さつのような機能をする。この点については FUI により検証された。会話参加者は「普通に見知った人と話すように、今日は暑いですねとかというところから始まって、自然に会話の流れがスムーズになった感じ」と述べていた。そして、「天気」という話題に触発され、新話題が導入されることが観察された。

会話例 6-4 は OS と HR による 3 回目の会話の冒頭である。1 行目から 3 行目まで OS と HR はあいさつをし合い、3 行目の後半で OS は「暑くなりましたね」と天気に関する話題を導入している。これに対して、4 行目で HR は「だいぶ」と暑くなったことに同意を示している。OS は 5 行目以降も暑さをめぐって発話を続け、「なんか太陽 hhh おかしい hhh」(7 行目) と発話している。また、この「おかしい」が発話されている時、OS と HR は互いに笑い合っている。これに続けて、HR は、「梅雨明けとともに(.)おかしくなってしまった」(9 行目) と発話しており、直前でなされた OS の「おかしい」を繰り返すことで同調を表明している。OS は、「おかしくなりましたね」と続けて繰り返している (10 行目)。

4 秒間の沈黙が生じた後、OS はバイトの話から自ら語りはじめ、「バイト」という新話題を導入している (12 行目)。天気が暑くて、化粧が全部落ちてしまったため、「いや、夏はやばいなと思いました」と評価をしている (28 行目)。

#### 例 6-4 「天気」という話題をきっかけに新話題「バイト」が導入される会話例 (3 回目会話)

- 1 OS: こんにちは =
- 2 HR: = こんにちは, お疲れ様です =
- ➡ 3 OS: = お疲れ様です. // 暑くなりましたね
- 4 HR: だいぶ hhh
- 5 OS: なんか先週まではなんか湿度が高くて暑いって感じだったんです [けど
- 6 HR: [うん
- 7 OS: なんか太陽 hh[h おかしい hhh
- 8 HR: [hhhhhh
- 9 HR: 梅雨明けとともに(.)おかしくなってしまった

- 10 OS: (おかしくなりましたね)
- 11 (4.0)
- ➡12 OS://この間(.)先週(.)ぐらいに
- 13 HR: うん
- 14 OS: バイトチャリで
- 15 HR: うんうん
- 16 OS: 行ったんですね,あのバスに乗り遅れたので
- 17 HR: うん
- 18 OS: hh[hh いつも TX とかで行くんですけど
- 19 HR: [hhh
- 20 HR: はい
- 21 OS: 仕方ないからっつって,シフトが1時からだったので
- 22 HR: はい
- 23 OS: お(h)昼(h)の(h)弁当買いにチャリで 20 分ぐらいかけてバイト行ったら汗で
- 24 化粧が全部落ちて
- 25 HR: お::
- 26 OS: あれこれすっぴんじゃんって[hhhhh
- 27 HR: [hhhhh
- 28 OS: いや,夏はやばいなと思いました

串田 (2006:216) は、私事語りを開始する方法として、上記で述べた「もう1つの事例」以外にも「評価・コメントへの理由説明の中に埋め込む形で自分の経験を報告する」ことがあると述べている。会話例 6-4 では、話し手である OS が、直前の話題「天気」と関連づけて、「夏の(暑さ)がやばい」という評価(28行目)を説明するために、12行目から「この間(.)先週(.)ぐらいに」と過去の出来事であることを明示した上で「バイト」という話題を挿入している。

### 6.3.3 話題間の一貫性を保つ平叙文による話題導入のストラテジー

平叙文による話題導入のストラテジーについて、よく論じられているのは「部分的報告」(Button & Casey 1985、串田 2006)である。以上の分析から、「部分的報告」のほかに、話題間の一貫性を保持するストラテジーも観察された。ここでいう「話題間の一貫性の保持」とは、直前の話題と関連づけながら新たな話題を導入することである。

平叙による話題導入について、直前の話題と新話題が関連しているものを「文脈関連型」、関連していないものを「文脈無関連型」として表 6-3 にまとめる。

表 6-3 平叙文で導入される文脈関連型の話題

	平叙文による 話題導入	文脈関連型	文脈無関連型
初対面	15	9(60%)	6(40%)
2回目	16	11(69%)	5(31%)
3回目	19	12(63%)	7(37%)
4回目	23	11(48%)	22(52%)

表 6-3 に示した通り、4回目の会話を除き、平叙文によって導入される話題には、直前の話題に関する「文脈関連型」が6割以上を占めている。つまり、平叙文によって話題を導入する際、話者が直前の話題に関連づけ、話題間の一貫性を保つストラテジーを使用する傾向にあると言える<sup>38</sup>。話題間の一貫性を示すために、直前の話題で言及された事柄を話題導入発話内で引用するという話題化のストラテジーはしばしば見られる。例えば例 6-1 における「障害科学」、例 6-3 における「聖書」はいずれも直前の話題で言及されていた語であり、新話題を導入する際に、そのまま用いられている。

<sup>38</sup>花村 (2014:91) は、現場性のある話題について、話し手と聞き手は状況を共有しているため、前触れもなく突然行われても会話におけるトラブルの要因にはなりにくいと言っている。この指摘と同様、本研究における「飲食」「天気」など話し手と聞き手が状況を共有しているような現場性がある話題も、主に直前の話題に関連づけることなく導入されている。

山本（2003）はこのような話題導入を「先行表現利用タイプ」と名付けている。このタイプは、直前の話題におけることばを取り上げることで、先行話題と新話題の関連を明確に示すものである。増田（2006）が指摘するように既に言及していた事柄は会話参加者が「当然アクセスができる」（増田 2006:60）ものであるため、直前の話題と関連のある新話題は聞き手にとって受け入れられやすいと言える。

一方、山本（2003:62）は「直前の話題に基づき、連想されたことが次の話題となる」という「連想タイプ」の話題導入も提示している。このタイプで直前の話題の関連づけがいかに行われるのか、以下に会話例を挙げながら分析する。

会話例 6-5 の直前では参加者はお菓子やアイスについて話していた。1 行目から 10 行目で OA は「研究が進まない」一方で「アイスが捗」と発話している。これに対して、聞き手 KI は「そうだよね、つらいよね」「わかる」（8、9 行目）と理解を示している。続いて、11 行目で KI は「私もさ」と発話している。この発話では、「私」によって自分の場合を語りだすと、助詞「も」ということで直前の話題と関連づけられていること、さらに間投助詞「さあ」によって自己開示を全て言い切ることなく聞き手が反応するための機会を作り出していると言える。このようにして、11、13、15 行目で新たな話題として「生理」が導入されている。

#### 例 6-5 話題間の一貫性を保つストラテジーが用いられる会話例（2 回目会話）

- 1 OA:私(もう)最近アイスが捗って,捗って[しょうがないんだけど
- 2 KI: [hhhh
- 3 OA:[hhhhhh
- 4 KI:[作業中 hhh
- 5 OA:そう,研究[進まないのに
- 6 KI: [あ:
- 7 OA:[hhhhhh 作業は進まないわりに,アイスが進むの hhhh
- 8 KI:[そうだよね,つらいよね,( ) hhhh
- 9 KI:分かるわ hhh
- 10 OA:なんでみたいな hhh

- 11 KI://私もさあ,ここ数日,三日前ぐらいから  
 12 OA:うん  
 13 KI:なんかね,私生理なので十日前から  
 14 OA:うん  
 15 KI:圧倒的に頭が動かなくなって  
 16 OA:出た=  
 17 KI:=え分かる?  
 18 OA:分かる  
 19 KI:[分かる ↑ hhh  
 20 OA:[私も最近もめっちゃひどいの,それ  
 21 KI:え本当?[PMS だよね多分  
 22 OA: [そう  
 23 OA:そう PMS だと思う

「生理」という話題は、プライバシーにかかわるものであるため取り上げにくいと考えられる<sup>39</sup>。また、直前の話題では「生理」に関しては言及がみられない。それでは、KIはいかに直前の話題との関連を示しつつ新話題を導入しているだろうか。まず、先述のように助詞「も」を用いることで、直前の話題と新話題の関連が明確に示されている。次に、「数日」「三日前」と時間を表す表現を用いることで、先行話題を始めたOAの「最近」(1行目)と呼応させていると考えられる。さらに、中途発話文である「圧倒的に頭が動かなくなって」(15行目)からは、頭が動かなくなって研究が進んでいないということが含意されている。ここから、直前の話題における「研究が進まない」というOAの状況に関連づけられていると考えられる。このように、山本(2003)のいう「連想タイプ」の話題導入の場合、話題導入者がいくつかの手続きを用いて直前の話題との関連を示しつつ新話題を取り上げている。

<sup>39</sup> 横瀬(2009)は、親友や女性の家族など特定の相手に対して生理を話題にすることが可能であると述べている。そのため、それほど親しくない知り合い同士の会話では「生理」が取り上げられにくいと推測できる。

#### 6.4 考察

まず、会話の回ごとの平叙文による話題数の変化について考察する。互いの基本的な情報が共有されていない初対面会話では、相手の情報を引き出すため質問文によって話題が導入されることが多い。そのため、話題導入発話に占める平叙文の割合が低い。一方、2回目以降の会話では、基本的な基本情報の交換が少なくなるため、相手の情報を引き出す質問文ではなく、自らの情報を提供する平叙文によって、話題導入が多くなされる。

次に、平叙文による話題導入がどのような場合に行われるのかについて考察する。まず、初対面会話と2回目以降の会話のいずれにおいても、「大学生活」「専門」「状況発話」という話題が平叙文により導入されている。それは、会話参加者の大学生という属性と、会話実験の環境が影響を与えていると考えられる。大学生にとって、「大学生活」と「専門」は日常的な話題と言える。また、会話の現場に関する「状況発話」は、話し手と聞き手が共有している状況であることから取り上げられやすいと言える。

2回目以降の会話において特徴的なのは、話者の考えや意見を表す主観的話題、「家族」「宗教」などプライバシーにかかわる話題が平叙文により導入される点である。主観的な話題やプライバシーに関わる話題は、話者の内面性にかかわる。初対面の相手に対して、上記で示した内面性にかかわる情報は開示しにくいと考えられる。加えて、相手がどのような人物かが分からないため、内面性を表す話題が相手に受け入れられない可能性がある。そのため、上記に示した話題は、基本的な情報が共有された後、すなわち2回目以降の会話で比較的に取り上げられやすいと言える。

最後に、平叙文による話題導入の際に、用いられる話題間の一貫性を保つストラテジーについて考察する。まず、当該のストラテジーの使用は、平叙文によって導入される話題内容には関連があると言える。上述のように、平叙文によって導入された話題内容の多くは、話者の考えや意見を表す主観的なものである。これらの話題は、「会話の中ですでに話題になっている事柄に対する意見」を報告するものである（筒井2012:186）。つまり、思考や意見を表出する話題は、先行直前の話題に触発され、導入されるものである。次に、平叙文による話題導入において直面する問題は、相手が興



味を持つかどうかということである。突然自分自身に関する情報・意見を提供しても、相手に拒否される可能性がある。しかし、直前の話題と関連がある新話題を取り上げれば、相手に受け入れられやすい。そのため、平叙文により話題を導入する際に、話題間の一貫性を保つストラテジーの使用が多く用いられていた。

## 6.5 まとめ

本節では、平叙文による話題導入とそのストラテジーを分析した。まず、会話回ごとの平叙文による話題導入数とその割合を数え、2回目以降の会話では平叙文での話題導入が多く行われることを指摘した。次に、話題内容に着目し、初対面会話と2回目以降の会話に分けて、平叙文の話題の種類を整理した。その結果、初対面会話では、相手と共通点がある基本的な情報を提供しようとする場合、話題導入者が平叙文により話題を取り上げていた(例 6-1)。2回目以降の会話では、話題導入者は平叙文を用いて意見や考えなどを表明し、相手に同意や共感を求める(例 6-2)。また、相手との共通性を示す際に、「宗教」などのプライバシーにかかわる話題を取り上げていた(例 6-3)。また、会話冒頭で「天気」のような無難な話題をきっかけに話を広げる場合、平叙文で導入されることが観察された(例 6-4)。最後に、平叙文による話題導入のストラテジーについては、初対面会話、2回目以降の会話いずれにおいても、新たな話題を提示する際に、直前の話題に関連づけて新話題を導入する傾向があることを指摘した。

次章では、独話的発話による話題導入を分析する。

## 第7章

### 独話的発話による話題導入

## 第7章 独話的発話による話題導入

第5と第6章で論じた質問文と平叙文による話題導入は、いずれも相手に強い働きかけを行うものである。質問文によって話題導入をする場合、相手には情報要求に対する応答義務が課される。また、平叙文によって話題導入をする場合、相手には理解や評価などの反応が期待される。一方、自分に宛てた独話的発話による話題導入は、応答が必須ではなく、後続の会話展開を相手に委ねるという点において相手への働きかけが上記の2つよりも軽減される。

本章では研究課題(5)に対応して議論する。独話的発話による話題導入に着目し、どのような場合に独話的発話による話題導入が行われる、また、どのような機能があるか明らかにする。まず、7.1節で独話的発話を用いた話題導入に関する先行研究を紹介し、本研究の位置付けを行う。次に、7.2節で分析方法を記し、7.3節で分析結果を示す。最後に、7.4節で独話的発話による話題導入に関して考察を述べる。

### 7.1 独話的発話による話題導入に関する研究と本研究の位置付け

従来の研究では、聞き手目当ての発話に関心が集まっており、独話的発話に関する研究は少ない。また、独話的発話に関して述べた研究の多くは、三牧(2000)などのように独話的発話におけるスピーチレベルシフトの観点から論じたものである。一方、本研究で扱う独話的発話による話題導入については、平本(2011)、筒井(2012)、岡崎(2020)による議論にとどまる。以下では、上記3つの研究を紹介する。

平本(2011)は、友人同士の会話を対象に、会話の中で「直前の話題(の少なくとも一部分)の内容を名詞(句)で表すアイテムが含まれ、かつそれ自体ではその話題について展開を行う命題を持たない発話」を「話題アイテムの掴み出し」と呼び、その発話をもたらす話題展開の機能を分析した。「話題アイテムの掴み出し」は「①視線を聞き手から外す、②相対的に弱められた音で発される、③終助詞を伴う場合に末尾の音が引き伸ばされる」という3つのパラ言語的特徴を持つ(平本 2011:104)。平本(2011)が「話題アイテムの掴み出し」を、その次のターンを取る者や発話のタイプを制約しないものと述べていることから、これは独話的発話の一種と言える。また、

その話題展開の機能について、平本（2011）は、話題が終了しうる場所に現れる「話題アイテムの掴み出し」は、直前の話題を継続したり、新たな話題を導入したりする機能を持つと指摘している。

平本（2011）と同じく友人同士の会話を対象にした筒井（2012）は、独話的発話から始まる話題の内容を視野に入れて分析をしている。筒井（2012）は、独話的発話は問題を提示する「問題の思案」と、発話時の感情や評価を表す「感情・感覚などの表出」に分け、それぞれの連鎖組織を分析した。筒井（2012）によると、独話的発話の後にはしばしば相手の笑いが生起する。ただし、「感情・感覚などの表出」の独話的発話の場合には、笑いに代わり、同感を示す発話がなされることもある。ここから、独話的発話による話題導入とは、聞き手が独話的発話として扱われるかどうかによって決定される遡及的なものと言える。

初対面会話における独話的発話の談話展開の機能に着目した岡崎（2020）は、丁寧体を基調とした会話を対象としている。そして、話題が終結しうる場所に現れる独話的発話により、「それまでの話題を断ち切ることなく、次の話題へスムーズに移行することが可能」（岡崎 2020:55）であると指摘している。

以上より、独話的発話について(1)新たな話題を開始する機能を持つこと、(2)後の発話のタイプや発話の順番を制約しないという性質があること、(3)話題を断ち切らずに次の話題へのスムーズな移行を可能にする発話であることが分かった。ただし、上記の研究は初対面会話あるいは友人同士の会話を対象にしたものであり、本研究で扱うような知り合い同士の会話には言及がない。そこで本章では、初対面会話から4回目までの会話を対象として独話的発話による話題導入に着目する。7.2節では分析方法を述べ、7.3節では独話的発話がどのような状況でなされるか記述し、さらに、のちの話題展開を聞き手に委ねる独話的発話に対して、どのように聞き手が返答するか分析する。最後に、7.4節では研究結果を踏まえ、考察を行う。

## 7.2 分析方法

本節では分析方法を示す。まず、7.2.1節で独話的発話の定義と認定基準を述べる。次に、7.2.2節で分析の観点を紹介する。

### 7.2.1 独話的発話の定義と認定基準

本研究では、岡崎（2018:22）を援用し、独話的発話を「聞き手不在であるかのよう  
に」自分自身に宛てており、「思考や心情が率直に表出」される発話と定義づける。ま  
た、独話的発話の認定については、多くの研究が基本的に言語形式とパラ言語形式的  
要素に着目し判定を行なっている（三牧 2000、平本 2011、筒井 2012、岡崎 2018、  
2020、櫻井 2015、吉野 2016）。以下の表 7-1 に上述の先行研究で記された独話的発話  
の言語的特徴とパラ言語的特徴をまとめる。

表 7-1 独話的発話の特徴

言語的 特徴	意志や願望などを表す助動詞	よう、たい、ほしい
	疑念や推量などを表す助動 詞・終助詞	よう、だろう、かな、な（あ）、わ、（の） か、かしら、っけ
パラ言 語的特 徴	声の高さ	弱い声
	声の大きさ	小さい声
	イントネーション	下降イントネーション
	視線	相手から視線を逸らす

認定手順については、まず独話的発話の定義に従い、話者自身に宛てるかどうかによ  
って判断する。次の話者決定のための言語的要素を整理した高梨（1999:163）によ  
ると、「呼びかけ、人称代名詞、丁寧体／非丁寧体の区別、談話標識、固有名詞などの  
特定の語句の使用、共有エピソードへの言及、知識要求、知識伝達」などの言語表現  
や発話内容などにより次話者の決定が可能となる。そこで、話者自身に向けられる独  
話的発話は、これらに当たらない発話とした。次に、上記の基準で抽出した発話を、  
表 7-1 に基づいて整理する。ただし、長谷川（2017）の指摘するように上記の言語表  
現が含まれているからといって当該の発話が独話的発話と断定できるわけではない。  
そのため、声の大きさやイントネーションなどのパラ言語的特徴を手がかりに加えて  
認定する。こうして、初対面から 4 回目までの計 20 件の会話における 170 個の話題

導入発話から、13 個の独話的発話を認定した。

## 7.2.2 分析の観点

分析では、以下に示す観点から独話的発話による話題導入を論じる。まず、会話回ごとの独話的発話による話題導入の回数を調べ、内容的側面から話題を分類する。次に、独話的発話に対する聞き手の反応を踏まえ、話題導入の際のやりとりを分析する。

## 7.3 分析結果

本節では分析結果を示す。まず、7.3.1 節で各会話回での独話的発話による話題導入数と組数を示す。次に、独話的発話によって導入される話題を分類し、話題の傾向と言語的特徴を述べる。続いて、7.3.2 節で独話的発話に対する聞き手反応に注目する。聞き手の反応によって、直前の発話が独話的発話かそうでないかが遡及的に決定される。そこで独話的発話として扱われるもの／扱われないものに大別し、会話の事例を挙げながら、話題導入の相互行為を分析する。

### 7.3.1 会話回ごとの独話的発話による話題導入の出現傾向と下位分類

話題導入をもたらした独話的発話は計 13 発話ある。以下表 7-2 に、独話的発話の分布を会話回ごとにまとめる。

表 7-2 会話回ごとの独話的発話ではじまる話題数／割合と組数

	全話題数／割合	独話的発話ではじまる話題数／割合	組数
初対面	59 (100%)	1 (2%)	1
2 回目	38 (100%)	4 (11%)	3
3 回目	35 (100%)	8 (23%)	4
4 回目	38 (100%)	0 (0%)	0
合計	170	13	4

表 7-2 に示したように、独話的発話による話題導入の頻度と割合は、ほかの質問文

や平叙文と比較して低いと言える。ここで注目したいのは、初対面と比べて、2回目以降の会話で独話的発話による話題導入が多いこと、また、2回目以降の会話を見ると、5組のうち半数以上の組が独話的発話を用いて話題を開始していることである。

これに関して、筒井（2012）を援用して話題の内容的側面を記す。7.1節で述べたように、筒井（2012）は独話的発話によって導入される話題を「問題の思案」、「感情・感覚などの表出」に分類している。「問題の思案」は「自分が抱えている問題を問題提示の発話で提示することによって話題を開始する」ものであり、「感情・感覚など表出」は「意見表出の発話によって、会話参加者の発話時の評価、感情、感覚、欲求、意志などを表出する発話から開始される」ものである（筒井 2012:239、243）。本研究では、この2つの分類に属さないものは「そのほか」に分類する。話題を導入した計13発話をこれに即して分類し、その発話の言語形式をまとめると、以下のようになる。

表 7-3 独話的発話による話題導入の分類と言語形式

下位分類	話題数	言語形式
問題の思案	4	終助詞「かな」、「どうしよう」、「どうしたらいいだろう」
感情・感覚 などの表出	8	「形容詞+（な）」「V-たい+（な）」
そのほか	1	「つけ」

表 7-3 からは、「感情・感覚などの表出」が8件と半数以上を占めていることが分かる。これに分類される発話は、感情形容詞や「V-たい」といった言語形式を用いて平叙文の形式をとっている。次に多いのは「問題の思案」で、終助詞「かな」や「どうしよう」が用いられている。この時の「かな」や「どうしよう」は、相手に応答を求める問いかけとは異なり、単に話者の疑念を表すものと言える。「そのほか」には言語形式「つけ」を用いて記憶内の情報を検索しながら音声化されるものが分類されている。なお、塩田（2005）は、独話的発話を意図的なものと非意図的なものに分類しているが、「問題思案」と「感情・感覚などの表出」は意図的に発せられるものと、「そのほか」に分類された記憶内の情報検索の音声化は非意図的なものとも捉えられる。

### 7.3.2 独話的発話に対する聞き手の反応

本研究では、聞き手がない場面でつぶやかれた典型的な独話的発話ではなく、目の前に聞き手がいる場面でなされた独話的発話を扱う。池谷（2012）は、独話的発話は聞き手に向けて発せられたものではなく、その時の聞き手は「invisible listener」（目に見えない聞き手）」に捉えられると述べている。加えて、その時の独話的発話には、聞き手への働きかけがないと述べている。ここから、独話的発話にある話題の要素を取り上げて話題を開始するか否かは聞き手次第と言える。すなわち、独話的発話による話題導入に対する聞き手の応答が、何らかの言語表現によって積極的に反応する場合、直前の独話的発話は独話的発話として扱われていないと言える。その一方で、聞き手が言語表現を用いずに笑いや沈黙で反応する場合は、独話的発話は独話的発話として扱われていることになる。

表 7-4 に、独話的発話に対する聞き手の反応に基づき、13 発話が独話的発話として扱われているか否かを示す。

表 7-4 独話的発話に対する聞き手の反応による分類と発話数

下位分類	発話数
独話的発話として扱われないもの	7
独話的発話として扱われるもの	6

表 7-4 に示した通り、独話的発話として扱われないものは 7 発話、扱われるものは 6 発話であった。以下では会話例を挙げながら、独話的発話に対する聞き手の反応を分析する。

#### 7.3.2.1 独話的発話として扱われない場合

筒井（2012）は、「感情や感覚などの表出」の独話的発話による話題導入について、聞き手は独話的発話として扱わず、実質的な発話で反応するという。一方、分析データからは、「感情・感覚などの表出」だけでなく、「問題の思案」の場合でも、聞き手が



独話的発話として扱わず、実質的な言語表現で応答する事例が観察された。

### 問題の思案の場合

疑念を表す独話的発話に対しては、聞き手が直後に質問で状況を尋ねて積極的反応を示すことが多い。

下記の会話例 7-1 は KI と OA による 3 回目の会話開始直後の断片である。修士 2 年生である KI と OA は初対面時と 2 回目の会話で、提出締め切りが近い修士論文の執筆が進まないという話題について話していた。3 回目の会話が始まる前に、筆者と 2 人の参加者があいさつをしており、この中で修士論文の話が取り上げられていた。「修論はどうですか」という筆者の質問に対して KI は「炎上しています」と答え、続けて 3 人が同時に笑った。その後筆者は、「よろしくお願いします」と退室し、会話実験が開始された。1 行目の話は会話実験の最初の発話である。

1 行目で KI は笑いながら「どうしよう」と修士論文に関する問題を提示し、話題を導入している<sup>40</sup>。発話時、KI の視線は OA に向いておらず、またイントネーションが下降調であることから、相手に応答を求めない独話的発話と見なすことができる。

#### 例 7-1 「問題の思案」に対する積極的反応を示す会話例（3 回目会話）

- 1 KI://h h h h もう本当大炎上なんだけど、ど(h)う(h)し(h)よ(h)う h 独話的発話による導入
- 2 OA:なんで,指導教官と↑
- 3 KI:いや指導教官(.)が機能してなくて h
- 4 OA:hh[h h h h h h h h h h]
- 5 KI: [h h h h h h な(h)ん(h)か(h)一年半ぐらい前にもう死んだものと思って
- 6 h h h h[なんだけど
- 7 OA: [え(1.0)どういうこと?
- 8 KI:なんか指導ないんだよねな(h)ん(h)か hh[h h h h h h h h]

<sup>40</sup> 会話実験前の 3 人会話で KI の修士論文の話が「質問—応答」の 1 往復のやり取りにとどまっており、話題として取り上げられていないと見なす。そのため、1 行目の KI の発話は当該話題の導入発話として認定する。

- 9 OA: [hhhhh
- 10 OA:えっそれ指(h)導(h)教(h)官じゃないじゃ＝
- 11 KI:＝そうなんだよ hhhhh 主査 (いない) み(h)た(h)い(h)な[感じだよ
- 12 OA: [本当だよ
- 13 KI:そう,まあそんなところでね,今自力で全部頑張って(h)い(h)る hhh
- 14 OA:えやばくない↑
- 15 KI:そう,まあ副査の先生はすごい,すごいっていうか,自分が行けば
- 16 OA:うん
- 17 KI:指導してくれるんだけど

筒井 (2012) によると、聞き手に回答を求める質問文とは異なり、問題の思案を表す独話的発話は、聞き手に相談を持ちかけるものではないという。また、釜田 (2017) は、聞き手に対して解決策の提示を期待するものを「悩み」、同調を期待するものを「愚痴」と定義している。これらを踏まえると、問題の思案を表しつつ聞き手に対して同調を期待する独話的発話は「愚痴」に位置付けられるであろう。さらに、釜田 (2018) で指摘されるように、愚痴の話し手は、自分にとっての望ましくないことを聞き手に理解してもらいたいと同時に、相手に不快感をもたらすことを心配するというジレンマが生じやすい。そのため、独話的発話という形式で発話するならば、相手の愚痴に同調するか否かは聞き手に委ねることで、聞き手への働きかけが軽減されると言える。

このような独話的発話に対して、OA は反応せず聞き流すこともできる。しかし、ここでは、KI の愚痴に対して、OA は「なんで,指導教官と↑」(2行目) と言い切らない形で質問することで、積極的に話題化に関与している。質問には、相手の発話内容に関心を示す対人的効果と相手の発話を促す会話展開上の効果がある (田中 1998) ことを踏まえると、OA は KI による独話的発話の内容に関心を示し、話の継続を促していると言える。3行目以降では、上記の発話を受けた KI が「指導教官が指導してくれない」ことについて詳細な情報を提供している。KI の情報提供に対し、OA は「えっそれ指(h)導(h)教(h)官じゃないじゃ」(10行目)、「本当だよ」(12行目)、「えやばくない↑」(14行目) と相手の境遇への理解や共感を示している。

このように、独話的発話を用いて取り上げられた「問題の思案」に対して、聞き手が積極的に受け入れ、質問表現によって話題継続を促進したり、相手の立場に立ち、望ましくない境遇を理解したりする。

### 感情・感覚などの表出の場合

感情・感覚などを表出する独話的発話によって話題が導入される場合、聞き手は直後に「わかる」「そうだよね」と同意を示す言語表現で返答する。

会話例 7-2 の 1 行目で KR は、大学院入試の怖さと大変さが周りの人に理解されないことについて「苦しい」と述べている。これに続き、後輩と話すのが楽になると言い（5、8 行目）、SR は「後輩は全てを浄化してくれる」（9 行目）と同意を示している。このように、11 行目まででは、入試の苦しみや、その苦しみを和らげる方法が話題として取り上げられている。

これに続き、12 行目で KR は「(昔に) 戻りたい°( )°」と発話する。この発話によって、それまでの話題とは異なる、過去に関する話題へと推移している。これは、起りえない架空の事柄に関する願望であることから、「現実逃避」という新話題が導入されると認定できる。

この 12 行目の発話は、三牧 (2000) がそれまでとは異なるスピードの発話を独話的発話のパラ言語的特徴の 1 つとして取り上げたように、速いスピードで発せられている。また、発話時には KR の視線が相手から外して、少し上に向けられていることから独話的発話として聞こえる。これに対して SR は「分かる,1 年生になりたい」と同意を示している (13 行目)。また、KR も「1 年生になりたい」(14 行目) と、直前の KR の発話を繰り返している。15 行目以降では、2 人は根拠を示しながら「何年生に戻ればいいか」と話している。

#### 例 7-2 「感情・感覚などの表出」に対する積極的反応を示す会話例 (2 回目会話)

- 1 KR:もうなんかそういう気分ちょっといい,ちょっときつい,いやな,もう苦しいっ
- 2 て思って
- 3 (1.0)

- 4 SR:ね,うん,ねどうしようもないんですけどね hhhhhhh
- 5 KR:[後輩と,後輩と楽しく喋ると
- 6 SR:[やるしかないね
- 7 SR:うんうん
- 8 KR:後輩に馴染めるか,もうなんか( )遊べるから,いいってみたいな
- 9 SR:うん,後輩は全てを浄化してくれる
- 10 KR:そう後輩( )[hhhhhhhhhh
- 11 SR: [hhhhhhhhhhhh
- 12 KR://戻りたい°( )° 独話的発話による導入
- 13 SR:分かる,1年生になりたい
- 14 KR:1年生になりたい
- 15 SR:2年ぐらいでいいかな,2年生ぐらいでいいな,1年はちょっと hh
- 16 KR:確かに=
- 17 SR:=コマ数が多すぎ hhhh
- 18 KR:あそうか,[1年生はコマが多いのか
- 19 SR: [hhhhh
- 20 SR:相当

12行目の「戻りたい」という発話は、相手の応答を求めない独話的発話と言えることから、SRは聞き流すこともできる。ここで、KRの「(過去に戻りたい)」という願望表明に対して、すぐ「わかる」(13行目)と応答するのは、相手と同じ感情を持つことを表明したいためと言える。ここから分かるように、独話的発話によって取り上げられた「感情・感覚の表出」に対して、聞き手が実質的言語表現によって同じ感情を表明することで共感を示す。

### 7.3.2.2 独話的発話として扱われる場合

上記より、話題導入は会話参加者が協力して作り上げられるものであり、単に話題が導入されればよいというわけではなく、話題成立には聞き手からの引き受けが必要

であることが分かる。聞き手に向けられていない発話に対して、発話を聞き流すことで独話的発話として扱うか、独話的発話として扱わずに話題として引き受けるかの判断は聞き手に委ねられる。池谷（2012:19）は、独話的発話を聞き流すことについて、「非協力的な聞き手として無視していても人間関係が壊れることがない」と述べている。本節では、聞き手に向けられていない独話的発話に対する聞き手の反応と、反応がなかった場合になされる話題の再導入について分析する。

### 問題の思案の場合

以下の事例では、話者の「問題の思案」の表出に対し、聞き手はそれを独話的発話として扱い、「笑い」のみで反応する。その後、話者が再び独話的発話を用いて話題を再導入し、聞き手の関心を引きつけようとする。

会話例 7-3 は OA と AB の 3 回目の会話の断片である。どちらの参加者も修士 2 年生であるが、その後の進路として OA が就職、AB が博士課程への進学を希望していることが初対面会話時に共有されていた。例 7-3 の直前、当時賃貸マンションに住んでいた OA が翌年卒業後の引っ越しの大変さを話していた。一方、自分と比べ、「引っ越しはそんなに大変ではない」と学生宿舎に住んでいる友人が言っていたことを伝える（1、2 行目）。AB は、「うん」と同意を示しつつ「服と食器しかない」と付け加えている（6、8 行目）。その後、9 行目で OA は「そんなもんだよね」と同調を示している。この後、3 秒の沈黙が生じ、11 行目で AB は「いや私引っ越すことになったら、どうしよう」と「受験」という新話題を導入する<sup>41</sup>。この発話は、下降調のイントネーションでなされており、AB に問いかける機能を持っていないことから独話的発話として見なすことができる。これに対して OA は「hhhhhh」（12 行目）と笑いで反応しており、この笑いに誘発された直後に、AB も笑っている（13 行目）。この後 AB は、目線を上に逸らしながら「面倒臭いな」（14 行目）と独話的発話で話題を再導入したうえで、「引っ越しは」（16 行目）と付け加える。このような話題の再導入に対して、17 行

---

<sup>41</sup> AB が受験に失敗すれば学生宿舎から引っ越すことになる。AB が気にしているのは、引っ越しより、受験失敗のほうである。よって、11 行目の発話は「受験」という新話題のはじまりとみなすことができる。

目で OA は「えそれ面倒くさくない? (.)い,あでもそっか,結果分かるのは3月?」と問いかけることで、提示された話題を受け入れて発話している。続いて引っ越しに「(ならない)と思うけど」(19、20行目)「でも大丈夫でしょう(.)そんななんか内進でドクター落ちるって話はあんま聞かないけど」(32、33行目)と AB を励ましている。

例 7-3 「問題の思案」に対する消極的反応を示す会話例 (3回目会話)

- 1 OA:家具とかそういうのはないから,自分の私物持って帰ればいいだけだから,そ  
2 んなに引っ越し大変じゃないんだよねって言ってたよ
- 3 AB:うん
- 4 (.)
- 5 OA:(確かにそっか)
- 6 AB:服ぐらいしか h
- 7 OA:hh そうだよ,服とちょっとした食器とか↑
- 8 AB:うん食器とか
- 9 OA:そんなもんだよね
- 10 (3.0)
- ➡11 AB://いや私引っ越すことになったら,どうしよう 独話的発話による導入の試み
- 12 OA:hh[hhhh
- 13 AB: [hhhh
- 14 AB:面倒臭いな 独話的発話による再導入の試み
- 15 OA:[う:ん:
- 16 AB:[引っ越しは
- 17 OA:えそれ面倒くさくない? (.)い,あでもそっか,結果分かるのは3月?
- 18 AB:うんうん
- 19 OA:あ:::(2.0)うん,えでもそうになったら実家戻るってこと?(ならないと)思うけ  
20 ど
- 21 (.)

- 22 AB:いやどう (なるか) わかんない  
23 OA:あそうだよね  
24 AB:残るか  
25 OA:うん  
26 (1.0)  
27 AB:なんか東京のどっかに行くか  
28 OA:うんうん  
29 AB:実家最悪のパターン[実家に  
30 OA: [hhhhh 最悪のパターン  
31 AB:どうなるかはちょっとわかんない  
32 OA:う:ん::でも大丈夫でしょう(.)そんななんか内進でドクター落ちるって話は  
33 あんま聞かないけど=

先述のように「どうしよう」といった疑念を表す形の問題思案は話し手の愚痴と見なすことができる。一般的に愚痴の聞き手には理解の表明といった反応が期待される。聞き手の理解表明は、慰めや励ましにもなる。

会話例 7-3 における「どうしよう」という AB の愚痴に対して、OA は笑いで反応することで独話的発話として扱い、聞き流している (12 行目)。そして、「引越は面倒臭いな」という AB の愚痴に対して、受験も面倒くらいと評価を表している (17 行目)。AB が受験に失敗したら実家に戻ると述べると、OA は「内進で落ちる話は聞いたことはないから、大丈夫だ」(32 行目) と励ましている。

### 感情・感覚などの表出の場合

感情・感覚を表す発話に対して、相手が笑いのみで反応してターンを取らない場合、話題を導入しようとした者は、相手へ向けて話題を再導入することがある。

会話例 7-4 の直前では KR と SR は音楽について話していた。KR は、自分より一緒にピアノ教室に通った妹の方が上達だという話をしていた。1 行目で SR は「まあね、比べちゃうとね」と話している。KR は小さい声で「もう音楽は本当にだめ」(2 行目)

と呟いて、4行目で音楽ができるSRのことを羨ましがっている。そして、SRは流暢さを欠く発話で「普通の曲」と限定して「できる」と述べ（8、11行目）、KRの「音楽ができる」という評価に対して部分的に同意を表明している。

この後、12行目でKR視線を下に逸らし、小さい声で「>本当に<カラオケとかだめ」と呟くことで、直前の文脈に関連させつつカラオケに関する新話題を導入している。このKRの独話的発話に対して、SRは言語的な反応ではなく、笑いで反応している（13行目）。12行目の発話がSRによって独話的発話として取り扱われたため、KRは14行目で「カラオケ行きたくない」ことに対して「本当に」「まじ」「めっちゃ」と若干の程度副詞を用いて強調して話題導入を再び試みる。しかし、これに対してSRは笑いで反応している（15行目）。

#### 例7-4 「感情・感覚などの表出」に対する積極的反応を示す会話例（3回目会話）

- 1 SR: まあね、比べちゃうとね
- 2 KR: °ダメだ°, 本当にだめだ, もう音楽は本当にだめ
- 3 SR: hhhhhh いやでもまあ習, まあ書道, 書道ができるから
- 4 KR: °いやいやいやいや°, もうねなんかさ, 音楽ができる, カラオケとかもさでき
- 5 る
- 6 SR: あ:::
- 7 KR: わかんないんだけど=
- 8 SR: =まあでもね音程はそうだね, 確かに, はずし:: うんまあね, き-珍しい曲わから
- 9 ないんだけど
- 10 KR: うん
- 11 SR: まあ普通の曲があったら, まあ
- ➡12 KR: //>本当に<カラオケとかだめ=
- 13 SR: =hhhhhhh
- 14 KR: 本当に, 本当にカラオケまじで, めっちゃ行きたくない
- 15 SR: hhhhh
- 16 KR: 大学入って

独話的発話による導入の試み

対人的発話による再導入の試み



- 17 SR:うんうん
- 18 (1.0)
- 19 KR:1回2回とかしか行ってなくて
- 20 SR:うんうんうんうん
- 21 KR:本当に嫌いすぎて,誘わないでって
- 22 SR:hhhh[hhhh
- 23 KR: [hhhhhhh
- 24 SR:ひとカラ<sup>42</sup>行けよみたいな hhh[hhhhhhhhhhhh
- 25 KR: [そう,いやだ
- 26 SR:[まあまあまあ
- 27 KR:[ ( ) 絶対誘われても私歌わないからね
- 28 SR:あああ
- 29 KR:端っこでタンバリンを持って[ ( ) hhh
- 30 SR: [タンバリンを持って,イエ[::みみたいな hhhhhh
- 31 盛り上げ役に徹するみたいな
- 32 KR: [イエ::
- 32 KR:そう

上述のように、KR が話題導入を2回しようとしたが、SR は笑いのみで反応していた。そこで、16行目からKRは、平叙文によってカラオケに行く回数が「1回2回とか」であるという情報を提供する(16、19行目)。SRは話の継続を促すあいづち(17、20行目)することで聞き手として振る舞い、それに対してKRは話し手として、両手を前に出しながら「誘わないで」とカラオケの誘いを拒否する様子を演じている(21行目)。2人で笑い合った後(22、23行目)、24行目でSRはKRが21行目でした誘いを拒否するジェスチャーを真似て、「ひとカラ行けよみたいな」と述べている。実際の会話で誘いを断ろうとする際に、「ひとカラ行けよ」とは言いづらいただろう。前田(2004:56)では、文末の「みみたいな」は「娯楽機能」を持ち、ふざける時に人の笑い

<sup>42</sup> 「ひとカラ」は「ひとりカラオケ」の略語である。

を誘うために用いられうると述べられている。そのため、SRによる「ひとカラにいけよ」という発話は、井出(2013:56)の指摘するように「オチ(punch line)を作るための仕掛け」だと言えるだろう。そして、29行目以降の発話で繰り返しと言い重なりが行われている。29行目でKRが「端っこでタンバリンを持って( ) hhh」と発話している途中、SRは終了を待たずに「タンバリンを持って、イエ::みたいな hhhhhh 盛り上げ役に徹するみたいな」とKRの直前の発話を繰り返している。SRの「イエ::」とほぼ同時に、KRも「イエ::」(32行目)と繰り返している。植野(2016)では、融合的談話という概念を提唱し、「話し手と聞き手の発話が、どちらが話し手か聞き手か分からなくなるほどに」、共に作り上げられる「究極の共話」を「融合的談話」と呼ぶ(植野2016:24)。さらに、「融合的談話」において繰り返し、先取り、付け加え、言い重なりという発話現象が頻繁に行われると述べられている。29行目から32行目でなされていた繰り返しや言い重なりの連続によって、「融合的談話」(植野2016)が展開されていると言える。

以上の会話例7-3と7-4では、独話的発話に対し、聞き手が笑いのみで反応しており、話題導入者は話題の再導入を行う。伊豆原(2002:34)は「独話において話し手が何かを伝えようと思うならば、話し手は会話よりもさらに聞き手を聞き手としてとどめておくための工夫が必要になる」と述べている。会話例7-3では、独話的発話による問題提示がなされるが、聞き手からは笑いの反応のみであった。そこで話題を導入しようとする者は、独話的発話で感情を表して話し相手の関心を引きつけようとしていた。また、会話例7-4でも同様、独話的発話によるネガティブな感情表出に対して聞き手の反応が笑いのみであったため、話題を導入しようとする者は平叙文によって具体的情報を提供し、話し相手に理解を求めている。

#### 7.4 考察

まず、回ごとの独話的発話による話題数の変化について考察する。独話的発話による話題導入の頻度と割合は全体的に低いものの、初対面時と比べ、2回目以降の会話、特に2回目と3回目の会話では、独話的発話の出現頻度が高くなっていた(表7-2参照)。これには話題内容が関連していると考えられる。独話的発話で始まる話題は、主

に思考・感覚系（筒井 2012）に属するため、客観的な情報を交換することが優先される初対面会話では出現しにくい。

また、2回目以降の会話では独話的発話による話題導入数が多くなるのは、独話的発話の機能には関連すると考えられる。独話的発話は自分に向けて発せられるため、言及される情報は話し手領域にあるはずである。神尾（1990:4）は、情報のなわ張りという概念を提出し、「情報のなわなりに属する情報とは、話し手または聞き手が自己に帰属するものとみなす情報」と述べた。さらに、話し手のなわばりに帰属する情報については、神尾（2002）では下記の4種類に分類されている。

- a. 内的直接体験を表す情報
- b. 外的直接体験を表す情報
- c. 自己の専門または熟達領域に関する情報
- d. 自己の個人的情報

神尾（2002:32）

独話的発話によって導入される13個の話題において、「問題の思案」と「感情・感覚などの表出」は、「a. 内的直接体験を表す情報」に属しており、話し手のなわばりに最も深く入るものである。また、「問題の思案」と「感情・感覚などの表出」以外の独話的発話は、記憶探索の発話であったことから、「d. 自己の個人的情報」に属すると言える。

話し手のなわばりのみに入る情報は、問題や意見提示を述べる平叙文の形で聞き手に向けられることがある。それでは、なぜこのようにして独話的発話がなされるのであろうか。その可能性として、自分の意見や感情を率直に表す独話的発話は「親近感の指標」（長谷川 2017:34）の一つであり、独話的発話によって話し手が聞き手と親近感・信頼感を持つ人間関係の構築を図ろうとしていることが考えられる。また、独話的発話は次の話者と次の発話のタイプを制限しない。そのため、独話的発話による話題の資源の提供に対して、聞き手にはその話題を引き受けるか否か選択権が与えられる。ここから、独話的発話による話題導入は、直接的に相手に働きかけない話題導入

の方法だと言える。

以上のように独話的発話による話題導入は、相手との心的距離を縮め、親近感を表明する機能のほかに、相手への働きかけを軽減して配慮を示す機能を持つ。そのため、相手との関係が親しくなり、話題内容がより内面性に深入りしていくような2回目以降の会話において発話され、相手との距離を調節しつつ話題が導入されていたと言える。

次に、独話的発話に対する聞き手の反応について考察する。前節で述べたように、独話的発話に対する聞き手の反応としては、言及された話題に積極的な反応を示す場合と、聞き流す場合がある。このような聞き手の反応は、会話参加者の立場に関係すると言える。例えば、独話的発話として取り扱わない会話例 7-1 と 7-2 では、会話参加者が修士論文に関する悩みを抱えていたり（例 7-1）、大学院入試と卒論に追われていたり（例 7-2）すると、同じ立場にある者同士であった。よって、話題導入者による問題提示や感情表現に対して、聞き手はすぐ「分かる」と同感を示すことができていた。一方、独話的発話として扱われる会話例 7-3 と 7-4 では、会話参加者がそれぞれ就職と受験（例 7-3）、音楽ができる人とできない人（例 7-4）という異なる立場にあった。そのため、話題導入者の発話に対して聞き手が即時に同意を示していなかった。しかし、話題導入者が再び話題導入を試みると、聞き手は候補話題を受け入れて、導入者の抱える問題を理解し、同感を示すことで融合的談話（植野 2016）が作り上げられていた。

## 7.5 まとめ

本章では、独話的発話を用いた話題導入の出現傾向や独話的発話に対する聞き手の反応などを分析した。まず、初対面から4回目までの会話において、独話的発話による話題導入はそれほど行われなかったことがわかった。ただし、2回目以降の会話ではその使用率が増加する傾向が見られた。次に、筒井（2012）の分類を援用し、独話的発話で始まる話題内容を「問題の思案」と「感情・感覚などの表出」に大別したうえで、後者の使用率が高いことを指摘した。そして、独話的発話に対する聞き手の反応に着目し、聞き手が関心や共感を言語表現で示して応答する「独話的発話として扱わ

れないもの」と聞き手が笑いのみで反応する「独話的発話として扱われるもの」に分類し、事例を示した。最後に、独話的発話の機能を考察し、独話的発話には、相手との親近感を示すと同時に話題導入に伴う相手へ働きかけを軽減する機能を持つという結論を述べた。

## 終章

### 本研究のまとめと今後の展望

## 終章 本研究のまとめと今後の展望

本章では、まず、8.1節で締めくくりとして、第3章から第7章までの分析結果をまとめる。次に、8.2節と8.3節でそれぞれ本研究の意義と今後の展望について述べる。

### 8.1 本研究のまとめ

本研究では、以下5つの研究課題を設定し、初対面以降の会話を初対面と2回目以降に分けて話題選択と話題導入のあり方を解明した。

話題選択に関わる課題として

課題1：どのような話題が選択されるか解明する。(第3章)

課題2：どのように話題が選択されるか解明する。(第4章)

話題導入に関わる課題として

課題3：質問文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。  
(第5章)

課題4：平叙文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。  
(第6章)

課題5：独話的発話による話題導入がどのような場合に行われるか解明する。  
(第7章)

以下、課題に対応した各章の内容をまとめる。

課題1：どのような話題が選択されるか解明する。(第3章)

この課題に関して、会話回ごとの話題選択肢リストを作成し、初対面会話と2回目以降の会話における話題内容の共通点と相違点を明らかにした。また、初対面会話と2回目以降の会話のいずれにおいても導入される同一話題の踏み込み方の相違も分析した。

具体的には、まず、初対面会話で取り上げられる 9 種類の話題カテゴリーの多くは過半数の組により選択されたため、話題選択には高い共通性があった。一方、2 回目以降の会話の話題選択は、初対面と比べ多様性がみられたが、話題選択スキーマの存在が検証された。具体的には、2 回目以降の会話で取り上げられる話題は、14 種類のカテゴリーにまとめられる。その中には、初対面の際に取り上げられやすい「大学生活」「居住」などもあれば、初対面会話で回避される「家族」「外見」などプライバシーにかかわるものもある。次に、初対面会話と 2 回目以降の会話で選択された同一話題の踏み込み方の相違について、初対面会話では客観的な情報交換がよく行われるが、2 回目以降の会話では、話者の考えやネガティブなことが開示されて、話題内容はより内面性に深入りしていく傾向がみられた。

#### 課題 2：どのように話題が選択されるか解明する。(第 4 章)

この課題に関して、直前の話題との関連の有無に着目し、初対面会話と 2 回目以降の会話の話題選択の型の相違を分析した。また、第 3 章の内容を踏まえ、どのような話題がどのように選択されるのかも解明した。さらに、プライバシーにかかわる話題に焦点を当て、これらの話題がいかに取り上げられるのか明らかにした。

具体的には、まず、初対面会話では情報交換が優先されるため、直前の話題に関連のない「新出型」が最も多く使用されている。2 回目以降の会話では「新出型」が減少しつつあるが、「再生型」の使用が増加する。また、会話の回数に関係なく、「派生型」が多く使用されている。次に、どのような話題がどのように選択されるのかについて、初対面会話で「状況発話」「所属」「出身」などの話題は直前の話題に関連なく導入されやすい一方、「大学生活」「居住」などの話題は直前の話題に関連づけ導入される傾向がある。2 回目以降の会話で、直前の話題に誘発され、導入された話題の種類は初対面と比べると多くなり、10 種類に達している。「大学生活」「進路」など無難な話題のほかに、「家族」「宗教」などのプライバシーにかかわる話題もある。また、直前の話題に関連なく導入された話題の種類も初対面より多くなり、「状況発話」「専門」「居住」などの話題がある。最後に、直前の話題に関連なく導入されたプライバシーにかかわる「外見」と「恋愛」を質的に分析した。この 2 つの話題が導入される際にして、い



れも聞き手領域への踏み込みを緩和する配慮表現が用いられていた。一方、「外見」とは異なり、プライバシー侵害の度合いが高い「恋愛」については、文脈理解に役立つ効果があるメタ表現により、話題転換の唐突さを軽減する配慮がみられた。

課題3：質問文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。

#### (第5章)

これに関して、質問文の定義と認定基準を示した上で、会話の回ごとの質問文による話題導入の出現傾向を示し、質問文の話題内容とその導入ストラテジーを明らかにした。

具体的には、まず、質問文による話題導入数は初対面と比べ、2回目以降の会話では減少する傾向がある。次に、質問文の話題内容について、初対面会話では「大学生活」「専門」「出身」など無難な話題が多いが、2回目以降の会話では、「外見」「金銭」などプライバシーに踏み込んでいくものが導入されるようになる。さらに、初対面会話と2回目以降の会話において同一話題の導入の相違が見られる。初対面会話では、明確な話題境界が現れた箇所に、直前の話題とは関連のないものは質問文により導入される。一方、一定の背景知識が共有されている2回目以降の会話では、直前の文脈の影響により同一話題が再導入され得る。それゆえ、1つの話題がより長く持続、展開される。最後に、話題導入のストラテジーについては、初対面会話で候補話題が相手に受け入れられるように、話題導入の理由を付加することで話題選択の正当性が示されていた。それに対して2回目以降の会話では、相手が候補話題に対する否定的な反応を示した場合、話題導入者が相手の反応に同調し、共感的に会話を促進するストラテジーを用いていた。

課題4：平叙文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。

#### (第6章)

これに関して、平叙文の定義と認定基準を示し、平叙文による話題導入の出現傾向を解明した上で、内容的な側面に着目し、平叙文により導入される話題の種類を分析した。さらに、話題導入のストラテジーにも言及した。

具体的には、まず、平叙文による話題導入は質問文と正反対な傾向があり、初対面会話では使用数が少ないが、2回目以降の会話では増加していく。次に、平叙文の話題内容について、2回目以降の会話における話題の種類が豊富になり、多様性を示している。さらに、同じく平叙文の形で導入される話題については、初対面会話では話し相手と共通点がある客観的な情報交換にとどまるが、2回目以降の会話では、相手に同感を求めるための意見や考えの表出が多くなされる。最後に、会話の回数に関係なく、平叙文を用いて話題を導入する場合、話題間の一貫性を保つストラテジーが用いられていた。具体的には、話題導入者が、直前の話題に言及されていた語をそのまま引用したり、助詞「も」を使用したりすることで直前の話題との関連づけを示していた。

#### 課題5:独話的発話による話題導入がどのような場合に行われるか解明する。(第7章)

これに関して、独話的発話の定義と認定基準を示した上で、独話的発話による話題導入の出現傾向を述べた。さらに、話題の内容的側面に着目し、どのような場合に独話的発話を用いるか分析した。なお、聞き手の反応に焦点を当て、話題導入の相互行為にも触れた。

具体的には、まず、独話的発話による話題導入の頻度は全体的に低いですが、初対面会話と比べると2回目以降の会話ではその出現頻度が高くなり、過半数の組で使用されている。そして、2回目以降の会話における独話的発話ではじまる話題の内容は大きく「問題の思案」と「感情・感覚の表出」に分類できる。さらに、独話的発話に対する聞き手の反応は、独話的発話として扱われるものと扱われないものに分類できる。独話的発話として扱おうとする場合、聞き手は笑いのみで反応し、話題導入発話を聞き流していた。一方、独話的発話によって導入された候補話題に対して、聞き手が実質的言語表現で関心や共感を示した場合、導入発話は独話的発話として扱われなかったとみなすことができる。なお、独話的発話による話題導入には、聞き手と親近感を示すと同時に話題導入に伴う働きかけを軽減する機能がある。

以上、初対面会話と2回目以降の会話に分けた上で話題選択と話題導入の相違を分析し、初対面以降の会話における「何について」「どのように」話すか解明した。次に、

本研究の意義を述べる。

## 8.2 本研究の意義

本研究の意義について、対人関係構築に関する研究への貢献と日本語教育研究への貢献を述べる。

### 8.2.1 対人関係構築に関する研究への貢献

本研究では、初対面以降の会話において、「何について」「どのように」話すのかという話題選択と話題導入を解明した。本研究の分析から得られた知見は、対人関係構築に関する研究へ貢献するものである。以下、先行研究の流れを再度示した上で、本研究の貢献を論じる。

Brown & Yule (1983)が指摘したように、コミュニケーションの機能は、情報伝達に重点が置かれたもの (transactional function) と対人関係や会話参加者の態度に焦点を当てたもの (interactional function) に大別される。会話を通じてコミュニケーションをする目的は、情報伝達だけでなく、相手との良好な人間関係の構築・維持というものであるため、相手に対していかに配慮して会話をするのかというのは重要なコミュニケーションの能力の一つである (三宅 2011)。さらに、会話は、会話参加者同士の連帯感と親密感を生じさせる (中井 2012)。上記のようなコミュニケーションの対人関係構築機能に焦点を当てたこれまでの研究では、話し手がいかに相手との心的距離を調節しつつ会話を展開するのかに注目することで、一定の成果を得ている (三牧 2013、大谷 2019 など)。初対面会話は、対人関係の出発点であり、小川 (2000) が述べるように、初対面において生じる印象は「その後の対人関係に影響を与える」 (小川 2000:173)。ただし、「対人関係は初対面のみでなく、一定の年月をかけてコミュニケーションを繰り返す中で醸成されるもの」 (今田 2015:22) であるため、初対面以降の会話も分析する必要がある。特に、笠原 (1977) では、日本人は「半知り」の人とのコミュニケーションする際に、対人不安が生じやすいと述べられている。また、渡部 (2018:221) では、「知り合いや一度関わったことのある人」に対する対人不安が「二度見知り」と呼ばれ、日本人大学生を対象にした質問紙調査からは、「何を話せばいい

か分からない」といったコミュニケーションの問題が浮かび上がる。この点については、後藤・大坊（2003）は、知り合い同士の会話において円滑な対人関係を築くためには、初対面会話以上に高い対人的スキルが必要であるとしている。しかしながら、これまで知り合い同士の会話に関する研究のほとんどは、意識調査によるものであり、実際の会話に基づいた研究は数少なく、その実態は未解明だといえる。

これに対して、本研究では、日本語母語話者による初対面から4回目までの会話を対象として話題選択と話題導入を分析することで、従来の対象とされてきた初対面におけるコミュニケーションの実態に加えて、知り合いの会話におけるコミュニケーションの実態を記述した。例えば、話題選択については、初対面会話で回避される「家族」「外見」などのプライバシーにかかわる話題は、2回目以降の会話で選択されていた。また、初対面会話で取り上げられる話題が2回目以降の会話で選択される場合、客観的な情報交換にとどまることなく、話者の意見や考えなどより内面的な側面に踏み込み合い、共感が共有されていた。このことから、相手との心的距離を保とうとする初対面会話とは異なり、知り合い同士（2回目から4回目）の会話では、相手との距離を縮め、共感的にコミュニケーションをすることが求められると言える。

また、前述のように話題導入は会話に参加する両者の合意により達成されるものであり、相手から承認を得ることで、導入された候補話題を確立することができる。そこで、本研究では、話題導入者がいかに配慮して話題導入を行うのかを分析した。分析の際には、初対面会話と2回目以降の会話に分けたうえで、対人配慮を示す話題導入ストラテジーについて論じた。例えば、情報交換が優先される初対面会話では、話題選択の正当性を示すストラテジーが用いられていた。一方、背景知識が共有されている2回目以降の会話では、相手の反応に同調し、会話を盛り上げるストラテジーが観察された。これは、2回目以降の会話において、相手の情報を多く得ることよりも、共感的な会話を構築することに主眼が置かれるためと考えられる。

さらに、話題導入の形式については、先行研究では相手に対して情報を要求する質問文や情報を提供する平叙文に注目が集まっていた一方、本研究では、独話的発話による話題導入にも着目して、その機能を分析した。分析からは、2回目以降の会話では、初対面会話と比べ、独話的発話による話題導入がよく行われていることが明らか

となった。聞き手の応答を求めない独話的発話が話題提示として発話されることから、聞き手への働きかけを軽減するという話し手の配慮が考えられる。また、独話的発話は、聞き手に対する親しみや信頼感がないと発話されないことから（長谷川 2017）、初対面会話では話題提示の方法として用いられにくいものと言える。

このように、知り合い同士となった人々による 2 回目以降の会話における話題選択と話題導入を分析することで、初対面会話とは異なる対人配慮を表す言語行動によって、円滑なコミュニケーションが志向されていることが明らかとなった。今後、知り合い同士の会話における話題展開、話題終結などを分析対象に含めることで、包括的な配慮言語行動に関する研究を進め、「二度見知り」という対人不安の解消の一助になると考えられる。

### 8.2.2 日本語教育への示唆

次に、本研究の結果を踏まえて日本語教育への示唆を述べる。

対人関係に応じた適切な言語行動の背後には、参加者の属する社会文化によって規定される規範があり、言語行動はその規範に沿って遂行される（植野 2011）。加藤（2006）は上記のような社会文化による規範を 3 つに下位分類している。それは、(1)文法や発音にかかわる言語規範、(2)コミュニケーションの仕方にかかわる社会言語規範、(3)「言語と結びつかない考え方と行動パターン」に関する社会言語規範である（加藤 2006:2）。日本語学習者が母語話者とコミュニケーションをする際、学習者の言語表現に問題がない場合であっても、その言語使用が社会言語規範から逸脱していると、母語話者から否定的な評価を受けることがあると述べている。よって、日本語教育には、言語規範だけでなく、社会言語規範を取り入れる必要があると考えられる。しかし、これまでの日本語教育では、文法や語彙など言語能力の育成、すなわち言語規範の習得に重点が置かれてきた（中井 2012）。そのため、高い日本語の言語能力を有する学習者であっても、円滑にコミュニケーションができないことや、不適切な言語行動から相手に不快感を与えることがある。このような問題に対し、日本語教育に携わる研究者は、学習者の社会言語能力の育成の観点から、初対面会話のコミュニケーションを主な分析対象として、日本語社会の社会言語規範を明らかにしてきた。例えば、三牧（1999、

2013) は、「文化を共有する集団には一般的あるいは典型的な知識の集合スキーマ (schema) が共有される」(三牧 1999:49-50) と述べ、話題に関する社会言語規範として「話題選択スキーマ」という概念を提唱した。さらに、三牧 (1999) は、初対面会話における適切な話題／回避される話題が一般的知識として共有されているとして、初対面会話における話題選択スキーマの存在を実証的に検証した。三牧の議論を踏まえると、話題選択スキーマが同一文化内において共有される一般常識であるならば、初対面会話だけではなく、2回目以降の会話にもそのようなものが存在すると考えられる。また、話題に関する規範が社会文化によって異なることから、日本語母語話者にとっては暗黙の了解である話題の規範を学習者が察知するのは難しい。そのため、日本語教育の観点からは、会話における話題の規範を学習者に対して明示的に提示する必要がある。しかし、話題選択スキーマに関する研究はいずれも初対面会話に着目したものであり、初対面会話以降の、知り合い同士となった人々の会話には注目されていなかった。これに対して、本研究では、日本語母語話者5組による、初対面から4回目までの会話を対象にして、初対面以降の会話における話題選択スキーマの存在を示した。分析からは、話題選択スキーマが初対面と2回目以降に大別されていることが明らかになった。具体的には、初対面会話の話題選択スキーマは概ね三牧 (1999) と一致している一方で、2回目以降の会話の話題では、初対面会話とは異なる要素を含む14種類の話題カテゴリから話題選択スキーマが形成されていた。この14種類の話題カテゴリには、初対面会話における話題選択スキーマと同様の「大学生活」「居住」「出身」などの無難な話題以外に、初対面会話では回避される「家族」「金銭」などのプライバシーにかかわる話題も含まれていた。

また、話題に関する社会言語規範には、内容面の話題選択スキーマだけでなく、「話題の提示に関する運用面の規範」がある (加藤 2006:15)。これに関して、上記の三牧 (1999) が示した「話題選択スキーマ」は、話題選択や話題導入、展開などを包括的に捉える「話題管理スキーマ」<sup>43</sup> (三牧 2016) の一部であった。これに対して、本研究では、初対面以降の会話においてみられる、話題導入ストラテジーに関する規範を

---

<sup>43</sup> 三牧 (2016) は、話題管理スキーマという概念を提唱しているが、初対面会話話題選択スキーマ以外のスキーマには言及していない。

含めて分析した。その結果、平叙文による話題導入の場合には、話題間の一貫性を保つストラテジーが用いられていることが分かった。これまで、学習者による唐突な話題導入が母語話者にとって不自然に感じられ、否定的な評価につながる可能性が指摘されてきた。また、話題導入の研究においては、話題開始表現の不適切な使用が注目されていた。このような話題開始表現に関する知見に加えて、本研究の分析結果からは、話題間の一貫性を保って新話題を導入することの必要性が示唆された。上記より、話題の適切さという内容面だけでなく、話題導入などの運用面に関する規範を含めて、話題管理スキーマを実証的に検討することで、日本語学習者のコミュニケーションにおいて遭遇する「何について」「どのように」話せばよいかという問題の解決に寄与できると考える。

### 8.3 今後の展望

本研究には、以下のような発展の可能性がある。

まず、話題に関する言語・非言語行動をめぐる包括的な研究である。本研究では、話題選択と話題導入のみに着目しており、話題展開、話題終了を扱わなかった。これに関する記述を補充することで、話題管理スキーマの実態が解明されることが考えられる。また、この知見は日本語学習者のコミュニケーションにおける会話の問題を解消するための一助となる。

次に、参加者の属性を考慮した横断的研究である。本研究では、女性同士・同学年同士の会話を対象としたが、今後、性別や学年などの属性を統制してデータを収集することで、属性ごとの特徴や属性間での差異が明らかになると考える。三牧（1999）は、初対面会話話題選択スキーマについて、参加者の性別や学年に関係なく共有される一般的知識であると述べている。本研究で提出した2回目以降の会話における話題選択スキーマは、参加者の性別や学年からどのような影響を受けるか、検討する余地がある。参加者の属性に関しては、言語間の対照研究も期待される。これまでの日本語教育において、中国語母語話者による突発的な話題転換が母語話者に違和感を与えることが指摘されている。そのため、日本語母語話者同士、中国語母語話者同士の会話を対象として、話題導入における言語・非言語行動を分析することで、両社会文化

的規範の相違を解明する必要がある。

最後に、話題選択および親しさに関する縦断的研究である。今回は2回目～4回目の会話を「2回目以降の会話」と一括りしたうえで、初対面会話との比較を行った。しかし、4回目の会話においても会話参加者は未だ浅い関係にあり、5、6、7回と、会話回を重ねることでこの後も親しさを増していくと考えられる。そのため、縦断的に、会話回ごとの話題に関する言語・非言語行動の変容を調査し、分析することで親密化のプロセスの一端を明らかにすることができる。

上記3つの方向性に関しては、今後検討したい。



# 付録

## 付録

### 付録1 初対面会話用のアンケート調査

本日は調査に協力していただき、誠にありがとうございます。以下の質問にお答えくださいますようお願い致します。**考え込まずに、直感的に感じたままお答えください。**回答の内容は研究以外の目的に使用することは決してありません。すべてデータは厳重に管理致しまして、個人情報の保護に最大限の配慮を致します。

会話の自然さについて（録画・録音の時の初対面の人に対する話題や話し方は録画・録音以外の時、同じであるかどうか。）

（1）ただいまの会話における話題の自然さについて、どう思いますか。

- 1 とても自然だった
- 2 かなり自然だった
- 3 特に不自然ではなかった
- 4 あまり自然ではなかった
- 5 とても自然ではなかった

4、5のどちらを選んだ方：

なぜそう思いますか。

どこが不自然だったと思いますか。

（2）ただいまの会話における話し方の自然さについて、どう思いますか。

- 1 とても自然だった
- 2 かなり自然だった
- 3 特に不自然ではなかった
- 4 あまり自然ではなかった
- 5 とても自然ではなかった

4、5のどちらを選んだ方：

なぜそう思いますか。

どこが不自然だったと思いますか。

(3) 録音されていることを意識しましたか。

- 1 かなり意識した
- 2 すこし意識した
- 3 あまり意識しなかった
- 4 全然意識しなかった

1、2のどちらを選んだ方：録音を意識したことがあなたの話の内容と話した方に影響を与えたと思いますか。

- 1 非常に影響した
- 2 すこし影響した
- 3 特に影響しなかった
- 4 全然影響しなかった

1、2のどちらを選んだ方：どのように影響をしたかと思いますか。

(4) 録画されていることを意識しましたか。

- 1 非常に意識した
- 2 すこし意識した
- 3 あまり意識しなかった
- 4 全然意識しなかった

1、2のどちらを選んだ方：録画を意識したことがあなたの話の内容と話した方に影響を与えたと思いますか。

- 1 非常に影響した
- 2 すこし影響した
- 3 特に影響しなかった
- 4 全然影響しなかった

1、2のどちらを選んだ方：どのように影響をしたかと思いますか。

(5) 今回実験の場所は会話に影響を与えたと思いますか。

- 1 非常に影響した
- 2 すこし影響した
- 3 特に影響しなかった
- 4 全然影響しなかった

1、2のどちらを選んだ方：どのように影響をしたかと思いますか。

影響を最小限にするために、どこで実験を行なったらいいと思いますか。

## 付録2 初対面会話用のインタビュー

私は日常会話での振る舞いの特徴を研究しております。インタビューは会話を分析する時重要な参考資料になりますので、どうかよろしくお願い致します。考え込まずに、直感的に感じたままお答えください。回答の内容は会話の相手に伝わることは絶対ありません。回答の内容は研究以外の目的に使用することは決してありません。すべてデータは厳重に管理致しまして、個人情報保護に最大限の配慮を致します。

1. いい印象を与える行動は何ですか。

(2-3の質問は自分の会話行動に関するものです)

2. ただいまの会話ではいい印象を与える行動を取るつもりでしたか。なぜですか。

3. ただ今の会話ではいい印象を与える行動を取りましたか。取ったら、どんな行動か教えてください。

4. 悪い印象を与える行動は何ですか。

(5の質問は自分の会話行動に関するものです)

5. ただいまの会話では悪い印象を与える行動を取らないつもりでしたが、相手に悪い印象を与えてしまったことはありますか。あったら、教えてください。

(6-7は相手の会話行動に関するものです)

6. ただいまの会話の中で、相手の会話行動に対するいい印象を持ったことがありますか。あったら教えてください。

7. ただいまの会話の中で、相手の会話行動に対する悪い印象をもったことがありますか。あったら教えてください。

(8 - 9 は相手の会話者との将来の関係性に関するものです)

8. 会話後、相手の会話者と友達になりたいですか。実験以外の時間会う可能性が  
ありますか。

9. 相手のことをもって知りたいですか。たとえば、どんなところですか。

### 付録3 2回目以降の会話用のアンケート調査

本日は調査に協力していただき、誠にありがとうございます。以下の質問にお答えくださいますようお願い致します。考え込まずに、直感的に感じたままお答えください。回答の内容は研究以外の目的に使用することは決してありません。すべてデータは厳重に管理致しまして、個人情報の保護に最大限の配慮を致します。

会話の自然さについて（録画・録音の時相手に対する話題や話し方は録画・録音以外の時、同じであるかどうか。）

（1）ただいまの会話における話題の自然さについて、どう思いますか。

- 1 とても自然だった
- 2 かなり自然だった
- 3 特に不自然ではなかった
- 4 あまり自然ではなかった
- 5 とても自然ではなかった

4、5のどちらを選んだ方：  
なぜそう思いますか。

どこが不自然だったと思いますか。

（2）ただいまの会話における話し方の自然さについて、どう思いますか。

- 1 とても自然だった
- 2 かなり自然だった
- 3 特に不自然ではなかった
- 4 あまり自然ではなかった
- 5 とても自然ではなかった

4、5のどちらを選んだ方：  
なぜそう思いますか。

どこが不自然だったと思いますか。

(3) 録音されていることを意識しましたか。

- 1 かなり意識した
- 2 すこし意識した
- 3 あまり意識しなかった
- 4 全然意識しなかった

1、2のどちらを選んだ方：録音を意識したことがあなたの話の内容と話した方に影響を与えたと思いますか。

- 1 非常に影響した
- 2 すこし影響した
- 3 特に影響しなかった
- 4 全然影響しなかった

1、2のどちらを選んだ方：どのように影響をしたかと思いますか。

(4) 録画されていることを意識しましたか。

- 1 非常に意識した
- 2 すこし意識した
- 3 あまり意識しなかった
- 4 全然意識しなかった



1、2のどちらを選んだ方：録画を意識したことがあなたの話の内容と話した方に影響を与えたと思いますか。

- 1 非常に影響した
- 2 すこし影響した
- 3 特に影響しなかった
- 4 全然影響しなかった

1、2のどちらを選んだ方：どのように影響をしたかと思いますか。

(5) 今回実験の場所は会話に影響を与えたと思いますか。

- 1 非常に影響した
- 2 すこし影響した
- 3 特に影響しなかった
- 4 全然影響しなかった

1、2のどちらを選んだ方：どのように影響をしたかと思いますか。

影響を最小限にするために、どこで実験を行なったらいいと思いますか。

#### 付録4 2回目以降の会話用のインタビュー

私は日常会話での振る舞いの特徴を研究しております。インタビューは会話を分析する時重要な参考資料になりますので、どうかよろしくお願い致します。考え込まずに、直感的に感じたままお答えください。回答の内容は会話の相手に伝わることは絶対ありません。回答の内容は研究以外の目的に使用することは決してありません。すべてデータは厳重に管理致しまして、個人情報保護に最大限の配慮を致します。

1. 今回の会話の感想について、話してください。

(2-4は相手の会話者との将来の関係性に関するものです)

2. 会話後、相手の会話者と友達になりたいですか。実験以外の時間会う可能性がありますか。

3. 相手のことをもっと知りたいですか。たとえば、どんなところですか。

4. 今回の会話を通して、相手に対して、どう思いますか。相手との仲はどうなっていますか。これからどうなっていくと思いますか。

(5-9の質問は自分の会話行動に関するものです)

5. ただ今の会話ではいい印象を与える行動を取ったつもりでしたか。なぜですか

6. ただ今の会話ではいい印象を与える行動を取りましたか。取ったら、どんな行動か教えてください。

7. 今回の会話は前回の会話と比べて、違う会話行動を取りましたか。取ったら、どんな行動か教えてください。

8. ただ今の会話では悪い印象を与える行動を取らないつもりでしたが、相手に悪い印象を与えてしまったことはありますか。あったら、教えてください。

9. 今回の会話は前回の会話と比べ、悪い印象を与えてしまった行動を取りましたか。取ったら、どんな行動か教えてください。

(10-13 は相手の会話行動に関するものです)

10. ただいまの会話の中で、相手の会話行動に対していい印象を持ったことがありますか。あったら教えてください。

11. 今回の会話は前回の会話と比べ、相手の会話行動に対していい印象を持ったことがありますか。あったら教えてください。

12. ただいまの会話の中で、相手の会話行動に対して悪い印象をもったことがありますか。あったら教えてください。

13. 今回の会話は前回の会話と比べ、相手の会話行動に対して悪い印象を持ったことがありますか。あったら教えてください。

## 参考文献

## 参考文献

- 池谷知子 (2012)「終助詞「っと」「っけ」の機能—「っと」「っけ」で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手—」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要 言語科学研究所篇』15,11-25.
- 伊豆原英子 (2002)「独話指導の見直しに向けて—「対話」という視点を取り入れることの必要性—」『愛知学院大学教養部紀要』49(4),31-44.
- 井出里咲子 (2013)「ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性—震災体験の語りの分析より—」佐藤彰・秦かおり (編)『ナラティブ研究の最前線—人は語ることで何をなすのか—』,東京:ひつじ書房,43-63.
- 今田恵美 (2015)『対人関係構築プロセスの会話分析』,大阪:大阪大学出版会.
- 任栄哲・井出里咲子 (2004)『箸とチョッカラー—ことばと文化の日韓比較』,東京:大修館書店.
- 林河運 (2008)「日韓初対面会話の質問による話題導入の対照研究—ポライトネスの観点から—」『現代社会文化研究』41,149-166.
- 殷夢茜・青木紀久代 (2018)「在日中国人留学生の異文化適応に関する質的研究」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』19,49-59.
- 植野貴志子 (2011)「聞き手行動の社会言語学的考察」『日本女子大学紀要』61,57-68.
- 植野貴志子 (2016)「融合的談話の「場の理論」による解釈」『待遇コミュニケーション研究』13,18-34.
- 宇佐美まゆみ (1993a)「初対面二者間における会話のストラテジーの分析—対話相手に応じた使い分けという観点から—」『学苑』647,37-47.
- 宇佐美まゆみ (1993b)「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー—話者間の力関係による相違—日本語の場合—」『ヒューマン・コミュニケーション研究』21,25-40.
- 宇佐美まゆみ (1994)「性差か力 (power) の差か—初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より—」『ことば』15,53-69.
- 宇佐美まゆみ (1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662,27-42.
- 宇佐美まゆみ (1996)「初対面二者間会話における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」『ことば』17,44-58.
- 宇佐美まゆみ (2001)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」国立

- 国語研究所（編）『談話のポライトネス』,東京:国立国語研究所,9-58.
- 宇佐美まゆみ（2020）「基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年改訂版」宇佐美まゆみ（編）『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』,東京:ひつじ書房,17-42.
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美（1995）「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」『日本語学・日本語教育論集』2,130-145.
- 白田泰如（2020）「「嫌な経験」の語りにおける笑い」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』5,348-356.
- 大谷麻美（2018）「日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開—共-選択の観点からの分析—」『社会言語科学』21（1）,96-112.
- 大谷麻美（2019）「日本語初対面会話における話題導入の相互行為—プロセスと対人関係機能—」『京都女子大学人文論叢』67,1-27.
- 大場美和子（2007）「三者間グループ会話場面における話題の開始—接触場面と母語場面における知人関係の会話の分析—」村岡英裕（編）『接触場面と言語管理の学際的研究—接触場面の言語管理研究 vol.5—』,千葉:千葉大学大学院人文社会科学研究科,37-52.
- 大場美和子（2012）『接触場面における三者会話の研究』,東京:ひつじ書房.
- 大場美和子・中井陽子（2020）「会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析」『社会言語科学』22(2),62-77.
- 岡崎渉（2018）「非デスマス形の機能による分類方法の検討—情意的態度と聞き手目当て性の観点から—」『兵庫教育大学研究紀要』52,19-31.
- 岡崎渉（2020）「デスマス形会話における独話的発話の談話機能」『言語表現研究』36,47-60.
- 小川一美（2000）「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要—心理発達科学』47, 173-183.
- 奥山洋子（2000）「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話」『日本学報』45,117-132.
- 奥山洋子（2005）「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較—日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に—」『社会言語科学』8（1）,69-81.
- 荻原稚佳子（2015）「日中母語話者の繰り返しを含む会話の連鎖からみえる会話スタ

- イルー質問-応答場面の連鎖を中心に」『多文化関係学』12,39-55.
- 呉暁榮 (2017)「話題展開に見られる自己開示:日本語母語話者と韓国人日本語学習者の初対面から3回の会話を通して」『言語学論叢オンライン版』10,63-83.
- 笠原嘉 (1977)『青年期—精神病理学から—』東京:中央公論新社.
- 加藤豊二 (1999)「談話標識の「まあ」についての一考察」『日本語学・日本語論集』6,21-36.
- 加藤好崇 (2006)「接触場面における文体・話題の社会言語規範」『東海大学紀要 留学生教育センター』26,1-17.
- 釜田友里江 (2017)「日本語会話における共感の仕組み—自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相—」名古屋大学博士論文.
- 釜田友里江 (2018)「愚痴に対する共感表明—愚痴の語り方と聞き手の反応の観点から—」村田和代 (編)『聞き手行動のコミュニケーション学』,東京:ひつじ書房,263-283.
- 神尾昭雄 (1990)『情報のなわ張り理論』,東京:大修館書店.
- 神尾昭雄 (2002)『続・情報のなわ張り理論』,東京:大修館書店.
- 河内彩香 (2003)「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』3,41-55.
- 河内彩香 (2009)「日本語の雑談における話題の展開方法」『東京大学留学生センター教育研究論集』15,41-58.
- 季珂南 (2014)「日中大学生接触場面の初対面会話における話題転換—「ラポールマネジメント」の視点から—」『日本語教育』157,17-31.
- 季珂南 (2015)「日中大学生接触場面の初対面雑談会話におけるラポールマネジメントトピックの選択および話題部の導入と終了を中心に—」名古屋外国語大学博士論文.
- 金銀花 (2009)「接触場面における話題選択及び話題開始の傾向」藤森弘子・花園悟・楠木徹也・宮城徹・鈴木智美 (編)『日本語教育学研究への展望:柏崎雅世教授退職記念論集』,東京:ひつじ書房,281-297.
- 串田秀也 (1997)「会話のトピックはいかにつくられていくか」谷泰 (編)『コミュニケーションの自然誌』,東京:新曜社,173-209.
- 串田秀也 (2006)『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性をめぐる参加の組織化—』,京都:世界思想社.

- 熊谷智子・石井恵理子 (2005)「会話における話題の選択—若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から—」『社会言語科学』, 8(1), 93-105.
- 小松翠 (2016)「中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について」『高等教育と学生支援:お茶の水女子大学紀要』7,128-139.
- 後藤学・大坊郁夫 (2003)「大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか?—コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連—」『対人社会心理学研究』3,57-63.
- 後藤学・大坊郁夫 (2008)「中国人大学生が苦手・得意とするコミュニケーション場面に関する研究」『対人社会心理学研究』8,43-50.
- 蔡程翔 (2016)「初対面からの継続的会話にみる話題転換—日台の接触場面データをもとに—」,三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也 (編)『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』,東京:くろしお出版,21-36.
- 蔡諒福 (2011a)「社会人初対面会話における話題選択に関する一考察—日台中のデータをもとに—」『大阪大学言語文化学』20,103-115.
- 蔡諒福 (2011b)「初対面会話における話題転換構造に関する一考察:日中社会人のデータをもとに」『異文化コミュニケーション研究』23,1-19.
- 蔡諒福 (2012)「母語場面初対面会話における話題の派生に関する一考察—日中社会人のデータをもとに—」『日中言語対照研究論集』14,49-65.
- 佐久間まゆみ (1987)「「文段」認定の一基準 (I) —提題表現の統括—」『文藝言語研究言語編』11,89-135.
- 櫻井和美 (2015)「独話的発話を用いた発話意図の表示の研究—配慮表現の観点から—」『日本語コミュニケーション研究論集』4,74-82.
- ザトラウスキー・ポリリー (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』,東京:くろしお出版.
- 塩田英子 (2005)「独り言と他者の認識」『英語英米文学研究』33,62-82.
- 重光由加 (2020)「質問行為に伴う配慮—初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より—」宇佐美まゆみ (編)『日本語の自然会話分析—BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明—』,東京:くろしお出版,85-111.
- 嶋原耕一 (2017)「接触場面初対面会話の話題転換における話題の終了表現及び開始表現—新出型の話題転換に焦点を絞って—」『日本語教育実践研究』5,34-50.
- 杉戸清樹 (1987)「発話のうけつぎ」国立国語研究所 (編)『国立国語研究所報告 92



- 談話行動の諸相—座談資料の分析』,東京:三省堂,68-106.
- 鈴木香子 (1995)「内容区分調査による対話の『話段』設定の試み」『國文目白』34,76-84.
- 鈴木睦 (1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」窪田行則 (編)『視点と言語行動』,東京:くろしお出版,45-76.
- 関崎博紀 (2016)「接触場面初対面会話における話題スキーマ—日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆—」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31,17-32.
- 高木丈也 (2018)『日本語と朝鮮語の談話における文末形式と機能の関係—中途終了発話文の出現を中心に—』,東京:三元社.
- 高梨克也 (2009)「参与構造」坊豊真弓・高梨克也 (編)『多人数インタアクションの分析手法』,東京:オーム社,156-171.
- 田所希佳子 (2013)「初対面会話教育における重要項目の選定に関する考察: 母語話者・非母語話者に対する意識調査から」『早稲田日本語研究』22,13-23.
- 田中奈緒美 (2015)「話題転換時における談話標識の使用に関する日中比較」『島根大学外国語教育センタージャーナル』10,131-141.
- 田中奈緒美 (2018)「話題の関連性を示すメタ言語表現」『言語文化学研究 (言語情報編)』13,55-70.
- 田中妙子 (1998)「会話における質問発話の効果について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11,265-284.
- 田中圭・宮前諄子 (2016)「浅い関係で用いられるスキルに関する研究」『カウンセリング研究』49,139-150.
- 谷智子 (2011)「初対面からの継続的対面データにみる話題のデフォルト化—ディスコースレベルのポライトネスの観点から—」『大阪大学言語文化学』20,75-88.
- 谷智子 (2012)「ディスコースポライトネスの観点から見る相互行為の変容」大阪大学博士論文.
- 谷智子 (2016)「初対面からの縦断的会話データにみる相互行為的デフォルトの構築—ディスコースレベルのポライトネスの観点から—」三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也 (編)『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』,東京:くろしお出版,149-168.
- 張瑜珊 (2006)「台湾と日本の女子大生同士における初対面会話の対照研究—話題選

- 択について一」『言語文化と日本語教育』31,110-113.
- 張瑜珊 (2008)「台湾の女子大生同士と日本の女子大生同士の初対面会話の対照分析  
一会話の内容面について一」張威 (編)『日本語言文化研究一日本学框架与国际化  
视角一』,北京:清华大学出版社,451-465.
- 趙翻 (2012)「日本語と中国語における謝罪表現の対照研究一家族と親友間の異なり  
に注目して一」『東洋大学大学院紀要』49,98-124.
- 趙凌梅 (2014)「話題選択スキーマとストラテジーの日中対照研究一初対面会話デー  
タを用いて一」『国際文化研究』20,145-157.
- 全鍾美 (2009)「初対面場面における話題回避に関する質問紙調査一日本と韓国の大  
学(院)生を対象に一」『言葉と文化』10,95-111.
- 筒井佐代 (2012)『雑談の構造分析』,東京:くろしお出版.
- 富樫純一 (2002)「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7,15-31.
- 中井陽子 (2003a)「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言  
語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16,71-95.
- 中井陽子 (2003b)「話題開始部で用いられる質問表現一日本語母語話者同士および  
母語話者/非母語話者による会話をもとに一」『早稲田大学日本語教育研究』2,37-  
54.
- 中井陽子 (2012)『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』,東京:ひつ  
じ書房.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008)「特集「相互行為における言語使用:会話デー  
タを用いた研究」について」『社会言語科学』10 (2) ,13-15.
- 西田司 (1996)「初対面 30 分間の話題にみる日米の自己開示」『国際関係研究 国際  
文化編』17 (2) ,39-55.
- 仁田義雄 (1989)「述べ立てのモダリティと人称現象」『阪大日本語研究』1,31-62.
- 日本語記述文法研究会 (2003)『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』,東京:くろ  
しお出版.
- 丹羽空・丸野俊一 (2010)「自己開示の深さを測定する尺度の開発」『パーソナリ  
ティ研究』18 (3) ,196-209.
- 橋内武 (1999)『ディスコース一談話の織りなす世界一』,東京:くろしお出版.
- 長谷川葉子 (2017)「三層モデルによる独り言の分析」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚  
明・金谷優・長野明子 (編)『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』,東京:

- 開拓社,26-43.
- 花村博司 (2014)「日本語の雑談会話における話題転換研究—話題転換はどこで行われ、どう分類されるか—」『言語文化科学研究』9,71-99.
- 花村博司 (2015)「日本語の会話における話題転換表現—新出型・再開型・前提提示型という話題転換の型による使い分け」『社会言語科学』18 (1) ,75-92.
- 早川治子 (2000)「相互行為としての「笑い」—自・他の領域に注目して—」『文教大学文学部紀要』14 (1) ,23-43.
- 林宅男 (2008)『談話分析のアプローチ—理論と実践—』,東京:研究社.
- 原由美子 (2005)「ケータイと若者のコミュニケーション—関西大学社会学部助教授 辻大介氏—」『放送研究と調査』55(2),52-59.
- 平本毅 (2011)「話題アイテムの掘み出し」『現代社会学理論研究』5,101-119.
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008)「『留学生 30 万人計画』 骨子」.最終アクセス 2021 年 12 月12 日  
([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afieldfile/2019/09/18/1420758\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2019/09/18/1420758_001.pdf))
- 前田直子 (2004)「文末表現「みたいな。」の機能」『言語』33(10),54-57.
- 増田将伸 (2006)「質問を用いた働きかけのストラテジー—質問の二面性の反映として—」『待遇コミュニケーション研究』4,49-63.
- 丸山岳彦 (2015)「発話の単位」小磯花絵 (編)『話し言葉コーパス設計と構築』,東京:朝倉書店,54-80.
- 南不二男 (1972)「日常会話の構造—とくにその単位について—」『月刊言語』1 (2) ,28-35.
- 南不二男 (1981)「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として—」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会 (編)『方言学論叢 I :藤原与一先生古稀記念論集』,東京:三省堂,87-112.
- 南不二男 (1985)「質問文の構造」水谷静夫 (編)『朝倉日本語新講座 4 文法と意味 II』,東京:朝倉書店,39-74.
- 南不二男 (1987)「談話行動論」国立国語研究所 (編)『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』,東京:三省堂,5-35.
- 三牧陽子 (1999)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」『日本語教育』103,49-58.

- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『多文化社会と留学生交流』 4,37-53.
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』,東京:くろしお出版.
- 三牧陽子 (2016) 「初対面接触場面における話題管理—接触経験豊富な社会人データをもとに—」三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也 (編) 『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』,東京:くろしお出版,3-20.
- 三宅和子 (2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』,東京:ひつじ書房.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』 62,101-111.
- メイナード・K・泉 (1993) 『会話分析』,東京:くろしお出版.
- 山岡政紀 (2018) 「日本語配慮表現の分類と語彙リストについて」『日本語コミュニケーション研究論集』 7,3-11.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018) 『新版日本語語用論入門—コミュニケーション理論から見た日本語—』,東京:明治書院
- 山本綾 (2003) 「話題転換についての一考察—アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として—」『えちゅーど』 33,57-81.
- 楊虹 (2011) 「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較—参加者間の相互行為に注目して—」『言語文化研究』 22(3),185-200.
- 横瀬利枝子 (2009) 「生理用品の受容とその意義」『人間科学研究』 22(1),31-45.
- 吉野和美 (2016) 「独話的対人発話の研究—ポライトネスの観点から—」『日本語コミュニケーション研究論集』 5,51-60.
- 李麗燕 (1995) 「日本語母語話者の会話管理に関する一考察—日本語教育の観点から—」『日本語教育』 87,12-24.
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』,東京:くろしお出版.
- 「留学生 30 万人計画」関係省庁会議 (2021) 「「留学生 30 万人計画」骨子検証結果報告」.最終アクセス 2021 年 12 月 12 日  
([https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/jikkoukaigi\\_wg/koutou\\_wg/dai8/siryou1-3.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/jikkoukaigi_wg/koutou_wg/dai8/siryou1-3.pdf))

- 若松史恵 (2020) 「母語話者の話題開始部冒頭に現れる言語形式—学習者との比較から」『日本語／日本語教育研究』11,51-66.
- 渡部敦子 (2018) 「「二度見知り」はなぜ生じるか?」『日本心理学会第82回大会発表論文集』,221.
- Bakeman, R., & Gottman, J. M. (1986) *Observing Interaction: An Introduction to Sequential Analysis*. Cambridge University Press.
- Barnlund, D. C. (1975) *Public and private self in japan and the United States: communicative styles of two cultures*. Simul Press. 西山千・佐野雅子 (訳) (1979) 『日本人の表現構造—公的自己と私的自己・アメリカとの比較— 新版』,東京:サイマル出版社.
- Berger, C. R., & Calabrese, R. (1975) Some explorations in initial interactions and beyond: Toward a developmental theory of interpersonal communication. *Human Communication Research*, 1, 99-112.
- Brown, G., & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (ペネロピ・ブラウン・ステイヴン・C・レヴィンソン著, 齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野寿憲・山下早代子訳(2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象—』,東京:研究社.)
- Button, G., & Casey, N. (1985) Topic nomination and topic pursuit. *Human Studies*, 8 (1) ,3-55.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press. (レヴィンソン・S・C 著, 安井稔・奥田夏子訳 (1990) 『英語語用論』,東京:研究社.)
- Maynard, D., & Zimmerman, D. (1984) Topical talk, ritual and the social organization of relationships. *Social psychology quarterly*, 47 (4) ,301-316.
- McLaughlin, Margaret L., & Cody, Michael J. (1982) Awkward Silences: Behavioral Antecedents and Consequences of the Conversational Lapse. *Human Communication Research*, 8, 299-316.
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In Atkinson, J. M., & Heritage, J. *Structures of social action: studies in conversation analysis*. Cambridge university press, 51-101.

Schegloff, E. A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis. Vol.1.* Cambridge university press.

Schegloff, E. A. (1972) Notes on a Conversational Practice: Formulating Place. In  
Sudnow, David (ed.) *Studies in Social Interaction.* New York: The Free Press, 75-  
119.

Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973) Opening up Closings. *Semiotica*, 8, 289-327.

## 既に刊行された論文及び学会発表との関連

## 既に刊行された論文及び学会発表との関連

### 序章、第1章、第2章、終章

新規執筆

### 第3章

方敏 (2019) 「日中初対面会話における自己開示の内容について」第11回漢日対比言語学シンポジウム 口頭発表 2019年8月24日西安外国語大学にて

方敏 (2020a) 「聞き手の話題へ参加度からみる日中の話題展開スタイル」第21回東アジア日本語・日本文化フォーラム 口頭発表 2020年2月22日九州大学へて『第21回東アジア日本語・日本文化フォーラム予稿集』38-41.

方敏 (2020b) 「初次見面時話題展開方式的中日対照研究」《汉日语言对比研究论丛》第11辑,321-334. 【研究論文 (査読付き)】

方敏 (2020c) 「初対面以降の会話における話題選択及び変化に関する一考察—日本人女子学生による初対面から4回目までの会話をもとに—」『ことば』41,89-105. 【研究論文 (査読付き)】

方敏 (2021a) 「親密化過程における話題選択の変化」社会言語科学会第45回大会 口頭発表 2021年3月15日 オンライン 『社会言語科学会第45回大会発表論文集』,144-147.

### 第4章

方敏 (2021e) 「文脈関連性からみる話題選択—初対面からの縦断的な会話をもとに—」現代日本語研究会第30回ワークショッププログラム 口頭発表 2021年7月4日 オンライン

方敏 (2021h 印刷中) 「初対面以降の会話における話題選択—直前の話題との関連性という観点から—」『ことば』42 【研究論文 (査読付き)】

### 第5章

方敏 (2021g) 「初対面からの縦断的な会話における疑問文による話題導入」『日本語／日本語教育研究』12,149-163. 【研究論文 (査読付き)】



## 第6章

方敏 (2021b) 「初対面からの縦断的な会話における話題導入」『日中文化学報』国際若手研究者ワークショップ 2021—東アジアの文学・言語と歴史— 口頭発表  
2021年3月16日 つくば国際会議場にて

方敏 (2021c) 「初対面以降の会話における平叙文による話題導入」第22回東アジア日本語・日本文化フォーラム 口頭発表 2021年3月20日 オンライン 『第22回東アジア日本語・日本文化フォーラムプログラム予稿集』36-39.

方敏 (2021d) 「初対面以降の会話における話題開始表現について—日本語母語話者同士の初対面から4回目までの会話をもとに—」『日中文化学報』2,63-75. 【研究論文 (査読付き)】

## 第7章

方敏 (2021f) 「初対面以降の会話における平叙文による話題導入—独話的発話を中心に—」日本語／日本語教育研究会第13回大会 ポスター発表 2021年9月26日 オンライン

(なお、すべて既刊論文及び学会発表に加筆・修正を施している)

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々の世話になりました。

まず、指導教官であり、本論文の査読を務めていただいた関崎博紀先生に多大なご指導とご激励を賜りました。談話分析の分野で研究ができたのは、関崎先生との出会いに恵まれたからこそです。当時談話分析について何も分からなかった私を引き受けていただき、大変感謝しております。最初研究テーマで迷う時、いつも「夢がある研究をなさい」と言って、励ましていただきました。ようやく初対面以降の会話という研究対象が決まった際も、会話実験の収集方法やアンケート調査の設計などについて手取り足取り丁寧に終始有益かつ懇切なるご指導をいただきました。さらに、せっかちな私を理解してくださり、辛抱強く見守ってくださいました。関崎先生のご指導とご激励がなければ、本論文の執筆はできませんでした。

副指導教官であり、本論文の査読でもある井出里咲子先生と木戸光子先生にも大変お世話になりました。論文の構成や方向性を導いてくださる多くの的確なご指導をいただいたおかげで、論文の整合性、オリジナリティなどについて改めて考え直すことができました。

本論文のネイティブチェックをしていただいた荒井愛理さん、大槻薫子さん、酒井晴香さんに感謝致します。データコーディングの時、同ゼミの大竹春菜さんから有益なご助言をいただきました。ここで、全ての名前をあげることができませんが、様々なご助言をくださった筑波大学・学外の先生方々、会話資料収集や文字化作業にご協力いただいた方々、いつも励ましていただいた同大学院の学友に感謝申し上げます。

また、中国国家留学基金委に感謝致します。2017年から2020年にかけて奨学金をいただいたおかげで、研究に集中して取り組むことができました。

最後に、いつも温かく見守り続けてくれた家族、友人に心から感謝します。